白河街区跡発掘調査報告書

２０１９

株式会社　文化財サービス

例　言

1．本書は京都市左京区岡崎天王町 26 番地５で実施した、白河街区跡の発掘調査報告書である。（京都市番号 18S217）

2．調査は当地の土地開発に伴い、三菱地所株式会社より株式会社文化財サービス（以下、文化財サービス）に委託され実施した。調査は、大西健吾（文化財サービス）が担当した。

3．調査期間は、平成 31 年３月 25 日～令和元年７月 12 日である。

4．調査面積は、531 ㎡である。

5．本文・図中の方位・座標は世界測地系 平面直角座標系Ⅵによる。標高は、T．P．（東京湾平均海水面高度）である。

6．土層および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。

7．本書の執筆は大西健吾が行い、編集は大西、野地ますみ、米倉美穂（以上、文化財サービス）が担当した。

8．発掘調査の遺構撮影は主に大西が担当し、望月麻佑（文化財サービス）が補助した。出土遺物の撮影は楠華堂（内田真紀子氏）に依頼した。

9．調査に係る資料は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。

10．発掘調査および整理作業の参加者は以下の通りである。

（発掘調査）小林一浩、辰巳陽一、田中慎一、田邊貴教、辻 純一、望月麻祐、吉岡創平（以上、文化財サービス）、株式会社京カンリ

（整理作業）赤羽 香、上野恵己、植村明男、内牧明彦、大谷 弘、甲田春奈、塩地宏行、中野キヌヨ、西尾知子、野地ますみ、本間愛子、望月麻佑、森下直子、吉岡創平、米倉美穂、若山美帆（以上、文化財サービス）

11．自然科学分析は、土壌分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社、岩石分析については公益財団法人益富地学会館に依頼した。

12．調査期間中は、三菱地所株式会社並びに地権者である真宗大谷派岡崎別院に全面的なご協力を賜った。

13．発掘調査・整理作業において、下記の方から様々なご教示をいただいた。記して感謝いたします。（敬称略）

國下多美樹（龍谷大学）、鈴木久男（京都産業大学）、西山良平（京都大学）

目　次

第Ⅰ章　調査の経緯
1　調査に至る経緯…… 1
2　調査の経過…… 1
3　測量基準点の設置と地区割り…… 2

第Ⅱ章　位置と環境
1　地理的環境…… 5
2　歴史的環境…… 5
3　既往の調査…… 5

第Ⅲ章　調査成果
1　基本層序…… 7
2　遺構 …… 8
（1）平安時代の遺構 …… 8
（2）鎌倉時代～室町時代の遺構 …… 9
（3）江戸時代の遺構 …… 11
3　出土遺物
（1）土器類 …… 12
（2）瓦類 …… 15
（3）土製品 …… 16
（4）木製品 …… 16
（5）金属製品・石製品 …… 16

第Ⅳ章　まとめ
1　遺構の変遷…… 17
2　白河街区内での位置づけ…… 18
3　今後の課題…… 18

附章1　白河街区の古環境および植物利用の検討 …… 33

附章2　白河街区の園地使用岩石種について…… 51

図版目次

図版１　Ａ区北・東壁土層断面図（１：80）
図版２　Ｂ区北・西・南壁土層断面図（１：80）
図版３　Ｃ区北・西・南壁土層断面図１（１：80）
図版４　Ｃ区北・西・南壁土層断面図２（１：80）
図版５　Ｄ区北・西壁土層断面図（１：80）
図版６　Ａ区第６層上面平面図（１：120）
図版７　Ａ区溝３・２平面図（１：20、１：120）
図版８　Ａ区溝１～４土層断面図（１：40）
図版９　Ａ区溝４下層・土坑46遺物出土状況図（１：40）
図版10　Ｂ・Ｃ区第６層上面平面図（１：120）
図版11　Ｂ・Ｃ区池238-１平面図（１：120）
図版12　Ｂ・Ｃ区池238-２平面図（１：120）
図版13　Ｂ・Ｃ区第４層上面平面図（１：120）
図版14　Ｂ・Ｃ区第３層上面平面図（１：120）
図版15　Ｂ区池238-１平面図（１：50）
図版16　Ｂ区池238-２平面図（１：50）
図版17　Ｃ区池238-２景石平面・立面図（１：40）
図版18　Ｂ区池238・溝201土層断面図（１：80、１：40）
図版19　Ｂ・Ｃ区江戸時代遺構平面・断面・立面図（１：40）
図版20　Ｄ区平面図１（１：100）
図版21　Ｄ区平面図２（１：100）
図版22　Ｄ区遺構平面・断面図（１：40）
図版23　出土土器類１（１：４）
図版24　出土土器類２、土製品（１：４）
図版25　出土土器類３、木製品、金属製品、石製品（１：２、１：４）
図版26　出土瓦類１（１：４）
図版27　出土瓦類２（１：４）
図版28　出土瓦類３（１：４）
図版29　出土瓦類４（１：４）
図版30　出土瓦類５（１：４）
図版31　遺構　１．調査地全景（上が北）　２．Ａ区完掘全景（北から）
図版32　遺構　１．Ａ区溝４完掘状況（北西から）　２．Ａ区溝３完掘状況（北西から）
　　３．Ａ区溝２完掘状況（南東から）
図版33　遺構　１．Ａ区溝２・３・４土層断面（南から）
　　２．Ａ区溝４下層遺物出土状況（北西から）
　　３．Ａ区土坑46遺物出土状況（北西から）

図版34　遺構　1．B区谷240完掘状況（東から）　2．B区谷240完掘状況（北から）
3．B区池238－1完掘状況（東から）
図版35　遺構　1．B区池238－2完掘状況（東から）
2．B区池238－2集石検出状況（南東から）
3．B区池集石243土製円塔出土状況（北西から）
図版36　遺構　1．C区池238－2景石検出状況（北から）
2．C区池238－2完掘状況（南東から）
3．C区谷240完掘状況（南東から）
図版37　遺構　1．B区溝201検出状況（東から）　2．B区溝201完掘状況（東から）
3．B区溝201土層断面（東から）
図版38　遺構　1．B区江戸時代遺構完掘状況（南から）
2．D区池238完掘状況（南から）
3．D区谷240完掘状況（南から）
図版39　遺物　1．溝4出土遺物　2．谷240出土土器類
図版40　遺物　1．池238出土土器類　2．土坑46出土土器類
図版41　遺物　1．溝2・3出土遺物　2．出土軒瓦1（山城系）
図版42　遺物　1．出土軒瓦2（播磨系）　2．谷240出土墨書山茶碗
3．谷240出土軒丸瓦　4．谷240出土軒平瓦1　5．谷240出土軒平瓦2

挿図目次

図1　調査位置図（1：2,500）…… 1
図2　調査経過写真…… 3
図3　基準点配置・地区割図（1：300）…… 4
図4　既往調査位置図（1：2,500）…… 6
図5　基本土層模式図（縦1：100、横1：200）…… 7
図6　遺構変遷図　第1期：平安時代後期以前（1：250）…… 20
図7　遺構変遷図　第2期：平安時代後期～末期（1：250）…… 21
図8　遺構変遷図　第3期：鎌倉時代初頭（1：250）…… 22
図9　遺構変遷図　第4期：鎌倉時代～室町時代（1：250）…… 23
図10　遺構変遷図　第5期：江戸時代（1：250）…… 24
図11　白河街区条坊地割復元図（1：5,000）…… 25
図12　周辺調査位置図（1：500）…… 26

表目次

表１　遺構概要表…… 8
表２　遺物概要表…… 12
表３　遺物観察表…… 27

第Ⅰ章　調査の経緯

1　調査に至る経緯

調査地は京都市左京区岡崎天王町 26 番地５、真宗大谷派岡崎別院（以下、「岡崎別院」という）敷地内に位置する。当地においてホテル建設が計画された。建設予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「白河街区跡」の範囲内に該当し、平安時代後期を中心とした遺構・遺物の包蔵が予想された。そのため建築工事に先立ち、平成 31 年１月９日～ 10 日にかけて京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）により試掘調査が実施された。その結果、平安時代～中世の遺構・遺物が良好に遺存することが確認されたため、発掘調査が実施されることとなった。調査は開発原因者から委託された、株式会社文化財サービスが実施した。

2　調査の経過

発掘調査は、事前に近隣の方へ調査の周知を行った後、平成 31 年３月 25 日から現地作業に着手した。調査区は、文化財保護課の指導によりＡ～Ｄ区の調査区を設定した。総面積は 531 ㎡である。着手時の調査区の現状は、Ａ区が宅地解体跡、Ｂ区がアスファルト駐車場、Ｃ・Ｄ区が大谷専修学院跡地で砂利敷き駐車場であった。

岡崎別院の敷地使用予定との調整を行い、Ａ区から調査を開始した。３月 26 日から重機による表土掘削を始め、試掘調査結果に基づき現代～近世後半の盛土を除去した。その後、人力による撹乱掘削・包含層掘削を行った。複数面を想定していたが、遺構はすべて地山上面で検出し、平安時代後期～江戸時代の遺構を検出した。４月 17 日までに遺構掘削・記録作業を行い、その後地

図１　調査位置図（１：2,500）

山を断ち割り、下層に遺構・遺物の無いことを確認して4月24日に調査区を埋戻し、A区の調査を終了した。

B区とC区の調査は同時進行で行った。C区は4月25日より表土掘削、B区は令和元年5月8日よりアスファルト舗装の撤去を行い、表土掘削を開始した。C区は重機で現代～近世の盛土約1.3mを掘削し、第1面の調査を行い主に近世の遺構を検出した。第2面で鎌倉時代から室町時代の遺構を調査し、第2面整地土を除去したところ、粘質土層の広がりを検出した。粘質土層掘削中に1.0m前後の巨大な石が4つ現れ、池の可能性が指摘された。B区は現代のアスファルト・改良土直下で地山砂礫層が現れ、その上面で遺構を検出した。江戸時代の石組溝・石組井戸、鎌倉時代の東西溝を検出し、調査区北約1/3で粘質土が堆積する落ち込みを検出した。この落ち込みがC区の池とみられる遺構と同一のものと判明し、B・C区をまたぐ池跡と認識し調査を進めた。池はC区の北側に続き、D区へ続くと予想され、さらに池の底以下には幅約8.0mの南北方向の谷状の落ち込みが確認されたことから、B・C・D区について当初予定していた段階的に終了させる方針を変更し、最終まで同時進行で調査することとした。D区は6月12日から表土掘削を開始し、上層遺構を調査後、池の北東肩部分を検出した。

6月22日には近隣地域の方を対象とした現地説明会を開催し、約170人の参加があった。現地説明会後、B・C・D区を縦断する谷の掘削・記録作業、補足調査を行い、6月26日に調査を終了した。その後、調査区の埋戻し・駐車場復旧・撤収作業等を行い、現地作業は7月12日にすべて終了した。

現地調査では、調査進行上の各段階において、適宜文化財保護課の臨検および指導を受けた。また、遺構検出段階および掘削段階等において、本調査の検証委員である京都産業大学教授鈴木久男氏、龍谷大学教授國下多美樹氏の現地検証を受け、調査に対する助言をいただいた。

3　測量基準点の設置と地区割り

測量基準点は、丸太町通りに設置されている1級基準点をもとに、トータルステーションにより調査地敷地内にO．1～O．5を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

1級基準点 No.0310020

	X = -109056.619 m	Y = -19365.196 m	H = 56.461 m
O．1	X = -109008.975 m	Y = -19370.432 m	H = 58.383 m
O．2	X = -109050.707 m	Y = -19334.917 m	H = 58.280 m
O．3	X = -109008.604 m	Y = -19344.093 m	H = 59.731 m
O．4	X = -109035.689 m	Y = -19347.493 m	H = 58.438 m
O．5	X = -109049.555 m	Y = -19347.425 m	H = 57.694 m

検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して世界測地系に基づき3m四方のグリッドを設定した。グリッドの基点を南東角と決め、Y軸にアルファベットを東から西に、X軸にアラビア数字を南から北に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした（図3）。

1.調査前（南西から）

2.重機掘削（南西から）

3.遺構掘削作業1（北西から）

4.遺構掘削作業2（北東から）

5.ドローン測量風景（北西から）

6.現地説明会風景（北西から）

7.調査区埋戻し（北西から）

8.調査完了後（南西から）

図2　調査経過写真

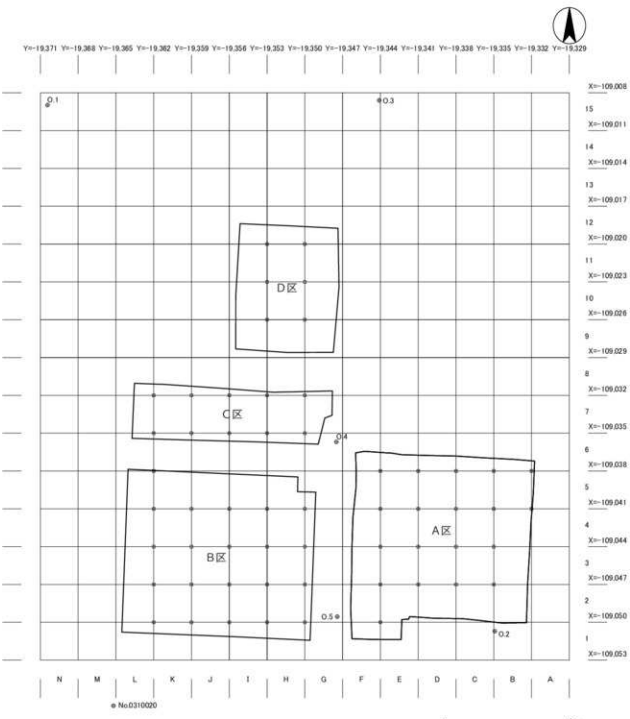


図3　基準点配置・地区割り図（1：300）

第Ⅱ章　位置と環境

1　地理的環境

調査地の位置する白河は京都盆地の北東、東山山地と鴨川によって限られた平野部である。地形的には北に神楽岡（吉田山）丘陵があり、東山と神楽岡の間を南流する白川によって形成された扇状地と鴨川左岸の沖積地から構成され、全体に北東から南西に緩やかに傾斜している。東山一帯には花崗岩が多く存在し、花崗岩が風化してできた石英や長石からなる砂が白川の川底を埋め尽くす様子が、白河の名前の由来となったとされている。今回の調査地はこのような扇状地内に位置している。

2　歴史的環境

白河は弥生時代～古墳時代には集落（岡崎遺跡）が営まれ、古代には山城と東国を結ぶ東山道、東海道に沿った交通の要衝であった。景勝地でもあった当地では、平安時代には貴族の邸宅や寺院が造られ、平安時代中期には藤原氏の別業の地として知られることとなる。平安時代後期、藤原頼道の子師実が藤原家累代の別業白河殿を白河天皇に献上すると、承保２年（1075）白河天皇はその場所で法勝寺の造営を開始し、この法勝寺を基に平安京の条坊に倣った街並み「白河街区」の整備が行われた。法勝寺の周辺には以後の各天皇・皇族等により多くの寺院が造営され、なかでも尊勝寺・最勝寺・円勝寺・成勝寺・延勝寺は、法勝寺を含めて「六勝寺」と呼ばれ、街区の中心的な寺院であった。法勝寺と対になる街区西端には院の御所である白河南殿と白河北殿が造営され、院政期の都市的景観が広がっていたとされている。なお法勝寺の北側、現在の岡崎神社を含む一帯には白河街区整備以前の寺院、東光寺が存在していたとされている。

平安時代末期には、平氏などの武士勢力の台頭により院政が弱体化すると白河街区の機能は次第に失われ、鎌倉時代には法勝寺など一部の寺院は持続するが大半の寺院は急速に衰退した。室町時代、応仁の乱によって街区の大半が廃絶したと考えられている。その後当地は畑地や水田として利用され、江戸時代には都市近郊農業生産地としての性格を持った愛宕郡岡崎村と呼ばれた。幕末の政治的動乱期には、岡崎一帯には藩邸が立ち並んだが、明治維新後にはそれも取り壊され、再び農村へと戻っていった。

今回の調査地は、江戸時代後期、享和元年（1801）創建の真宗大谷派岡崎別院の敷地内に位置し、調査地内には平成 28 年（2016）まで大谷専修学院岡崎学舎が建っていた。

3　既往の調査

白河街区では現在まで非常に多くの調査が行われているが、その大半は六勝寺域である冷泉通以南、また東大路通周辺で行われており、今回の調査地の位置する街区北東部での調査は少ない。調査地付近では、４回の発掘調査、１回の試掘調査が行われている（図４　調査１～５）。昭和 62 年度（1987）の調査１[1]では、鎌倉時代～室町時代、近世までほぼ同じ位置に断続的に造られた

幅 2.0 ～ 7.0 m、深さ 0.6 ～ 1.0 mの南北方向の溝と同方向の櫂列などが検出されている。昭和 63 年度（1988）の調査２[2]、平成 13 年度（2001）の調査３[3]では平安時代後期の南北方向の溝と平安時代～室町時代の東西方向の溝、鎌倉時代の方形の池跡を検出している。これらに近接する平成 26 年度（2014）の試掘である調査５[4]でも、平安時代末期～鎌倉時代の遺物を含む南北方向の溝や落ち込みが検出されている。調査２・３・５の調査成果から、東光寺もしくは後醍醐天皇御願寺、元応元年(1319)創建の元応寺に関わる遺構であると考えられている。平成 17 年度(2005)の調査４[5]では、白河街区の区画溝とみられる平安時代後期～鎌倉時代初頭の南北溝と、室町時代後期の建物や井戸、土坑などが多く検出され、宅地利用が行われていたことがわかっている。

注

（１） 上村和直 「岡崎遺跡・法勝寺隣接地」『昭和 62 年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991 年

（２） 堀内明博 「白河街区・岡崎遺跡２」『昭和 63 年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993 年

（３） 吉村正親 「白河街区・岡崎遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-14』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2003 年

（４） 西森正晃 「白河街区跡・岡崎遺跡・東光寺跡 平成 26 年度 No.88」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 27 年度』 京都市文化市民局 2016 年

（５） 近藤奈央・木下保明 「白河街区跡・岡崎遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-4』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2005 年

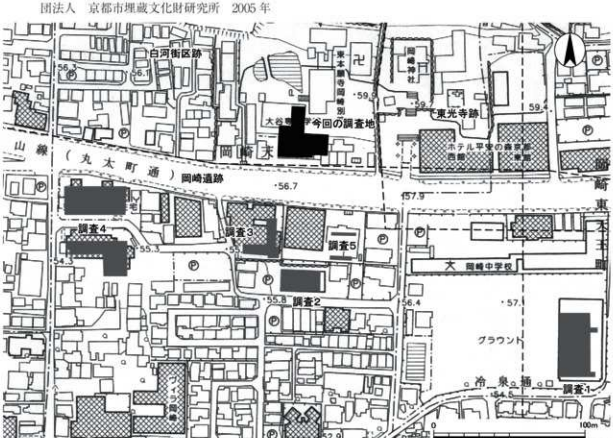


図４ 既往調査位置図（１：2,500）

第Ⅲ章　調査成果

1　基本層序

調査地の現況地表面の標高は、A・C・D区範囲では北が58.5 m、南が58.2 mで、やや北から南へ傾斜している。舗装駐車場であるB区は周囲より約1.0 m低く、北が57.5 m、南が56.9 mで北から南に傾斜している。

基本層序は調査区によって各土層の遺存状況が異なるが、現地表から第1層として近現代の盛土・整地土がある。各調査区の現在の使用状況によって建物解体物や地盤改良土が含まれるなど、層内の様相が異なり、0.5 ～ 2.0 mの厚さがある。

第2層として江戸時代の盛土がある。C区には0.4 ～ 0.5 mの厚さでみられるが、他の調査区での遺存は悪い。

第3層として鎌倉時代～室町時代の整地土がある。A・C・D区に分布し、調査区の場所によって複数層に細分でき、0.2 ～ 0.8 mの厚さがある。特に黄褐色シルトのブロックが細かく混じる土層は特徴的で、当該期の遺構埋土にも含まれていることが多い。

第4層として鎌倉時代初頭の整地土がある。粗砂の多い砂泥でよく締まっている。B・C・D区の主に平安時代末期の池範囲に分布する。池埋土上面の凹みを埋め立て、平坦地を形成するための整地と考えられる。

第5層としてB・C・D区に広がる平安時代末期の池の埋土がある。砂混じりのシルト～粘土で、新旧の2時期の土層に分けることができる。

第6層として白河砂と呼ばれる砂礫層がある。この層以下は無遺構・無遺物であり、地山と判断した。調査地全体の地山面の標高は北東部が57.8 m、南西部が56.3 mで北東から南西方向に低く傾斜している。なお、A区東部の地形の高い部分では一部、砂礫層の上部に黒色のシルト層の分布がみられた。黒ボク土状で遺物をまったく含まず、下層の砂礫層から漸移的に粒度が変化している状況から、第6層の表層が土壌化したものであり、第6層と同一層と判断した。

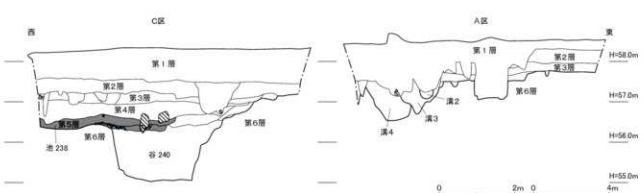


図5　基本土層模式図（縦1：100、横1：200）

2　遺構

遺構は基本的に第３層上面・第４層上面・第５層は池埋土であるため結果的に第６層上面の３面で検出を行った。但し、調査区によって基本土層の遺存状況が違うため、Ａ区は第６層上面で全ての遺構を検出し、Ｂ区では部分的に残る第４層上面と第６層上面で遺構を検出した。以下、平安時代の遺構から江戸時代の遺構の順に記述を行う。

表１　遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代後期以前	谷240	
平安時代後期～末期	溝４、池238	
鎌倉時代初頭	溝201、土坑46、ピット群	
鎌倉時代～室町時代	溝１・３・301、柱穴142・160、土坑302	
江戸時代	溝２・202、井戸201・239、柵158、ピット群、廃棄土坑	

（１）平安時代の遺構

溝４

Ａ区西部で検出した南北方向の溝である。方向は座標南北にほぼ沿っている。検出規模は、東半部を溝３に切られ東肩が失われているため正確な幅は不明であるが、断面の立ち上がりから推定すると約2.5ｍである。長さ12.5ｍ、深さ0.6ｍを測る。断面は逆台形で、底がほぼ平坦である。埋土は大きく上層と下層に分けられ、上層はブロック土を含んだ締まった土層で溝を埋めた土、下層は砂～シルト主体で、溝機能時に堆積した土層である。下層に目立った砂層がみられず、含まれる遺物にも摩耗があまりみられないことから、水の流れのほとんどない溝であったとみられる。遺物は平安時代後期～末期の土器、瓦、土製円塔などが出土した。平安時代後期に造られ、末期には埋められたと考えられる。

谷240

Ｂ・Ｃ・Ｄ区にまたがって調査区を南北に縦断する、谷状の落ち込みである。検出規模は幅6.3～9.3ｍ、検出長約32.0ｍ、深さ1.1～1.7ｍを測る。埋土は大きく上層と下層に分けられる。上層は黒色のシルト～砂泥主体で、平安時代後期の土器類・木製品・植物遺体・種実などが多く含まれていた。層下位は細砂を互層状に挟んだ湿地状堆積とみられるが、上位は粒度のばらつきが認められ、人為的に埋めた土の可能性がある。下層は細砂～極粗砂主体で、概して淘汰が良く継続的な水流で堆積したことがわかる。下層は遺物が少なかったが、平安時代前期にさかのぼるものがみられた。谷は平安時代後期以前までには自然に上層下位まで埋没し、湿地状となっていたが、平安時代後期の一時期に埋められたと考えられる。

池 238

B区の北半部からC区西半部、D区中央部までを範囲とする池である。北から東の池の肩は検出できたが、南側は現代までの削平により明確でなく、西側は調査区外に続く。検出できた規模は、南北最大 24.5 m、東西最大 12.0 m、深さ最大 0.5 m を測る。池の埋土は2層に分けられ、それぞれ 0.2 m前後の厚さである。上層の分布範囲は下層より西方向に約 7.0 ～ 8.0 m縮小しており、景石とみられる石や、景石の根石の可能性のある石の分布が上層の肩付近に位置することなどから、少なくとも新旧2時期の池（池 238 － 1・238 － 2）の変遷があったと考えられる。池の肩がC区で西に屈曲した頂点とみられる部分に、特に大きな（0.6 × 0.4 m～ 1.1 × 0.7 m）景石が4石配置され、一部の石の基部には数石の根石を設置していた。景石には明確な掘り方は見られず、池 238 － 1の埋まった土の上にそのまま置くように設置した状態であった。遺物は平安時代末期の土器、平安時代後期から末期の瓦が多数出土した。遺物から池 238 － 1・238 － 2の明確な時期差は認められなかったが、土師器皿などの年代観、池を埋めた整地土に鎌倉時代初頭の遺物を含むことなどから、池 238 は造営から埋没まで 50 年前後の機能期間であったと考えられる。

（2）鎌倉時代～室町時代の遺構

溝 201

B区南部で検出した東西方向の溝である。検出規模は、幅 2.3 ～ 2.9 m、底面幅 1.3 ～ 1.5 m、長さ 14.8 m、深さ 0.9 m を測る。方向は座標東より約 3° 南に振っており、現在の丸太町通りにほぼ近い。断面逆台形の溝で、両肩のライン・溝側面・底面いずれも直線的であり、整然とした形状を呈している。B区の現状地表面が他の地区より約 1.0 m低いことから、当時の地表面が現在までに一定程度削られているとみられ、本来は現状より深い溝であった可能性がある。埋土は上層・中層・下層に分けられ、上層・中層は溝を埋めた土、下層は溝の機能時の堆積土である。下層はシルト質の有機物堆積土が主体で、層間に細砂が互層状に介在している部分があるため、緩い水の流れがあった時期もあるが基本的には泥の溜まる溝であったとみられる。遺物は、この溝が中央部分で下位の谷 240 を切り込んで掘られているため平安時代後期以前～末期の遺物、木製品などを多く含んでいたが、溝本来の時期を示す遺物は鎌倉時代初頭～後期の土器類である。鎌倉時代初頭以降に掘られ、鎌倉時代後期に埋められたと考えられる。

土坑 46

A区東部で検出した長軸 2.7 m、短軸 1.2 m を測る平面楕円形の土坑である。土坑上部は近世以降の撹乱により失われており、下部の深さ 0.3 m ほどが残存した状態であった。埋土は周囲の地山の黒色土と黄色シルトがブロック状に混じり、一気に埋められた状況とみられる。土坑底に接した状況で、主に鎌倉時代前期の土師器皿、瓦質土器羽釜・三足羽釜が集積した状態で出土し、土器とともに約 0.15m 大までの礫、炭化木も多く含まれていた。

その他主にA区で柱穴・ピット・土坑を検出したが、建物等を復元するには至らなかった。

溝3

A区の西部で検出した南北方向の溝である。溝4が埋没した後、ほぼ同じ位置のやや東に掘られた溝である。方向は座標北より約3° 東に振っている。検出規模は幅2.4 ～ 2.7 m、長さ12.5 m、深さ0.5 mを測る。断面は不成型なV字状で、埋土に砂が挟在し、水流があったことが示されることから、土地境界を示すとともに排水溝であったとみられる。埋土は上層と下層に分けられる。遺物は上層に室町時代後半の土器、下層から鎌倉時代中期を上限とする土器が出土したことから、鎌倉時代中期頃に掘られ、室町時代後半に埋没したことがわかる。

溝1

A区の西壁に沿って検出した南北方向の溝である。西半部が調査区外で、西壁南部で西に屈曲していたため、溝の規模と方向を確認するため溝南部が壁に入り込む部分を一部拡張して補足調査を行い、溝1の西肩と溝が西方向に確実に屈曲していることを確認した。検出規模は幅0.4 m、長さ11.3 m、深さ0.1 mを測る。埋土は締まりのやや弱い砂泥で、遺物は中世の瓦と土師器の小片のみで詳細な所属時期を示すものはなかったが、近世以降の遺物を含まないことと、埋土の土質から室町時代に属するものと推定した。

溝301

D区の中央部東壁際で検出した南北方向の溝である。西肩のみの検出で、北部・南部は撹乱を受け失われている。検出規模は幅0.4 m、長さ2.4 m、深さ0.4 mを測る。調査では3層上面遺構として記録したが、実際は地山第6層上面で検出した遺構であり、遺物は中世の土器、瓦の細片のみであった。土層は溝1に似ている。

柱穴142・160

C区中央部で検出した柱穴である。柱穴142は直径0.6 m、深さ0.4 m、中央に0.4 × 0.3 m大の礎石状の石を配する。柱穴160は北壁断面サブトレンチで礎石状の石を検出したため、柱穴プランは検出できなかったが、断面から判断できる規模は直径1.4 m、深さ0.5 mで、上面が平坦な長さ0.5 mの礎石状の石を中央に配する。遺物は出土しなかったが4層を切り込む遺構であることから鎌倉時代～室町時代に属する遺構と考えられる。礎石間の柱間寸法約2.8 mを測る。2つの柱穴のみの検出であるが、比較的大型の礎石をもつ柱穴であることから規模の大きな建物が存在した可能性がある。

土坑302

D区の中央東部で検出した土坑である。ほぼ円形で、検出規模は長軸0.6 m、短軸0.5 m、深さ0.1 mを測る。土坑内に0.15 m大前後の礫が多量に入る。深さが浅いため、土坑底面付近が残ったものとみられる。これらの礫は柱礎石の根固め石のように見え、礎石柱穴の残欠の可能性がある。

この遺構も、調査では3層上面遺構として記録したが、実際は地山第6層上面で検出した遺構である。遺物は中世の土器、瓦の細片のみであったため、室町時代推定とした。

（3）江戸時代の遺構

溝2

A区の西部で検出した南北方向の溝である。溝3の埋没後に同じ方向に掘られたか、もしくは溝3の埋没最終段階の可能性がある。検出規模は幅0.5～0.8 m、検出長10.5 m、深さ0.1～0.2 mを測る。埋土は細砂～粗砂で、土石流などにより一気に埋まったような状況である。遺物は江戸時代中期の土師器皿、陶磁器、一石五輪塔などが出土した。

溝202

B・C区にまたがり検出した石組の溝である。C区北壁中央から南東～南方向に弧を描くようにB区に続き、B区東部中ほどで途切れ、以南は現代までの削平により消失している。石組はB区では両側1段が残存しているが、B区北壁付近やC区では後世に乱され、石が散在した状態で、溝掘り方のみが検出できた。規模は石組内法幅0.3 m、検出長14.5 m、深さ0.05 mである。この溝の北方には、現在の岡崎別院庭園の池があることから、溝202はこの池の旧排水溝の可能性が考えられる。

柵158

C区西部で検出した東西方向の柵跡である。5個の柱穴で構成され、長さ5.5 mを測る。柱穴は直径0.2～0.3 m、深さ0.2 m前後を測り、3個に基底石が確認できた。

井戸203

B区東部隅で検出した石組井戸である。石組内法径0.8 m、深さは0.7 mまでで留めた。

井戸239

B区東部、溝202南端部の下位で検出した石組井戸である。石組内法径0.8 m、深さは0.7 mまでで留めた。溝202構築以前に掘られた井戸であり、掘り方から染付磁器が出土したことから、近世に属するものと考える。

その他、B区で5基、C区で1基の素掘り井戸もしくは石組み井戸を壊して廃絶したもの、廃棄土坑などの可能性のある円形土坑を検出した。

3　出土遺物

今回の調査では、コンテナで61箱分の遺物が出土した。平安時代後期～末期の土器類や瓦類が中心で、溝や池跡、谷跡から特に多く出土した。

出土遺物の年代観は、土器類については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年、平尾政幸「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」古代学協会編『平安京提要』角川書店　1994年、中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995年、瓦類については、上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14　元興寺文化財研究所　1978年、上村和直「後期の瓦」古代学協会編『平安京提要』角川書店　1994年を参照した。

表２　遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	Ａランク点数	Ｂランク点数	Ｃランク箱数
平安時代前期～中期	土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、銭貨		土師器１点、緑釉陶器１点、灰釉陶器１点、銭貨３点		
平安時代後期～末期	土師器、白色土器、須恵器、瓦器、山茶碗、白磁、瓦、土製品、木製品、石		土師器40点、白色土器５点、須恵器１点、瓦器２点、山茶碗２点、白磁９点、軒丸瓦10点、軒平瓦24点、丸瓦４点、平瓦５点、土製円塔２点、木製品６点、漆器１点	土師器１点丸瓦１点 平瓦１点 岩石サンプル22点	
鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、白磁、青磁		土師器11点、須恵器１点、瓦器１点、瓦質土器３点、白磁１点、青磁１点		
室町時代	土師器、須恵器、瓦質土器、焼締陶器		土師器７点、須恵器３点、瓦質土器４点、焼締陶器１点		
江戸時代	土師器、磁器、石製品		土師器１点、染付磁器１点、一石五輪塔１点		
合計		55箱	153点（10箱）	３点（１箱）	44箱

＊コンテナ箱数は、整理段階で６箱減少した。

（１）土器類（図版23～25、39～41）

溝４出土遺物（図版23・39）

下層でまとまって出土したものが中心で、土師器、瓦器、山茶碗、輸入陶磁器がある。

土師器は皿Ａ（１）、皿Ａｃ（２・３）、皿Ｎ（４～12）、甕（13）がある。皿Ａは口径9.5cm、高さ1.6cmを測り、皿Ａｃは口径9.8～10.0cm、高さ0.9～1.1cmを測る。Ⅴ期古に属する。皿Ｎは口径9.4～10.4cm、高さ1.3～1.6cmを測るもの（４～７）と、口径14.2～15.4cm、高さ2.4～3.3cmを測るもの（８～12）の２タイプあり、Ⅳ期新～Ⅴ期古に属する。甕は球形に近い体部で口縁が短く外反し、体部外面に指押さえが顕著に残る小型のものである。

瓦器は椀(14)があり、内外面のヘラミガキは不明瞭だが、12世紀後半に属する大和型とみられる。

山茶碗は椀（15）があり、籾圧痕の付く低い高台が貼り付く。12世紀後半に属する。

輸入陶磁器は白磁碗（16・17）がある。碗（16）はⅪ類もしくはⅡ類、碗（17）はⅣ類で11世紀後半～12世紀前半に属する。

谷 240 出土遺物（図版 23・39）

特に上層から多く出土し、土師器、白色土器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、輸入陶磁器がある。

土師器は皿Ａ（18 ～ 20）、皿Ａｃ（21･22）、皿Ｎ（23 ～ 30）、羽釜（31）がある。皿Ａは口径 9.6 ～ 10.5cm、高さ 1.5 ～ 1.7cm を測る。皿 Ac は口径 9.0 ～ 11.4cm、高さ 1.1 ～ 1.2cm を測る。皿Ｎは口径 10.0cm 前後、高さ 2.0cm 前後を測るもの（23 ～ 25）と、口径 12.0cm 前後、高さ 2.0cm 前後を測るもの（26・27）、口径 14.0 ～ 15.0cm、高さ 2.5 ～ 3.0cm を測るもの（28 ～ 30）の３タイプある。皿Ａで溝４よりもやや古い様相がみられるが、総じてⅣ期新～Ⅴ期古に収まると考える。羽釜（31）は谷下層から出土し、鍔部が欠損しているが、口縁が大きく外反し外に伸びるもので 10 世紀後半に属する。

白色土器は台付皿（32）、高坏（33・34）があり、Ⅳ期～Ⅴ期に属する。

瓦器は椀（35）があり、内外面とも密なヘラミガキ、見込みに平行暗文を施す。樟葉型で 11 世紀末に属する。

須恵器は東播系須恵器鉢（36）があり、口縁が直線的に開き端部に面を持つもので、11 世紀後半に属する。

灰釉陶器は段皿（37）があり、９世紀代に属する。谷下層、底付近で出土した。

山茶碗は完形の椀（38）があり、高台内に「十」の墨書が書かれる。11 世紀代に属する。

輸入陶磁器は白磁皿･碗（39 ～ 42）がある。皿（39）、碗（40）はⅪ類で 10 世紀後半～ 11 世紀中頃、碗（41）はⅡ類、碗（42）はⅤ類で 11 世紀後半～ 12 世紀前半に属する。

池 238 出土遺物（図版 24・40）

土師器、白色土器、緑釉陶器、輸入陶磁器がある。

土師器は皿Ａｃ（43 ～ 46）、皿Ｎ（47 ～ 56）がある。皿Ａｃは口径 7.5 ～ 9.4cm、高さ 1.0 ～ 1.5cm を測り、皿Ｎは口径 9.0 ～ 10.8cm、高さ 1.7 ～ 2.3cm を測るもの（47 ～ 52）と、口径 14.2 ～ 15.9cm、高さ 2.5 ～ 3.2cm を測るもの（53 ～ 56）の２タイプある。概ねⅤ期中～Ⅴ期新に属するが、Ｄ区北肩部出土の（46・49・51）はⅥ期中に近い。

白色土器は椀（57）、高坏（58）があり、椀はロクロ挽き無調整の底部にやや高い台を貼り付ける。高坏は 14 面の面取りを行う脚部である。Ⅴ期に属する。

緑釉陶器は皿（59）がある。低い高台を持つ底部の小破片で、見込に陰刻文様を施す。谷 240 からの混入とみられる。

輸入陶磁器は白磁碗･皿（60 ～ 62）がある。碗（61）はⅡもしくはⅣ類、碗（62）はⅣ類、皿（60）はⅤ類で 11 世紀後半～ 12 世紀前半に属する。

池 238 出土遺物については、下位にある谷 240 に堆積した遺物が掘り上げられて混入しており、正確に池のみの機能時期を示すものではない。

溝 201 出土遺物（図版 24・41）

土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器がある。

土師器は皿Ｎ（63 ～ 66）、皿Ｓ（67）がある。皿Ｎは口径 7.9 ～ 8.7cm、高さ 1.3 ～ 1.6cm を測るもの（63 ～ 65）と、口径 11.8cm、高さ 2.2cm を測るもの（66）の２タイプあり、Ⅵ期～Ⅶ期古に属する。皿Ｓは口径 12.0cm、高さ 3.2cm を測り、Ⅶ期中～Ⅷ期古に属する。

須恵器は甕（68）があり、東播系の甕である。13 世紀代に属する。

瓦器は小椀（69）がある。13 世紀代とみられる。

輸入陶磁器は青磁碗（70）がある。底部のみで、体部外面に連弁文を陽刻する。Ⅰ－５類で 13 世紀前半に属する。

土坑 46 出土遺物（図版 24・40）

土師器、瓦質土器、輸入陶磁器がある。

土師器は皿Ａｃ（71）、皿Ｎ（72 ～ 76）がある。皿Ａｃは口径 6.5cm、高さ 1.0cm を測り、皿Ｎは口径 8.3 ～ 9.0cm、高さ 1.4 ～ 1.6cm を測るもの（72 ～ 74）と、口径 13.7 ～ 14.4cm、高さ 2.3 ～ 2.8cm を測るもの（75・76）の２タイプある。Ⅵ期中～新に属する。

瓦質土器は羽釜（78・79）、三足羽釜（80）がある。体部が横にやや潰れた球形を呈するものでⅥ期に属する。

輸入陶磁器は白磁碗（77）がある。Ⅷ３群で、12 世紀後半～ 13 世紀前半に属する。

溝３出土遺物（図版 25・41）

土師器、須恵器、瓦質土器、陶器がある。

土師器は皿Ｎ（83）、皿Ｓ（84 ～ 89）がある。下層出土の皿Ｎは口径 9.3cm、高さ 1.6cm を測り、Ⅵ期新～Ⅶ期中に属する。皿Ｓは口径 8.4 ～ 9.9cm、高さ 1.7cm 前後を測るもの（84 ～ 87）と、口径 13.7 ～ 14.9cm、高さ 2.5 ～ 3.0cm を測るもの（88・89）の２タイプあり下層出土の（84・85・88・89）はⅨ期、上層出土の（86・87）はⅨ期新～Ｘ期古に属する。

須恵器は東播系鉢（90・91）があり、下層出土の（90）が 13 世紀代、上層出土の（91）が 14 世紀後半～ 15 世紀代に属する。

瓦質土器は羽釜（94・95）、火鉢（96・97）がある。羽釜は体部から口縁部が直線的で、短い鍔が貼り付くものでＸ期古に属する。火鉢（96）は円形で口縁が内傾する。口縁外面の文様帯には珠文を施す。13 ～ 14 世紀に属する。火鉢（97）は方形で口縁外面に菊文のスタンプを押圧する。13 世紀代に属する。いずれも下層出土。

陶器は備前焼擂鉢（92）がある。直線的な口縁の端部をやや上下に拡張するもので、鎌倉時代後期～室町時代に属する。上層出土。

溝２出土遺物（図版 25・41）

土師器は皿Ｓ（98）があり、口径 10.9cm、底部内面に凹状圏線をもつもので Ⅻ期に属する。磁器は肥前染付碗（99）で、内外面青磁釉で外面に草花文の染付を施す。18 世紀後半以降に属する。

（２）瓦類（図版 26 ～ 30、41・42）

瓦は溝や谷からも出土したが、圧倒的に池 238 からの出土量が多い。そのほぼすべてが平安時代後期に属するものである。

軒丸瓦（図版 26・41・42）

（111）は複弁蓮華文。谷 240 出土。（112）は単弁蓮華文。山城系。池 238 出土。（113）は三巴文。右巻きで頭部は接しており、尾部先端はそれぞれが接しているが外縁には接しない。山城系。池 238 出土。（114 ～ 116）は三巴文。右巻きで頭部は離れ丸みを帯び、尾部先端はそれぞれが接している。瓦当文がやや中央からずれている。山城系。池 238 出土。（117）は三巴文。左巻きで頭部は離れ丸みを帯び、尾部先端はそれぞれが接している。山城系。池 238 出土。（118・119）は三巴文。右巻きで頭部が離れ、端部は尖る。尾部は接しない。外区に珠文を配する。山城系。溝 201 出土。（120）は三巴文。右巻きで、外区に珠文を配する。土坑 46 出土。

軒平瓦（図版 26・27・41・42）

（121）は均整唐草文で、瓦当は包込み式である。播磨系。谷 240 出土。（122）は除剣偏行唐草文。産地不明。谷 240 出土。（123）は偏行唐草文である。山城系。池 238 出土。（124）は偏行唐草文。山城系。溝４出土。（125）は唐草文。凸面に記号文あり。山城系。池 238 出土。（126）は唐草文。山城系。溝４出土。（127）は唐草文で、瓦当は折曲げ成型。山城系。谷 240 出土。（128・129）は花弁状の剣頭文で、瓦当は折曲げ成型。同じ位置に笵傷が認められることから同笵の瓦とみられる。山城系。池 238 出土。（130・131）は剣頭文で、瓦当は折曲げ成型。山城系。池 238 出土。（132・133）は剣頭文で、瓦当は折曲げ成型。溝 201 出土。（134）は半裁花文で、瓦当は折曲げ成型。山城系。土坑 46 出土。（135）は半裁花文で、瓦当は折曲げ成型。山城系。池 238 出土。（136）は雁巴文で、瓦当は折曲げ成型。山城系。池 238 出土。（137）は雁巴文で、瓦当は折曲げ成型。山城系。谷 240 出土。（138）は連巴文で、瓦当は折曲げ成型。山城系。溝 201 出土。（139）は半裁花文で、瓦当は包込み式。播磨系。池 238 出土。（140）は宝相華唐草文で、瓦当は包込み式。播磨系。池 238 出土。（141）は偏行唐草文で、棘を持つ唐草を表現する。瓦当は包込み式。播磨系。池 238 出土。（142）は偏行唐草文で、瓦当は包込み式。播磨系。池 238 出土。（143）は連巴文で、瓦当は包込み式。播磨系。池 238 出土。（144）は幾何学文で、瓦当は包込み式。播磨系。池 238 出土。

軒瓦のうち、谷 240 出土の（111）、（121）、（122）はそれ以外の軒瓦に比べて大型で、粘土も精良なものを使用し、成型・焼成の質も違うものである。これらは平安時代後期以前に遡る可能性があり、白河街区整備以前の建造物の存在を想起させるものである。

丸瓦（図版 28・29）

丸瓦（145 ～ 148）は、池 238 から完形もしくは完形に近いものが出土した。全長が 24.0 ～ 28.7 ㎝、幅 10.8 ～ 12.9 ㎝を測る小型なもので、（148）が全長 32.8 ㎝、幅 13.2 ㎝とやや大きい。凸面は縄目タタキが残るものが多いが、（145）はナデ消される。凹面は布目が残る。（145）は凸面が丁寧にナデで仕上げられ、硬質に焼成されているため播磨系とみられる。その他は山城系とみられる。

平瓦（図版 29・30）

平瓦は（149 ～ 152）が池 238 から、（153）は溝 201 から完形もしくは完形に近いものが出土した。全長が 24.8 ～ 26.1 ㎝、幅 16.3 ～ 17.8 ㎝を測り、丸瓦と同様小型なものである。（153）は全長 22.7 ㎝、幅 15.2 ㎝とさらに小型なものとなる。（149）は凸面に平行タタキ、凹面は布目があり、硬質に焼成される播磨系である。その他は凸面を縄目タタキもしくはナデ消し、凹面は布目がある山城系とみられる。

（3）土製品（図版 24・39・40）

土製円塔がある。（81）は直径 7.5cm、高さ 3.5cm の半球形で球面の一部に緑釉が僅かに残存する。溝 4 出土。（82）は直径 6.4cm、高さ 3.1cm の半球形で球面には緑釉が薄く残存する。池 238 － 2 出土。

（4）木製品（図版 25）

木製品はすべて谷 240 から出土し、曲物、漆器椀、箸がある。曲物蓋（100）は板が薄く、側板が縁より内側に取り付く痕跡が認められるため蓋とした。板上面に墨書が書かれる。曲物底板（101・（102）は（101）は完存し側縁に側板を取り付ける釘穴が認められる。（102）は破片でやや薄いため蓋の可能性もある。漆器椀（103）は外面黒漆、内面赤漆塗りで、高台内に墨で「上」と読める文字を書く。底部から低い段階で口縁が外反するため、皿の可能性もある。箸（104 ～ 106）はすべて上部がやや欠損し、（105・106）は先端部が焦げているため、火付け木として転用されたとみられる。

（5）金属製品・石製品（図版 25）

金属製品は銭貨があり、溝 201 から 3 枚まとまって出土した。（107・108）は元祐通寶（初鋳 1086 年）、（109）は至道元寶（初鋳 995 年）で、いずれも北宋銭である。

石製品は一石五輪塔（110）があり、溝 2 から出土した。地輪が欠損しており、残存高は 23.5cm を測る。地輪も含めて本来は 40 ～ 50cm 程であったと推定される。正面 1 面に梵字が刻まれている。江戸時代の形態を有している。

第Ⅳ章　まとめ

今回の調査によって、これまで発掘調査の少なかった白河街区北東辺部の街区区画溝の確認、街区内での園池構築の状況、また街区整備以前の谷地形などの土地景観が明らかになった。まず、今回確認された遺構の時代変遷についてまとめたい。

1．遺構の変遷

[第１期：平安時代後期以前]（図６）

調査地周辺は全体に現在より北東から南西への傾斜が大きく、広い谷地形（谷240）が存在した。このような旧地形の起伏は白河周辺のこれまでの調査でも自然流路や凹地などとして報告され[1][2]、平安時代後期の六勝寺造営・白河街区整備に伴い整地されたと考えられている。当調査地の谷240も、上層に遺物が集中し、その時期もほぼ平安時代後期に限られることから、谷が自然に埋没した湿地状の凹地を、法勝寺造営・白河街区整備段階に埋めた可能性が考えられる。

[第２期：平安時代後期～末期]（図７）

Ａ区の南北溝４は、出土土器から11世紀末には機能していたと判断でき、1075年白河天皇による法勝寺造営開始・白河街区の整備時期と重なることがわかる。溝の方向はほぼ座標北といってよく、検出した長さの問題からわずかな振れの有無は判断できない。ただ、これまで確認されてきた造営軸についての総合的な見解は東に0.3°～0.5°振れるとされ[3]、わずかであることから溝４の方向は造営軸に沿っていると言ってよいであろう。

溝４よりやや遅れて12世紀前半には、谷240を埋めた範囲に池238の構築がおこなわれる。池の埋没に伴って２期目にはやや縮小され、汀周囲に景石を配した園池に改築される。溝４・池238ともに12世紀末頃までには埋められるため、院政の衰退と共に廃絶したと捉えられる。

[第３期：鎌倉時代初頭]（図８）

池を埋め立て整地を行った後、13世紀初頭頃Ｂ区南側に東西方向の溝201が構築される。この溝は堀のような形状・規模をもっていたが、東側のＡ区では検出されなかった。もしＡ区に続くならば溝４を切ることになるが、そうなっていない。また、溝４の底面の標高56.3ｍに比べ、溝201の底面の標高は55.5ｍで、0.8ｍの大きな比高差が確認された。Ｂ区の現地表面はこの時期よりも削られている可能性が高く、院政期より深い溝が掘られた可能性があるが、溝201がＢ区とＡ区との間で途切れていると仮定するならば、この間に地形の段差や塀など、何らかの土地境界を意識した地形もしくは構築物がなければ説明できないと思われる。この時期以降の溝や土坑は、座標北より約３°東に振る傾向が確認でき、周囲の調査での平安時代～中世の遺構にも同じ傾向がみられる。この方位が旧愛宕郡の推定条理に似るという見解がある[4]。Ａ区東部では柱穴、土坑などの遺構がみられ、生活の痕跡が確認できる。溝201は14世紀後半頃には埋められる。

[第４期：鎌倉時代～室町時代]（図９）

鎌倉時代の半ば頃（13 世紀後半）に、平安時代の溝４とほぼ同じ位置に溝３が掘られる。ただし方向は第３期の遺構とほぼ同じ向きに振っている。水のよく流れていた溝であることから排水溝を兼ねた土地境界溝とみられ、室町時代後半に埋まるまで長く維持される。この時期前後にＣ区やＤ区に礎石建物が存在した可能性があるが、調査区の狭さから詳細は不明である。

[第５期：江戸時代]（図 10）

前期の溝３を踏襲した小規模な溝２が江戸時代中頃まで残るため、中世からの土地境界として長く意識されていたとみられる。江戸時代の白河は主に田畑が広がっていたとされている。かつて池のあったＢ区・Ｃ区では井戸が盛んに掘られる。江戸時代後期には大名の藩邸や岡崎別院などが建てられる。現在の岡崎別院の建立以前は当地にも藩邸が営まれていたとされている。

２．白河街区内での位置づけ

今回の調査区を、これまで示されてきた白河街区条坊復元図に位置づけたものが図 11 である。Ｂ区の南北溝４が、法勝寺東限を通る南北道の北延長の東側溝に近い位置となる。なお白河街区条坊地割は、浜崎一志氏が 1991 年に示された復元案[5]を使用した。

周辺の既往調査区との関係は図 12 に示した。溝４と同じく白河街区区割溝とされる調査２の南北溝ＳＤ 123 は溝４より東に位置する。両溝の肩間で約 5.0ｍを測り、小路幅としても狭いものである。調査３の東西溝ＳＤ２（４）は規模・方向ともＢ区の溝 201 とほぼ同じで、時期も平安時代～鎌倉時代で中世に埋められたとされ、東部で溝が断絶している様相から、この２つの溝になんらかの関係性が予想される。調査５では、平安時代末期まで存在していた東から西へ下がる地形段差が確認されており、当調査地でもＡ区西端とそれ以西に段差が存在していた可能性があることから、白河街区整備時に造成されたとされるひな壇状の平坦地の段[3][6]が連続していた状況が予想される。

３．今後の課題

今回の調査では、主要な調査目的であった白河街区整備から展開時期の遺構を確認することができた。特に実態のあまり明らかでなかった法勝寺北辺の街区開発について、当地まで確実に及んでいたことが判明したことは大きな成果である。さらに街区整備以前の土地景観として谷が確認され、平安時代末期にはその水脈を利用した園池の構築があり、鎌倉時代初頭、街区衰退期には防御のための堀を想起させるような規模の東西溝が造られるなど、当地の時代情勢に対応した遺構変遷が確認できたことも、今後の白河一帯の歴史研究の一助になると考える。

今後の課題としては、今回確認された遺構の帰属に対する検討が挙げられる。貴族等の邸宅もしくは寺院関係の堂塔か。池 238 からは土器類より瓦が目立って出土し、また溝４・池 238 から土製円塔が２個体であるが出土している。土製円塔は法勝寺跡・尊勝寺跡・鳥羽離宮跡[7]などで

出土例のある特殊な遺物であることから、寺院との関わりも想起される。ただし、当調査地で出土した瓦は、六勝寺や鳥羽離宮などと比べてほぼすべてが小型であり、主要寺院や邸宅の建物に使用されていたものとは思われない。瓦や遺物の量も、当地以南の調査地より少ないことからも、池238周囲すぐ近くに主要な建物はなく、瓦は塀や小規模な建物に使われていたものの可能性が高いと考えられる。白河街区整備以前から法勝寺の北に存在したとされる東光寺の規模については、現在の岡崎神社境内も含まれていたとされ[8][9]、鎌倉時代頃まで存続していたとされる[10]。当地南の調査では、鎌倉時代の方形池などが東光寺に関わる遺構と考えられているが、今回の遺構が東光寺に関わるものであるかも含め、今後行われる調査の成果を待ち考えていきたい。

注

（1）上村和直・辻裕司『法勝寺跡発掘調査概報　昭和61年度』京都市文化観光局　1987年
（2）上村和直・辻裕司「尊勝寺跡」『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　1989年
（3）上村和直「院政と白河」古代学協会編『平安京提要』角川書店　1994年
（4）第Ⅱ章　注（1）と同じ
（5）浜崎一志「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ』京都大学埋蔵文化財センター　1991年
（6）堀内明博「白河街区における地割とその歴史的変遷」『平安京・京都研究叢書1　院政期の内裏・大内裏と院御所』文理閣　2006年
（7）川上貢・前田義明・鈴木久男　他「鳥羽離宮跡Ⅰ　金剛心院跡の調査」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告第20冊』財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　2002年
（8）杉山信三「東光寺について」『日本建築学会研究報告　第30号』日本建築学会　1955年
（9）岡田保良「平安時代鴨東白河の景観復元」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』京都大学埋蔵文化財センター　1980年
（10）第Ⅱ章　注（2）と同じ

その他参考文献

（1）福山敏男「六勝寺の位置について」『日本建築史研究』墨水書房　1968年
（2）杉山信三「院の御所と御堂―院家建築の研究」『院家建築の研究』吉川弘文館　1981年
（3）杉山信三『尊勝寺跡』京都市文化観光局　1991年
（4）近藤章子「白河街区跡・法勝寺跡・岡崎遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-6』公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　2014年
（5）中谷正和「白河街区跡・吉田上大路町遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-12』公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　2017年
（6）鈴木久男『平安末期の広大な浄土世界　鳥羽離宮跡』新泉社　2018年
（7）新田和央「V　白河街区跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成30年度』京都市文化市民局　2019年

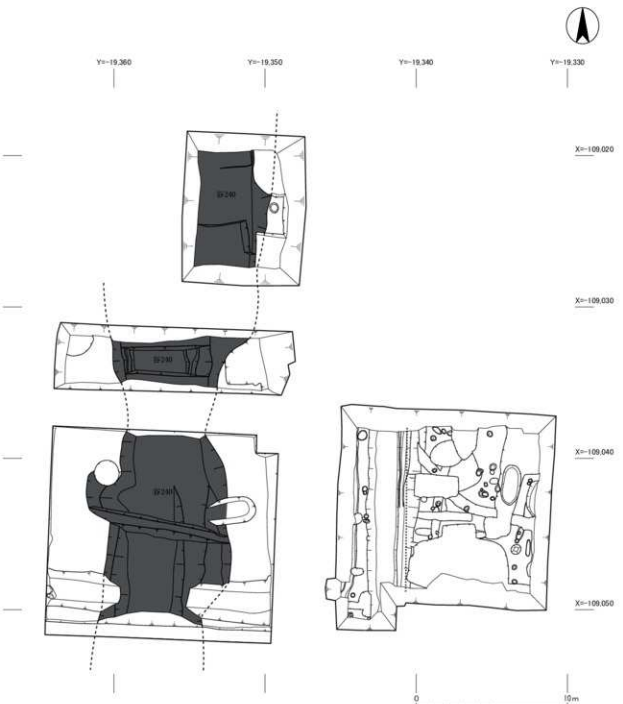


図6　遺構変遷図　第1期：平安時代後期以前（1：250）

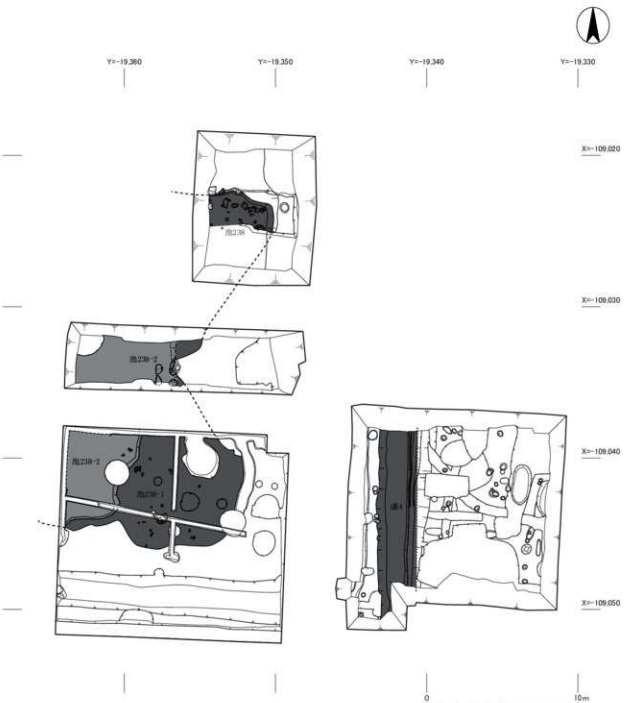


図7　遺構変遷図　第２期：平安時代後期～末期（１：250）

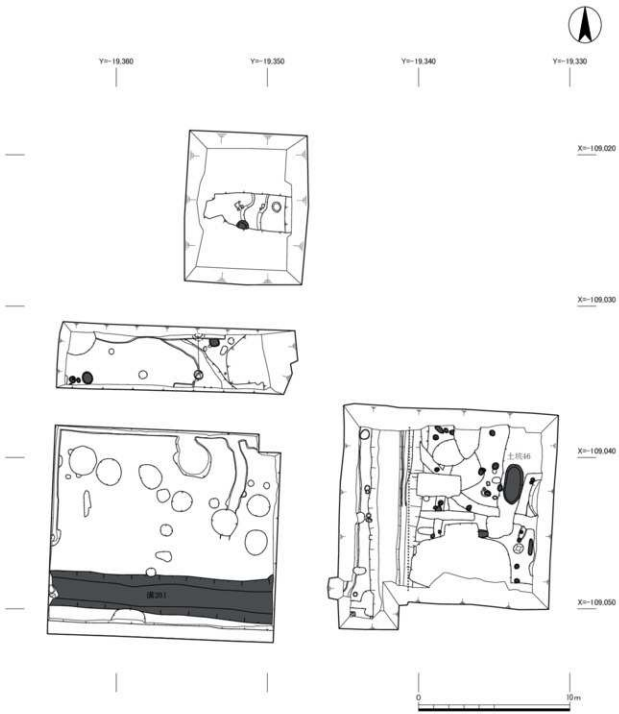


図8　遺構変遷図　第3期：鎌倉時代初頭（1：250）

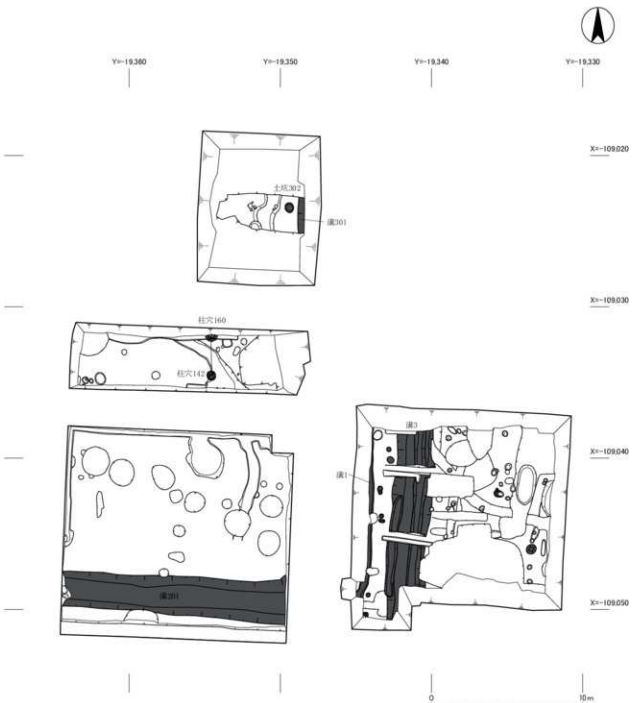


図９　遺構変遷図　第４期：鎌倉時代～室町時代（１：250）

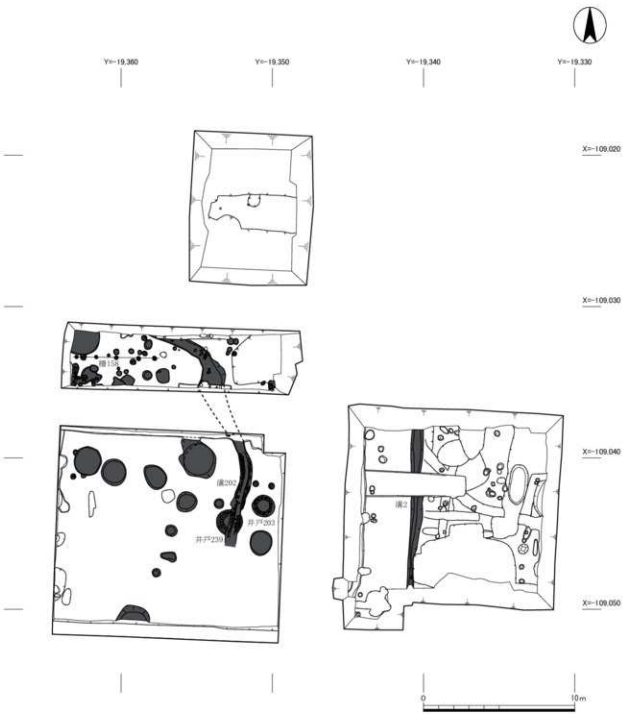


図10　遺構変遷図　第５期：江戸時代（１：250）

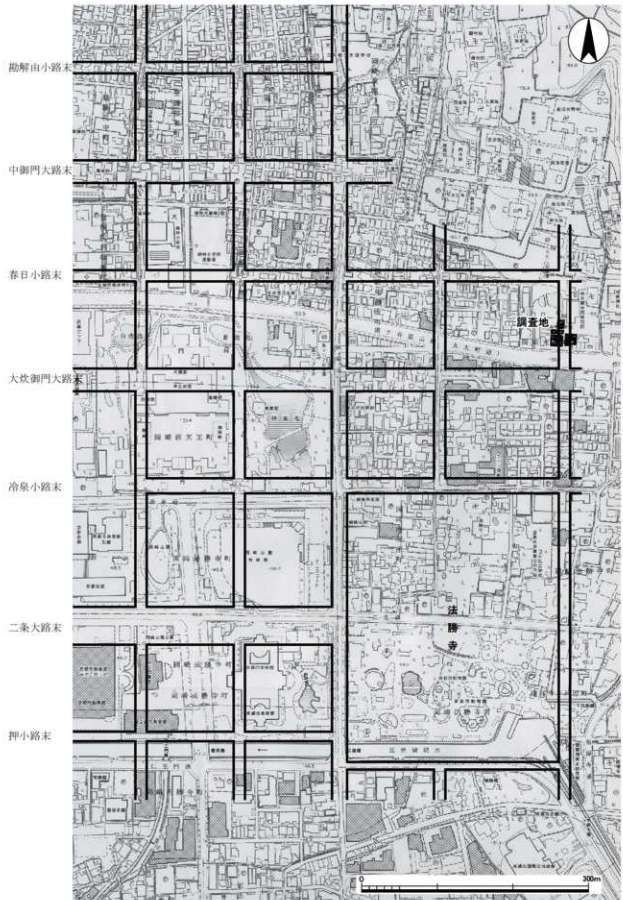
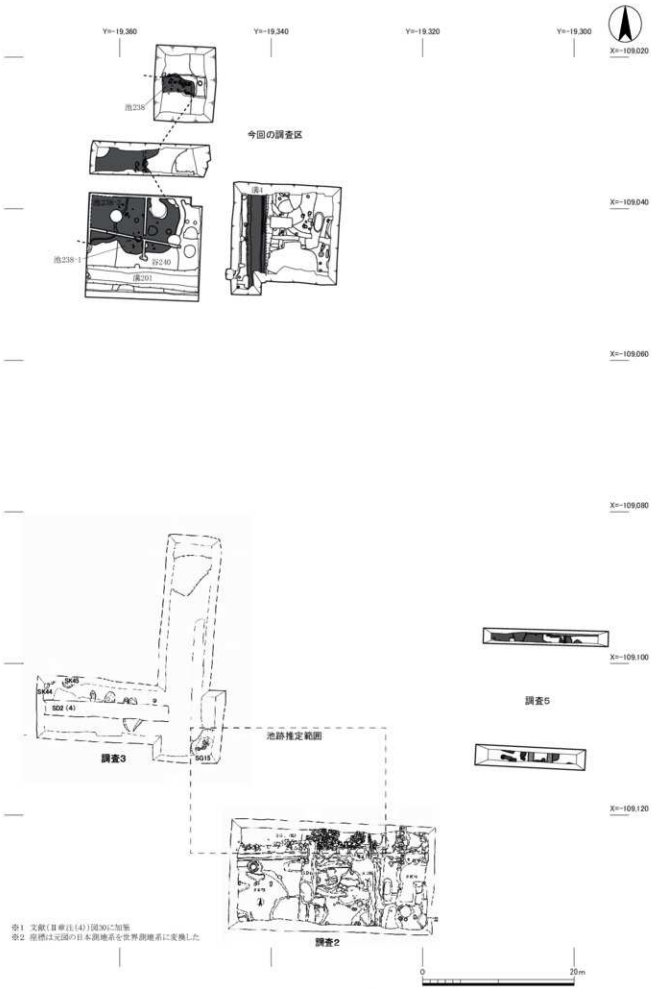


図11　白河街区条坊地割復元図（1：5,000）



※1　文献(Ⅱ章注(4))図30に加筆
※2　座標は元図の日本測地系を世界測地系に変換した

図12　周辺調査位置図（1：500）

表３　遺物観察表

土器類

掲載No.	器種	器形	調査区	地区	出土遺構・層		口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	調整	焼成	胎土	備考
1	土師器	皿	A	E5	溝4	下層	9.5	1.6	−	7.5YR7/6 橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
2	土師器	皿	A	E2・E3	溝4	下層	9.8	0.9	−	7.5YR7/4 にぶい橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
3	土師器	皿	A	E3・E4	溝4	最下層	10.0	1.1	−	2.5Y8/2 灰白色	(内) ナデ・ヨコナデ (外) ナデ・ヨコナデ	良	密	
4	土師器	皿	A	E5	溝4	下層	9.4	1.5	−	10YR8/2 灰白色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
5	土師器	皿	A	E2	溝4	下層	9.7	1.6	−	7.5YR8/4 浅黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
6	土師器	皿	A	E5	溝4	下層	10.4	1.3	−	10YR8/3 浅黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
7	土師器	皿	A	E2	溝4	下層	9.9	1.4	−	10YR7/2 にぶい黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
8	土師器	皿	A	E3	溝4	下層	14.2	2.8	−	10YR8/3 浅黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
9	土師器	皿	A	E3	溝4	下層	14.4	2.8	−	7.5YR8/4 浅黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
10	土師器	皿	A	E2	溝4	下層	15.0	2.4	−	10YR8/3 浅黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
11	土師器	皿	A	E3	溝4	下層	15.1	3.0	−	10YR8/3 浅黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
12	土師器	皿	A	E3	溝4	下層	15.4	3.3	−	10YR8/4 浅黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
13	土師器	甕	A	E3	溝4	最下層	18.8	(6.7)	−	7.5YR8/4 浅黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	外面煤付着
14	瓦器	椀	A	E2・E3	溝4	下層	15.1	(4.3)	−	N4/0 灰色	(内) 沈線・ナデのちミガキか (外) ナデか	不良	密	
15	山茶碗	椀	A	E5	溝4	下層	17.4	5.0	8.0	N7/0 灰白色	(内) 轆轤ナデ (外) 轆轤ナデ・貼付高台・籾圧痕・糸切	良	密	
16	白磁	碗	A	E2・E3	溝4	下層	14.5	(4.4)	−	(釉) 2.5Y7/2 灰黄色 (胎) 2.5Y8/1 灰白色	(内) 施釉 (外) 施釉	良	密	
17	白磁	碗	A	E2	溝4	下層	16.1	6.6	7.0	(釉) 5Y7/1 灰白色 (胎) 5Y7/1 灰白色	(内) 施釉・沈線 (外) 施釉・回転ケズリ・ケズリ出し高台	良	密	
18	土師器	皿	B		谷240		10.5	1.6	−	10YR8/2 灰白色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
19	土師器	皿	B	J2	谷240	上層	10.0	1.5	−	2.5Y8/1 灰白色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
20	土師器	皿	B		谷240		9.6	1.7	−	10YR7/4 にぶい黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	内面煤付着
21	土師器	皿	C	J7	谷240		11.4	1.2	−	2.5Y7/1 灰白色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・ナデ・オサエ	良	密	
22	土師器	皿	C	I7	谷240	上層	9.0	1.1	−	10YR8/2 灰白色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・ナデ・オサエ	良	密	
23	土師器	皿	C	K7	谷240		9.6	1.9	−	7.5YR7/4 にぶい橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
24	土師器	皿	B		谷240	下層	10.1	2.1	−	10YR7/2 にぶい黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
25	土師器	皿	B	J2	谷240	上層	10.2	1.9	−	5YR7/6 橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
26	土師器	皿	B		谷240		12.2	2.4	−	2.5Y8/1 灰白色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ	良	密	
27	土師器	皿	C	K7	谷240		12.0	1.9	−	7.5YR8/4 浅黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
28	土師器	皿	B		谷240		14.2	2.5	−	10YR7/2 にぶい黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	内面煤付着
29	土師器	皿	B		谷240		15.0	2.5	−	7.5YR8/3 浅黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
30	土師器	皿	B		谷240		14.6	3.0	−	10YR7/2 にぶい黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	

掲載No.	器種	器形	調査区	地区	出土遺構・層		口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	調整	焼成	胎土	備考
31	土師器	羽釜	C	J7	谷240	下層	27.8	(10.0)	−	10YR6/3にぶい黄橙色	(内)ヨコナデ・ハケ・ナデ (外)ヨコナデ・ナデ・羽部貼付時のナデか	良	密	
32	白色土器	台付皿	C	I7	谷240		−	(3.1)	6.6	2.5Y8/2灰白色	(内)ナデ (外)ナデ	良	密	
33	白色土器	高坏	B	J2	谷240	下層	11.0	(3.5)	−	2.5Y8/2灰白色	(内)轆轤ナデ・ナデ・ケズリ (外)轆轤ナデ	良	密	
34	白色土器	高坏	B		谷240		−	(6.3)	−	2.5Y8/1灰白色	(内)心棒づくり (外)ヨコナデ・ナデのちケズリ	良	密	
35	瓦器	椀	B	J2	谷240	上層	14.8	(4.7)	−	N4/0灰色	(内)沈線・ミガキ・暗文 (外)ナデ・ミガキ	良	密	
36	須恵器	鉢	B	I3	谷240		29.1	(5.1)	−	N5/0灰色～N7/0灰白色	(内)轆轤ナデ (外)轆轤ナデ	良	密	東播系
37	灰釉陶器	段皿	B		谷240	下層	−	(2.2)	7.0	(釉)10Y6/2オリーブ灰色 (胎)N7/0灰白色	(内)施釉 (外)轆轤ナデ・貼付高台・ヘラ切りのちナデ	良	密	
38	山茶碗	椀	B		谷240		16.9	6.0	7.8	10YR6/1褐灰色	(内)轆轤ナデ (外)轆轤ナデ・貼付高台・静止糸切	良	密	墨書有
39	白磁	皿	B		谷240		13.0	(3.2)	−	(釉)7.5Y7/1灰白色 (胎)N8/0灰白色	(内)施釉 (外)施釉	良	密	
40	白磁	碗	B	J2	谷240	上層	15.7	(4.5)	−	(釉)7.5Y8/2灰白色 (胎)7.5Y8/1灰白色	(内)施釉 (外)ケズリ・施釉	良	密	
41	白磁	碗	B		谷240		15.0	(5.1)	−	(釉)5Y8/1灰白色 (胎)2.5Y8/2灰白色	(内)施釉 (外)施釉・ケズリ	良	密	
42	白磁	碗	B		谷240		−	(3.1)	6.6	(釉)7.5Y7/1灰白色 (胎)N8/0灰白色	(内)施釉 (外)施釉・ケズリ出し高台	良	密	
43	土師器	皿	C	K7	池238・1		9.4	1.0	−	10YR7/2にぶい黄橙色	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
44	土師器	皿	B	J5	池238・1		8.6	1.1	−	10YR8/3浅黄橙色	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
45	土師器	皿	B	K4	池238・1		8.0	1.5	−	7.5YR8/3浅黄橙色	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
46	土師器	皿	D	I10	池238	下層	7.5	1.1	−	2.5Y8/2灰白色	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
47	土師器	皿	B	L4	池238		9.0	1.8	−	10YR8/1灰白色	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
48	土師器	皿	B	L5・L6	池238		9.0	1.8	−	10YR8/3浅黄橙色	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
49	土師器	皿	D	I10	池238	下層	9.1	1.7	−	2.5Y8/2灰白色	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
50	土師器	皿	B	J4	池238・1		9.2	1.7	−	2.5Y8/1灰白色	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
51	土師器	皿	D	H10	池238	堤断面上	9.2	2.3	−	10YR8/2灰白色	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
52	土師器	皿	B	L4	池238・1		10.8	1.7	−	10YR8/2灰白色	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
53	土師器	皿	B	K3・K4・L3・L4	池238・1		14.2	2.5	−	10YR8/2灰白色	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
54	土師器	皿	C		池238・1		14.6	2.9	−	2.5Y8/1灰白色	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
55	土師器	皿	B	L5	SX238		14.8	3.2	−	10YR8/1灰白色	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
56	土師器	皿	B	J4	池238・1		15.9	3.2	−	10YR8/3浅黄橙色	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
57	白色土器	椀	C	J7	池238・1		−	(3.3)	9.8	10YR8/1灰白色	(内)轆轤ナデ (外)轆轤ナデ・貼付高台・轆轤ナデ	良	密	
58	白色土器	高坏	B	J4	池238・1		−	(7.3)	−	2.5Y8/2灰白色	(内)心棒づくり・ナデ (外)タテ方向のケズリ	良	密	
59	緑釉陶器	皿	B	L5	池238		−	(1.3)	6.6	(釉)10Y7/2灰白色 (胎)N8/0灰白色	(内)ミガキのち施釉・陰刻 (外)轆轤ナデか・施釉・貼付高台・回転ケズリ	良(硬質)	密	
60	白磁	皿	B	K5	池238・1		10.9	2.6	4.0	(釉)5Y8/2灰白色 (胎)5Y8/1灰白色	(内)轆轤ナデのち施釉・沈線 (外)轆轤ナデのち施釉・回転ケズリ	良	密	

掲載No.	器種	器形	調査区	地区	出土遺構・層		口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	調整	焼成	胎土	備考
61	白磁	碗	B	K5	池238・2	粘土層上面	14.8	(4.0)	−	(釉) 5Y6/2灰オリーブ色 (胎) 5Y8/1灰白色	(内) 轆轤ナデのち施釉 (外) 轆轤ナデのち施釉・回転ケズリ	良	密	
62	白磁	碗	C	I7	池238・1	地山直上	−	(3.0)	6.9	(釉) 7.5Y7/1灰白色 (胎) N8/0灰白色	(内) 轆轤ナデのち施釉・沈線 (外) 回転ケズリのち施釉・ケズリ出し高台	良	やや粗	内面使用により摩滅
63	土師器	皿	B	I2	溝201	下層	7.9	1.6	−	7.5YR8/2灰白色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
64	土師器	皿	B	J2	溝201	上層	8.7	1.3	−	5YR7/6橙色	(内) ヨコナデ・オサエ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
65	土師器	皿	B	J2	溝201	上層	8.6	1.3	−	7.5YR8/2灰白色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	口縁部煤付着
66	土師器	皿	B	J2	溝201	下層	11.8	(2.2)	−	10YR8/2灰白色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
67	土師器	皿	B		溝201	下層	12.0	3.2	−	10YR8/1灰白色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
68	須恵器	甕	B	H2	溝201	中層	34.4	(6.3)	−	N5/0灰色	(内) ヨコナデ・ナデ・板ナデ (外) ヨコナデ・ナデ・オサエ・タタキ	良	密	
69	瓦器	小碗	B	I2	溝201	下層	7.6	3.5	4.1	N4/0灰色～2.5Y8/1灰白色	(内) ヨコナデ・オサエのちナデ (外) ヨコナデ・ナデ・貼付高台・ナデ	良	密	
70	青磁	碗	B	J2	溝201	下層	−	(3.0)	4.4	(釉) 7.5Y6/1灰色 (胎) N7/0灰白色	(内) 施釉 (外) 施釉・貼付高台・回転ケズリ	良	密	
71	土師器	皿	A	C4	土坑46		6.5	1.0	−	7.5YR7/4にぶい橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
72	土師器	皿	A	C4	土坑46		8.3	1.6	−	7.5YR8/4浅黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
73	土師器	皿	A	C4	土坑46		8.9	1.4	−	7.5YR7/4にぶい橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
74	土師器	皿	A	C4	土坑46		9.0	1.4	−	7.5YR8/3浅黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
75	土師器	皿	A	C4	土坑46	土器北側	13.7	2.3	−	7.5YR7/4にぶい橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
76	土師器	皿	A	C4	土坑46		14.4	2.8	−	7.5YR7/4にぶい橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
77	白磁	碗	A	C4	土坑46		15.4	(3.2)	−	(釉) 2.5Y7/1灰白色 (胎) 5Y7/1灰白色	(内) 轆轤ナデ・施釉 (外) 施釉	良	密	
78	瓦質土器	羽釜	A	C4	土坑46	土器北側	17.6	13.7	−	N5/0灰色	(内) ヨコナデ・鍔貼付時のオサエのちハケ・ナデ・不定方向のナデ (外) ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・オサエ・オサエのち板ナデ	良	密	外面煤付着
79	瓦質土器	羽釜	A	C4	土坑46		21.2	(13.0)	−	N5/0灰色	(内) ヨコナデ・オサエ・ハケ (外) ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・オサエ	良	密	
80	瓦質土器	三足羽釜	A	C4	土坑46		20.0	(10.6)	−	N5/0灰色	(内) ヨコナデ・オサエ・ハケ (外) ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・脚貼付時のナデ	良	密	
81	土製品	土製円板	A	E5	溝4	下層	(径) (7.5)	(高) 3.5	−	(釉) 2.5Y7/2灰黄色 (胎) 2.5Y8/1灰白色	(外) 型による成型 (底) ナデ	良 (軟質)	密	
82	土製品	土製円板	B	J3・J4	池238・2	集石243内	(径) (6.4)	(高) 3.1	−	(釉) 若草色 (胎) 10YR8/3浅黄橙色	(外) ナデ (底) ナデ	良	密	
83	土師器	皿	A	E3・E4	溝3	下層	9.3	1.6	−	10YR8/3浅黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
84	土師器	皿	A	E3・E4	溝3	下層	8.9	(1.7)	−	7.5YR8/4浅黄橙色	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
85	土師器	皿	A	E3・E4	溝3	下層	9.9	(1.7)	−	10YR8/4浅黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
86	土師器	皿	A	E2	溝3	上層	8.4	(1.5)	−	10YR8/3浅黄橙色	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	
87	土師器	皿	A	E1	溝3	上層	9.0	1.7	−	10YR8/3浅黄橙色	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	良	密	

掲載No.	器種	器形	調査区	地区	出土遺構・層		口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	調整	焼成	胎土	備考
88	土師器	皿	A	E2・E3	溝3	下層	13.7	(2.5)	−	7.5YR8/4 浅黄橙色	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
89	土師器	皿	A	E3・E4	溝3	下層	14.9	(3.0)	−	7.5YR8/4 浅黄橙色	(内)ヨコナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
90	須恵器	鉢	A	E2・E3	溝3	下層	30.8	(7.6)	−	N7/0 灰白色	(内)横撫ナデ (外)横撫ナデ	良	密	東播系
91	須恵器	鉢	A	E4	溝3	上層	−	(3.5)	−	N5/0 灰色	(内)横撫ナデ (外)横撫ナデ	良	密	東播系
92	施釉陶器	擂鉢	A	E5	溝3	上層	−	(5.3)	−	7.5YR6/3 にぶい褐色	(内)擂り目 (外)横撫ナデ	良	密	備前焼
93	須恵器	鉢	A	E4	溝3	下層	−	(4.2)	9.9	N6/0 灰色	(内)横撫ナデ (外)横撫ナデ・貼付高台	良	密	
94	瓦質土器	羽釜	A	E3・E4	溝3	下層	18.0	(5.7)	−	2.5Y6/1 黄灰色	(内)ヨコナデ・ハケ (外)ヨコナデ・羽部貼付時のナデ・オサエか	やや軟	密	外面煤付着
95	瓦質土器	羽釜	A	E2・E3	溝3	下層	26.4	(4.3)	−	5Y4/1 灰色	(内)ヨコナデ・ハケ (外)ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・ナデか	良	密	外面煤付着
96	瓦質土器	火鉢	A	E3・E4	溝3	下層	−	(6.0)	−	N4/0 灰色	(内)ナデのちミガキ・ナデ (外)ナデのちミガキ・型による成形	良	密	円形
97	瓦質土器	火鉢	A	E2・E3	溝3	下層	−	(8.5)	−	N3/0 暗灰色	(内)ヨコ方向ミガキか・ヨコ方向ナデか (外)ナデたはミガキか・スタンプ文	良	密	方形 内面被熱により赤化
98	土師器	皿	A	E5	溝2		10.9	(1.9)	−	10YR8/2 灰黄褐色	(内)ヨコナデ・ナデ (外)ヨコナデ・オサエ	良	密	
99	染付磁器	碗	A	E3	溝2		15.3	(6.6)	−	(釉)10GY7/1 明緑灰色 (型)5R6/0 灰白色	(内)施釉 (外)施釉・ケズリ出し高台	良	密	

木製品・金属製品・石製品

掲載No.	器種	器形	調査区	地区	出土遺構・層		長軸/外法(cm)	短軸/内法(cm)	厚(cm)	調整	備考
100	木製品	曲物蓋	C	K7	谷240		17.7	(11.5)	0.3	(内)横板裏有 側壁で綴じるための穿孔有	表面留漆有
101	木製品	曲物底板	C	K7	谷240		15.5	15.0	1.1	(内)刃物による加工痕下有 (外)加工痕有 (側)釘穴3カ所有	
102	木製品	曲物底板	D		谷240	下層	(14.0)	(6.0)	0.4		
103	漆器	椀	C	J7	谷240	下層	−	(器高)(3.1)	6.2		高台内墨書有
104	木製品	箸	B		谷240		(16.4)	0.6	0.5		
105	木製品	箸	B		谷240		(16.5)	0.6	0.4		先端焦げ有
106	木製品	箸	B		谷240		(18.9)	0.6	0.4		先端焦げ有
107	銭貨	元祐通寶	B	I2	溝201	上層	(縦)2.1 (横)2.1	(縦)0.55(横)0.55	(重さ) 1.3g		
108	銭貨	元祐通寶	B	I2	溝201	上層	(縦)2.05 (横)2.45	(縦)0.7 (横)0.65	(重さ) 2.9g		
109	銭貨	至道元寶	B	I2	溝201	上層	(縦)2.5 (横)2.2	(縦)0.55 (横)0.6	(重さ) 2.9g		
110	石製品	一石五輪塔	A	E2	溝2		(23.5)	(12.6)	(11.4)		地輪欠損

瓦類

掲載No.	器形	調査区	地区	出土遺構・層		瓦当径(cm)	瓦当厚(cm)	長(cm)	幅(cm)	高(cm)	厚(cm)	色調	調整	焼成	胎土	備考
111	軒丸瓦	B	K2	谷240	上層	–	–	(11.3)	(2.2)	(9.4)		N4/0灰色	（凸面）范・ナデ （凹面）ヨコ方向ナデ・不定方向ナデ・オサエ	良	密	
112	軒丸瓦	C	L7	池238－1		–	–	(2.5)	(7.0)	(9.7)		N8/0灰白色	（凸面）范 （凹面）ヨコ方向ナデ・オサエ・タテ方向ナデ	良	密	
113	軒丸瓦	B	H4	池238－2		(8.9)	–	(2.9)	–	–	–	7.5YR8/2灰白色	（凸面）范 （凹面）ヨコ方向ナデ・不定方向ナデ	不良	密	
114	軒丸瓦	B	I5	池238－1		(9.6)	–	(2.4)	–	–	–	10YR8/2灰白色	（凸面）范 （凹面）ヨコ方向ナデ・オサエ・貼付ナデのちオサエ	不良	密	
115	軒丸瓦	B	L4	池238－2		(12.6)	–	(7.0)	–	–	–	5Y5/1	（凸面）范・縄目 （凹面）ケズリ・工具によるナデ・布目	良	密	
116	軒丸瓦	D	I10	池238	下層	12.0	–	(3.9)	–	–	–	N4/0灰色	（凸面）范 （凹面）ヨコ方向ナデ・タテ方向ナデ・オサエ・貼付時のオサエ	良	密	
117	軒丸瓦	C	K7	池238－2		11.0	–	(10.0)	–	–	–	2.5Y8/1灰白色	（凸面）范・タテ方向ナデ （凹面）ヨコ方向ナデ・不定方向ナデ・貼付後ナデ・布目	不良	密	
118	軒丸瓦	B	J2	溝201	中層	–	–	(2.7)	(4.8)	(9.2)		N3/0暗灰色	（凸面）范 （凹面）タテ方向のナデ	良	密	
119	軒丸瓦	B	J2	溝201	中層	–	–	(2.1)	(6.9)	(6.0)		N3/0暗灰色	（凸面）范・オサエ （凹面）オサエ	良	密	
120	軒丸瓦	A	C4	土坑46		–	–	(2.0)	(4.8)	(4.5)		7.5YR7/4にぶい橙色	（凸面）范・ヨコ方向ナデ・タテ方向ナデ （凹面）摩滅 ナデか	良	密	
121	軒平瓦	B	J2	谷240	上層	–	6.7	(6.5)	(13.3)	–	–	N5/0灰色	（凸面）范・布目のちヨコ方法ナデ・ヨコ方法ナデ （凹面）ヨコ方向ナデ	良	密	
122	軒平瓦	B	L5	谷240	下層	–	(4.0)	(21.5)	(23.5)	–	–	N3/0暗灰色	（凸面）范・ヨコ方向ナデ・糸切のち布目 （凹面）タテ方向縄目・糸切のちタテ方向縄目	良	密	
123	軒平瓦	C	J7	池238－1		–	3.5	27.6	20.8	–	–	N4/0灰色	（凸面）范・ヨコ方向ナデ・布目 （凹面）ヨコ方向ナデ・ナデ （側面）タテ方向ケズリ	良	密	
124	軒平瓦	A	E2	溝4	下層	–	5.2	(16.1)	23.7	–	–	N3/0暗灰色	（凸面）范・ヨコ方向ケズリ・ナデか （凹面）ヨコ方向ナデ・タテ方向ナデ （側面）タテ方向ケズリのちナデ	良	密	凹面ヘラ記号有
125	軒平瓦	B	K3	池238－2		–	4.0	(5.3)	(8.2)	–	–	N3/0暗灰色	（凸面）范・ケズリ・布目 （凹面）ケズリ・工具によるナデ	良	密	
126	軒平瓦	A	E3	溝4	下層	–	4.4	(7.6)	(5.6)	–	–	N4/0灰色	（凸面）范・ヨコ方向ケズリ・布目 （凹面）摩滅	良	密	
127	軒平瓦	D	H11	谷240	下層	–	4.0	(5.2)	(5.8)	–	–	2.5Y7/2灰黄色	（凸面）范・布目 （凹面）ヨコ方向ナデ・ナデ	良	密	
128	軒平瓦	B	K5	池238		–	3.9	(13.8)	17.0	–	–	N5/0灰色	（凸面）范・ヨコ方向ケズリ・布目 （凹面）ヨコ方向ナデ・オサエ （側面）タテ方向ナデ	良	密	范傷有
129	軒平瓦	C	J7	池238－1		–	(3.5)	(5.8)	16.8	–	–	N6/0灰色～2.5Y8/1灰白色	（凸面）范・布目 （凹面）ナデ・オサエ	良	密	
130	軒平瓦	D	H10	池238	底面直上	–	3.5	(13.0)	18.0	–	–	N3/0暗灰色	（凸面）布目のち范・ヨコ方向ケズリ・布目 （凹面）ヨコ方向ナデ・タテ方向縄目 （側面）タテ方向ケズリのちナデ	良	密	
131	軒平瓦	D	I10	池238	上層	–	(3.2)	(3.4)	(10.4)	–	–	N4/0灰色	（凸面）范 （凹面）オサエ・オサエのちヨコ方向ナデ・タテ方向ナデ	良	密	
132	軒平瓦	B	K2	溝201	中層	–	2.8	(8.9)	(7.5)	–	–	N3/0暗灰色	（凸面）布目のち范・ヨコ方向ケズリ・布目 （凹面）布目・折り曲げ・オサエ	良	密	
133	軒平瓦	B	H2	溝201	中層	–	3.0	(4.5)	(7.8)	–	–	N7/0灰白色	（凸面）范・ヨコ方向ケズリ・布目 （凹面）オサエ・ナデのちハケ目	良	密	
134	軒平瓦	A	C4	土坑46	上部南側	–	2.8	(6.4)	(12.5)	–	–	N4/0灰色	（凸面）范・ヨコ方向ケズリ・布目 （凹面）オサエか・ナデ	良	密	

掲載No.	器形	調査区	地区	出土遺構・層		瓦当径(cm)	瓦当厚(cm)	長(cm)	幅(cm)	高(cm)	厚(cm)	色調	調整	焼成	粘土	備考
135	軒平瓦	C	K7	池 238 － 1		－	3.0	(6.7)	(5.9)	－	－	N3/0 明灰色	(凸面) 瓦・赤切のち塑滅により不明瞭 (凹面) ヨコ方向ナデ・ナデ	良	密	
136	軒平瓦	B	L5・L6	SX238		－	(3.3)	19.3	11.1	－	－	N5/0 灰色	(凸面) 瓦・塑滅 布目か (凹面) オサエ (側面) ヨコ方向ナデ	良	密	
137	軒平瓦	D	H10	谷 240	下層	－	(3.4)	(6.7)	(12.0)	－	－	N5/0 灰色	(凸面) 瓦 (凹面) ヨコ方向ナデ・ナデ	やや不良	密	
138	軒平瓦	B	J2	溝 201	中層	－	3.9	(7.2)	(8.5)	－	－	N3/0 明灰色	(凸面) 瓦・布目 (凹面) ヨコ方向ケズリ・ヨコ方向ナデ・タテ方向のナデ	良	密	凹面工具痕有
139	軒平瓦	B	L5・L6	池 238		－	4.2	(3.2)	(10.8)	－	－	N4/0 灰色	(凸面) 瓦・ヨコ方向ナデ・ナデ (凹面) ヨコ方向ナデ	良	密	
140	軒平瓦	B	L5・L6	池 238		－	4.7	(6.8)	16.4	－	－	N3/0 明灰色	(凸面) 瓦・ヨコ方向ナデ・ナデ (凹面) ヨコ方向ナデ・ナデ	良	密	瓦にハナレ砂付着
141	軒平瓦	B	L5・L6	池 238		－	3.9	(4.9)	(12.1)	－	－	N8/0 灰白色	(凸面) 瓦・ヨコ方向ナデ (凹面) ヨコ方向ナデ	良	密	
142	軒平瓦	B	I4	池 238 － 1		－	4.1	(6.0)	(11.0)	－	－	SY7/1 灰白色	(凸面) 瓦・ヨコ方向ナデ・布目 (凹面) ヨコ方向ナデ	良	密	
143	軒平瓦	B	I4	池 238 － 1		－	(4.3)	(4.0)	(7.3)	－	－	N7/0 灰白色	(凸面) 瓦・ヨコ方向ナデ・ナデ (凹面) ヨコ方向ナデ	良	密	
144	軒平瓦	B	L5・L6	池 238		－	3.7	(5.6)	(8.5)	－	－	N4/0 灰色	(凸面) 瓦・布目のちオサエのちナデ (凹面) ヨコ方向ナデ・ヨコ方向ケズリ・ヨコ方向ナデ	良	密	
145	丸瓦	C	I7	池 238 － 2		－	－	24.0	12.9	6.7	2.0	N4/0 灰色	(凸面) ケズリ・ナデ (凹面) ケズリ・布目・ケズリ (側面) ケズリ	良	密	
146	丸瓦	C	I7	池 238		－	－	27.6	11.1	5.1	1.3	N5/0 灰色	(凸面) ヨコ方向ナデ・ナデ・タテ方向の縄目 (凹面) ヨコ方向ケズリ・布目 (側面) ナデ・タテ方向ケズリ	良	密	
147	丸瓦	B	J5	池 238 － 1		－	－	(28.7)	(10.8)	5.1	1.2	N4/0 灰色	(凸面) ヨコ方向ナデ・タテ方向縄目 (凹面) ヨコ方向ケズリ・布目	良	密	凸面玉縁部にヘラ記号あり
148	丸瓦	D	H10	池 238	底面直上	－	－	(32.8)	13.2	5.9	1.3	N4/0 灰色	(凸面) ヨコ方向ナデ・縄目のちナデ・タテ方向縄目 (凹面) ヨコ方向ケズリ・布目 (側面) タテ方向ケズリ	良	密	
149	平瓦	C	J7	池 238 － 1		－	－	(20.4)	17.8	3.7	1.7	N4/0 灰色	(凸面) 平行タタキ (凹面) 布目 (側面) タテ方向ケズリ	良	密	
150	平瓦	B	J5	池 238 － 2	238 － 1 上面	－	－	26.1	16.8	3.4	1.6	N5/0 灰色	(凸面) タテ方向ナデ (凹面) 布目・ヨコ方向ケズリ・ヨコ方向ナデ (側面) タテ方向ケズリ・ナデ	良	密	
151	平瓦	C	J7	池 238 － 1		－	－	25.6	16.3	3.3	1.4	N6/0 灰色	(凸面) ナデ (凹面) 布目 (側面) タテ方向ケズリ	良	密	
152	平瓦	D	H10	池 238	底面直上	－	－	(24.8)	(16.3)	3.1	1.7	N4/0 灰色	(凸面) 布目のちタテ方向ナデ・ヨコ方向ケズリ (凹面) 布目 (側面) タテ方向ナデ・タテ方向ケズリ	良	密	
153	平瓦	B	K2	溝 201	上層	－	－	22.7	15.2	3.0	1.3	N5/0 灰色	(凸面) 縄目 (凹面) 赤切のち布目のちナデ (側面) タテ方向のケズリ	良	密	

附章１　白河街区跡の古環境および植物利用の検討

松元美由紀・斉藤崇人・井上智仁（パリノ・サーヴェイ株式会社）

はじめに

白河街区跡（京都市左京区岡崎天王町26番５）は、平安時代後期に造営された白河殿や六勝寺を中心とする街区である。今回の発掘調査では、白河街区の区画地割溝と考えられている平安時代後期に帰属する南北方向の溝や、園池跡が検出されたほか、園池跡構築以前の谷状遺構が確認された。

本分析調査では、園池を構成する池跡の堆積物を対象に珪藻分析、花粉分析、その下層の谷状遺構堆積物を対象に種実遺体分析を実施し、古環境および植物利用に関する情報を得る。

１．試料

分析試料は、Ｂ区西壁より２点（４層、５層）、Ｃ区北壁より２点（17層、18層）、Ｄ区西壁より２点（５層、６層）と、Ｂ区谷240より１点の、土壌計７点である。（採取位置は図版２・３・５参照）

発掘調査所見によると、園池（池238）は２時期に分けられている。上述した試料のうち、Ｂ区西壁の５層は古い時期（１時期目）の池の一番下の堆積物で、４層は新しい時期（２時期目）の池の堆積物と考えられている。層相は、５層が褐灰色を呈する均質な粘土、４層が灰褐色を呈する砂礫混じり粘土質シルトからなる。

Ｃ区北壁の18層は、古い時期（１時期目）の池の一番下の堆積物で、Ｂ区西壁の５層と対応すると考えられている。17層は新しい時期（２時期目）の池の堆積物と考えられている。層相は、18層が暗灰色を呈する砂礫混じりシルト、灰褐色を呈する砂礫混じりシルトからなる。

一方、Ｄ区は、上述のＢ区やＣ区から地区が離れており、Ｂ区やＣ区と同じ池である確証が得られていないとされる。遺構の残存状況が不良で埋土も薄く、池の縁に近い可能性が考えられている。Ｄ区がＢ区やＣ区と同じ池である場合、Ｄ区西壁の６層は池の堆積物と考えられているが、５層については、池の堆積物であるか確証が得られていないとされる。層相をみると、６層は灰色を呈するシルトで、黄褐色シルトブロックや炭化物を含む。５層は灰褐色を呈する砂礫混じりシルトで、炭化物などを含む。

Ｂ区谷240は、１時期目の池跡に切られる谷状遺構堆積物から採取された試料である。層相は、黒灰を呈する砂質シルトからなり、種実遺体や木材（木製品含む）、炭化材などの植物片を多量に含む他、骨片や土器片などの遺物を含む。

以上の試料のうち、Ｂ区西壁の５層、４層、Ｃ区北壁の18層、17層、Ｄ区西壁の６層、５層について珪藻分析を実施し、Ｂ区西壁の４層、５層については花粉分析を実施する。また、１時期目池跡に切られるＢ区谷240について、種実遺体分析を実施する。

2．分析方法

（1）珪藻分析

湿重約5gをビーカーに量り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が産出した後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt（1930-1966）、Krammer and Lange-Bertalot（1985-1991）、Desikachiary（1987）、Lange-Bertalot（2000）などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示す。

堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石が100個体以上産出した試料について珪藻化石群集変遷図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、基本的に1％以上（産出種数により変更）の産出率を示す分類群についてのみ表示する（図中の＋印は、総数100個体未満の試料について検出産出を示す）。また、図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示する。

塩分に対する適応性とは、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方がよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いか低いかといったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。

pHに対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。

流水に対する適応性とは、流れのある水域の基物（岩石・大型の藻類・水生植物など）に付着生育する種群であり、特に常時、流れのあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定は、どちらにで

も生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

（2）花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

（3）種実遺体分析

土壌試料から種実遺体を分離・抽出するために、試料 100cc（169g）と 500cc（871g）を分割して水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後の篩内の試料を粒径別にシャーレに移して、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実や葉などの大型植物遺体をピンセットで抽出する。抽出対象は、試料 100cc は全分類群、500cc は主に粒径 1mm 以上の新たな分類群や状態が良好な分類群とする。

大型植物遺体の同定は、現生標本や椿坂（1983）、藤下（1984）、角野（1994）、石川（1994）、谷城（2007）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2012）等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数の一覧表と、大型植物遺体群集図で示す。試料 500cc や取り上げ試料は、試料 100cc で確認される分類群のみ定性的な量比をプラス「+」で示し、新たに確認された分類群や栽培種を個数で示す。また、主要分類群の写真を添付し、一部の種実の大きさをデジタルノギスで計測し、結果を一覧表に併記して同定根拠とする。

大型植物遺体以外の分析残渣は、一覧表の下部に定性的な量比をプラス「+」で示す。分析後は、大型植物遺体を分類群別に容器に入れ、エタノール溶液で液浸保存する。分析残渣は容器に入れて保管する。

3．結果

（1）珪藻分析

結果を表１、図１に示す。分析した６試料全て珪藻殻は産出したが、100 個体以上産出したのはＢ区西壁の５層のみで、その他からの産出は非常に少なかった。いずれの試料も産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。以下、試料ごとに結果を記す。

・Ｂ区西壁

５層からは 105 個体産出した。保存状態は、壊れた殻が多いため、不良である。本試料の淡水生の群集の特徴について、生態性（珪藻の３つの適応性：水中の塩分・pH・流水に対する適応性）を整理してみた場合、以下のような傾向が認められる。まず、塩分に対する適応性は、貧塩不定性種が優占する。次に、pH に対する適応性は、pH 不定性種が優占する。流水に対する適応性は、

表１．珪藻分析結果

種　　類	生態性			環境指標種	B 区西壁		C 区北壁		D 区西壁	
	塩分	pH	流水		4 層	5 層	17 層	18 層	5 層	6 層
Craticula cuspidata (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	7	-	-	-	-
Craticula spp.	Ogh-ind	al-il	ind		-	3	2	-	-	-
Cymbella aspera (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O,T	-	-	-	-	1	-
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	11	-	-	-	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	2	-	-	-	-
Encyonema silesiacum (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	3	-	2	-	-
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	lph	RB,O,T	-	1	-	-	-	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	4	-	-	-	-
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	3	-	-	-	-
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1	1	1	1	1
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	lph	O	1	-	-	-	-	-
Gomphonema augur Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	U	-	8	-	-	-	-
Gomphonema parvulum (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	6	-	-	-	-
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	lph	T	-	1	-	-	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	3	2	1	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	-	7	-	1	-	-
Luticola mutica (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	-	2	-	-	-	-
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	lph	N.O,U	-	2	-	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	2	2	-	-	-	-
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	1	5	-	1	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	2	4	2	2	2
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	4	17	-	1	-	-
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	lph	N.O,U	-	10	-	1	-	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	5	2	2	-	-
海水生種					0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0	0	0	0
淡水生種					11	105	11	12	4	3
珪藻化石総数					11	105	11	12	4	3

凡例

塩分：塩分濃度に対する適応性　pH: 水素イオン濃度に対する適応性　流水：流水に対する適応性

Euh　：海水生種　al-bi: 真アルカリ性種　i-bi: 真止水性種

Euh-Meh: 海水生種～汽水生種　al-il: 好アルカリ性種　i-ph: 好止水性種

Meh　：汽水生種　ind　: pH 不定性種　ind：流水不定性種

Ogh-Meh: 淡水生種～汽水生種　ac-il: 好酸性種　r-ph: 好流水性種

Ogh-hil: 貧塩好塩性種　ac-bi: 真酸性種　r-bi: 真流水性種

Ogh-ind: 貧塩不定性種　unk　: pH 不明種　unk：流水不明種

Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種

Ogh-unk: 貧塩不明種

環境指標種

A: 外洋指標種　B: 内湾指標種　C1: 海水藻場指標種　C2: 汽水藻場指標種

D1: 海水砂質干潟指標種　D2: 汽水砂質干潟指標種

E1: 海水泥質干潟指標種　E2: 汽水泥質干潟指標種　F: 淡水底生種群 (以上は小杉 ,1988)

G: 淡水浮遊生種群　H: 河口浮遊性種群　J: 上流性河川指標種　K: 中～下流性河川指標種

L: 最下流性河川指標種群　M: 潟沼浮遊性種　N: 潟沼沼沢湿地指標種　O: 沼沢湿地付着生種

P: 高層湿原指標種群　Q: 陸域指標種群 (以上は安藤 ,1990)

S: 好汚染性種　U: 広適応性種　T: 好流水性種 (以上は Asai and Watanabe,1995)

R: 陸生珪藻 (RAA 群、RBB 群、RU: 未区分、伊藤・堀内 ,1991)

流水不定性種が優占する。また、本試料は水生珪藻が優占し、陸生珪藻は低率にしか産出しない。特徴的に産出した種は、淡水生種で流水不定性種の Cymbella tumida、Gomphonema augur、Stauroneis anceps、止水性種の Stauroneis phoenicenteron 等である。

4層からは11個体産出した。保存状態は、壊れた殻が多く一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。産出した種は、淡水生種で流水不定性種の Stauroneis anceps、流水不明性種の Pinnularia spp. 等である。

・C区北壁

18層からは12個体産出した。保存状態は、壊れた殻が多く一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。産出した種は、流水不定性種の Encyonema silesiacum、流水不明性種の Pinnularia spp.、Stauroneis spp. 等である。

17層からは11個体産出した。保存状態は、壊れた殻が多く一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。産出した種は、流水不明性種の Pinnularia spp. 等である。

・D区西壁

6層からは3個体産出した。保存状態は、壊れた殻が多く一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。産出した種は、流水不明性種の Pinnularia spp. 等である。

5層からは4個体産出した。保存状態は、壊れた殻が多く一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。産出した種は、流水不明性種の Pinnularia spp. 等である。

（2）花粉分析

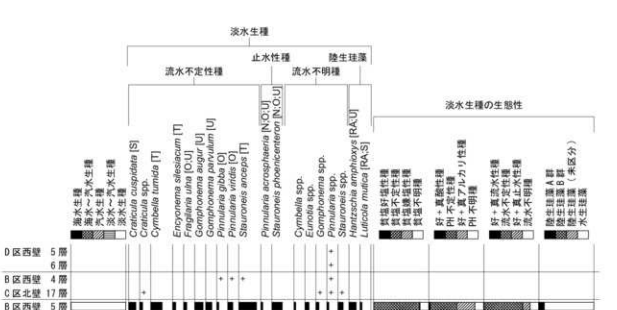
結果を表2、図2に示す。B区西壁のいずれの試料からも花粉化石が産出するが、産状は5層の保存状態はやや良い～普通程度であるのに対し、4層の保存状態がやや悪い。

5層では、木本花粉の占める割合が高く、マツ属の優占で特徴づけられる。その他ではモミ属、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、クリ属、カキノキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、ナデシコ科、ヨモギ属などを伴う。また、ミズアオイ属、ハス属、ヒシ属、アカウキクサ属などの水湿地生植物や、栽培種のソバ属、ベニバナ属なども確認された。

4層では、木本花粉はマツ属とコナラ属アカガシ亜属が多く産出し、ツガ属、スギ属、クマシデ属―アサダ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属など を伴う。草本花粉ではイネ科、アカザ科、ベニバナ属が多く産出し、カヤツリグサ科、ヨモギ属などを伴う。

（3）種実遺体分析

結果を表3、図3に示す。B区谷240からは、裸子植物3分類群（針葉樹のアカマツ、ツガ、ヒノキ）24個の葉・枝条、被子植物49分類群（広葉樹のオニグルミ、コナラ、コナラ属、クリ、クワ属、ヒサカキ属、ウメ、モモ、キイチゴ属、イヌザンショウ、ブドウ属（エビヅル？）、カキノキ属、草本のホッスモ、ミズアオイ近似種、コナギ近似種、イボクサ、ヒエ近似種、イヌビエ属、スズメノヒエ属、メヒシバ類、エノコログサ属（アワ？）、エノコログサ属、イネ、イネ科（シバ



海水～汽水～淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

環境指標種
A: 外洋指標種 B: 内湾指標種 C1: 海洋藻場指標種 C2: 汽水藻場指標種 D1: 海水砂質干潟指標種 D2: 汽水砂質干潟指標種 E1: 海水泥質干潟指標種
E2: 汽水泥質干潟指標種 F: 淡水湖生種群（以上は小杉, 1988） G: 淡水浮遊生種群 H: 河口浮遊性種群 J: 上流性河川指標種 K: 中～下流性河川指標種
L: 最下流性河川指標種群 M: 湖沼浮遊性種 N: 湖沼沼沢湿地指標種 O: 沼沢湿地付着生種 P: 高層湿原指標種群 Q: 陸域指標種群（以上は安藤, 1990）
S: 好汚濁性種 T: 好清水性種 U: 広適応性種（以上はAsai & Watanabe, 1995） R1: 陸生珪藻（RA: A群, R8: B群 -伊藤・堀内, 1991）

図１　主要珪藻化石群集の層位分布

類？）、イネ科、ハリイ属（ヌマテンツキ類）、テンツキ近似種、ホタルイ近似種、イヌホタルイ近似種、ホタルイ属、カヤツリグサ属Ａ、カヤツリグサ属Ｂ、カヤツリグサ科、ミゾソバ、サナエタデ近似種、イヌタデ近似種、ヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、ミドリハコベ近似種、ウシハコベ近似種、ナデシコ科、ヒユ属、タガラシ、コウホネ属、アブラナ科、カタバミ属、エノキグサ、スミレ属、マクワ・シロウリ型、メロン類、チドメグサ属、イヌコウジュ属、トウバナ属、ナス、タカサブロウ、キク科）407 個の種実の、合計 431 個の大型植物遺体が同定された。その他、木材（木製品含む）、炭化材、植物片、昆虫類、骨片、砂礫類、土器片が確認された。

大型植物遺体の出土個数は、試料 100 ＣＣ（169g）より、木本５分類群 26 個、草本 33 分類群 329 個の、計 355 個が検出され、圧倒的な草本主体の組成を示す。さらに試料 500 ccや取上種実試料を追加し、主に木本や栽培種の情報を補っている。

栽培種は、ウメ、モモ、イネ、マクワ・シロウリ型を含むメロン類、ナスの他、栽培の可能性があるカキノキ属（カキノキやマメガキの可能性）、ヒエ近似種を含むイヌビエ属、エノコログサ属（アワ？）が確認され、イネ籾の多産に特徴づけられる。また、イネの一部とヒエ近似種、エノコログサ属（アワ？）は炭化しており、籾が付着する状態も確認された。その他、やや多くの葉や枝が確認されたツガは、近傍の植栽樹に由来する可能性が高い。

その他の分類群は、木本は、常緑針葉樹で高木のアカマツ、ヒノキ、落葉広葉樹で高木のオニグルミ、コナラ（属）、クリ、クワ属、低木のキイチゴ属、イヌザンショウ、籐本のブドウ属（エビヅル？）、常緑広葉樹で小高木～低木のヒサカキ属が確認された。オニグルミ核には頂部欠損や

基部欠損がみられ、打撃痕の可能性がある。

草本は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群から成り、沈水植物のホッスモ、抽水植物のミズアオイ近似種、コナギ近似種、イボクサ、ホタルイ近似種、イヌホタルイ近似種、ホタルイ属、コウホネ属、湿生植物のハリイ属（ヌマテンツキ類）、テンツキ近似種、ミゾソバ、ヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、タガラシ、トウバナ属、タカサブロウ、湿った場所にも乾いた場所にも生育が可能な分類群を含む中生植物のスズメノヒエ属、メヒシバ類、エノコログサ属、イネ、イネ科（シバ類？）、イネ科、カヤツリグサ属A、カヤツリグサ属B、カヤツリグサ科、サナエタデ近似種、イヌタデ近似種、ミドリハコベ近似種、ウシハコベ近似種、ナデシコ科、ヒユ属、アブラナ科、カタバミ属、エノキグサ、スミレ属、チドメグサ属、イヌコウジュ属、キク科が確認された。メヒシバ類やヒユ属,ナデシコ科、カヤツリグサ属A、イボクサなどがやや多産する。また、メヒシバ類、イネ科、サナエタデ近似種、ヤナギタデ近似種の一部は炭化している。

4．考察

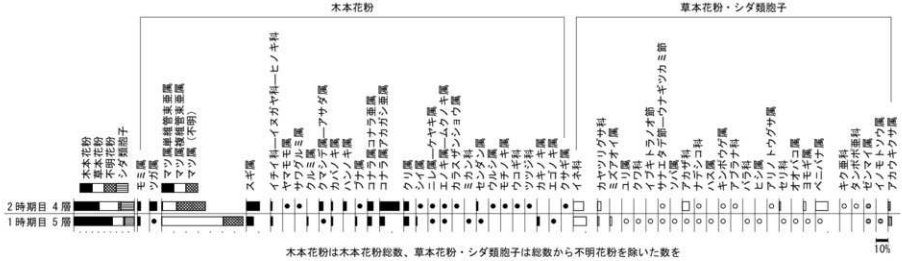
（1）平安時代後期以前の古植生・植物利用

1時期目池跡に切られるB区谷240の大型植物遺体群は、木本15分類群、草本44分類群から成り、栽培種を含む圧倒的な草本主体の組成を示した。調査地点近傍にはまとまった林分は存在せず、明るく開けた水湿地環境であったと推測される。

栽培種と栽培の可能性を含む分類群は、果樹のウメ、モモ、カキノキ属、穀類のイネ、ヒエ近似種を含むイヌビエ属、エノコログサ属（アワ？）、果菜類のマクワ・シロウリ型を含むメロン類、ナスが確認され、イネ籾の多産に特徴づけられる。これらは近辺で栽培されたか持ち込まれたかは不明であるが、植物質食料として利用されたと考え

表2　花粉分析結果

種　類	B区西堤 4層	B区西堤 5層
木本花粉		
モミ属	4	7
ツガ属	9	2
マツ属単維管束亜属	1	-
マツ属複維管束亜属	17	145
マツ属（不明）	35	47
スギ属	16	17
イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科	2	5
ヤマモモ属	1	-
サワグルミ属	1	-
クルミ属	-	3
クマシデ属―アサダ属	5	2
カバノキ属	2	4
ハンノキ属	4	-
ブナ属	1	4
コナラ属コナラ亜属	7	10
コナラ属アカガシ亜属	24	12
クリ属	6	12
シイ属	1	3
ニレ属―ケヤキ属	1	2
エノキ属―ムクノキ属	1	1
カラスザンショウ属	1	-
ミカン科	-	1
センダン属	2	1
ウルシ属	1	-
モチノキ属	1	-
ウコギ科	1	-
ツツジ科	1	-
カキノキ属	-	6
エゴノキ属	-	1
クサギ属	1	-
草本花粉		
イネ科	29	48
カヤツリグサ科	10	6
ミズアオイ属	-	8
ユリ属	-	1
クワ科	-	1
イブキトラノオ節	-	1
サナエタデ節―ウナギツカミ節	1	2
ソバ属	-	1
アサガオ科	20	2
ナデシコ科	1	4
ハス属	-	1
キンポウゲ属	1	1
アブラナ科	2	-
バラ科	-	1
ヒシ属	-	2
アリノトウグサ属	1	-
セリ科	4	1
オオバコ属	-	1
ヨモギ属	7	3
ベニバナ属	35	1
キク亜科	1	-
タンポポ亜科	1	-
不明花粉		
不明花粉	14	9
シダ類胞子		
ゼンマイ属	1	1
イノモトソウ属	-	1
アカウキクサ属	6	13
他のシダ類胞子	71	56
合　計		
木本花粉	146	285
草本花粉	113	85
不明花粉	14	9
シダ類胞子	78	71
合計（不明を除く）	337	441



木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。丸印は1%未満を示す。

図2.　B区西壁における花粉化石群集の層位分布

表3　種実遺体分析結果（1）

分類群	部位	状態		B区 SI240			備考
木本							
アカマツ	葉	破片		-	2	-	
ツガ	葉	完形		-	+	-	
	葉（基部）	破片		8	++	-	
	葉（頂部）	破片		7	++	-	
	葉	破片		4	+++	-	
	枝	破片		2	+	-	
ヒノキ	枝条・葉	完形		1	-	-	
オニグルミ	核	破片		-	-	2	頂部欠損，基部欠損，打撃痕の可能性
コナラ	殻斗	破片		-	1	-	
コナラ属	果実	破片		-	1	-	
クリ	果実（基部）	完形		-	-	1	
	果実	破片		-	-	1	
クワ属	核	完形		-	4	-	
		破片		2	1	-	
ヒサカキ属	種子	完形		-	2	-	
ウメ	核	完形		-	-	1	頂部僅かに欠損，残存長 19.38，幅 15.76，厚さ 11.07mm
モモ	核	完形		1	1	2	長さ 27.23，幅 20.89，厚さ 15.82mm(500cc)
キイチゴ属	核	完形		-	1	-	
		破片		1	-	-	
イヌザンショウ	種子	完形		-	1	-	
ブドウ属（エビヅル？）	種子	完形		-	2	-	
カキノキ属	種子	完形		-	1	4	長さ 1325，幅 852，厚さ 330mm(500cc)
		破片		-	-	2	
草本							
ホッスモ	種子	完形		1	+	-	
		破片		1	-	-	
ミズアオイ近似種	種子	完形		10	-	-	
コナギ近似種	種子	完形		2	-	-	
イボクサ	種子	完形		16	++	-	
		破片		1	-	-	
ヒエ近似種	果実	完形	炭化	1	-	-	
イヌビエ属	果実	完形		-	4	-	
スズメノヒエ属	果実	完形		-	1	-	
メヒシバ類	果実	完形	炭化	1	-	-	
		完形		16	-	-	
		破片		7	-	-	
エノコログサ属（アワ？）	果実	完形	炭化	1	-	-	
		完形		5	-	-	
エノコログサ属	果実	完形		-	2	-	
		破片		4	-	-	
イネ	籾（基部）	破片	炭化	4	++	-	
		破片		24	++	-	
	籾（頂部）	破片	炭化	1	++	-	
	籾	破片	炭化	3	++	-	
	籾	破片		103	+++	-	
	籾・玄米	完形	炭化	-	1	-	
	玄米	完形	炭化	-	2	-	
		破片	炭化	2	-	-	
イネ科（シバ類？）	果実	完形		4	+	-	
イネ科	果実	完形	炭化	1	-	-	
	果実	完形		1	+	-	
ハリイ属（ヌマテンツキ類）	果実	完形		1	-	-	
テンツキ近似種	果実	完形		1	-	-	
ホタルイ近似種	果実	完形		-	5	-	
イヌホタルイ近似種	果実	完形		-	1	-	
ホタルイ属	果実	完形		1	3	-	
		破片		4	-	-	
カヤツリグサ属A	果実	完形		18	-	-	
カヤツリグサ属B	果実	完形		-	1	-	
カヤツリグサ科	果実	完形		3	-	-	倒卵状2面体
		破片		2	-	-	
ミゾソバ	果実	完形		-	5	-	
		破片		-	1	-	
サナエタデ近似種	果実	完形	炭化	-	1	-	
		完形		2	+	-	
		破片		1	-	-	

表3　種実遺体分析結果（2）

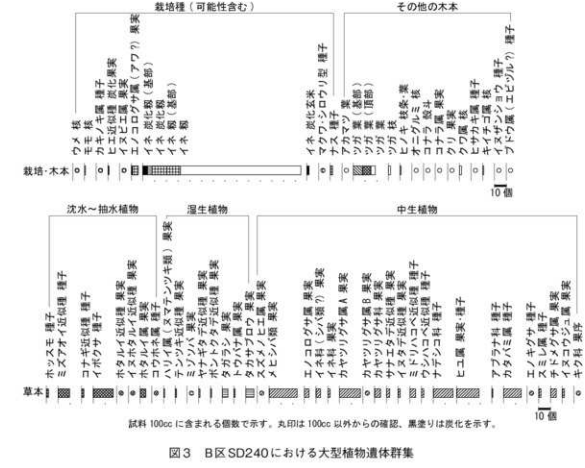
				B区			
分類群	部位	状態			SD240		備考
イヌタデ近似種	果実	完形		-	5	-	
		破片		2	-	-	100cc：1個食痕
ヤナギタデ近似種	果実	完形	炭化	-	1	-	
		完形		-	2	-	
		破片		1	-	-	
ボントクタデ近似種	果実	破片		1	-	-	
ミドリハコベ近似種	種子	完形		2	+	-	
		破片		3	+	-	
ウシハコベ近似種	種子	完形		2	+	-	
ナデシコ科	種子	完形		17	++	-	小型
ヒユ属	果実・種子	完形		-	2	-	
	種子	完形		12	++	-	
		破片		7	-	-	
タガラシ	果実	完形		3	+	-	
		破片		2	-	-	
コウホネ属	種子	完形		-	2	-	
アブラナ科	種子	完形		1	+	-	
カタバミ属	種子	完形		8	-	-	
		破片		7	-	-	
エノキグサ	種子	完形		-	1	-	
スミレ属	種子	破片		2	-	-	
マクワ・シロウリ型	種子	完形		-	3	-	
メロン類	種子	破片		-	1	-	
ヤドメグサ属	果実	完形		3	+	-	
		破片		2	-	-	
イヌコウジュ属	果実	完形		1	-	-	
		破片		1	-	-	
トウバナ属	果実	完形		1	-	-	
ナス	種子	完形		-	2	-	
		破片		2	-	-	
タカサブロウ	果実	完形		6	+	-	
		破片		1	-	-	
キク科	果序	破片		-	-	1	頭状果序、未熟果
合計							
木本				26	17	13	
草本				329	45	1	
合計				355	62	14	
その他							
木材				++	++	-	木製品含む
炭化材				+	++	-	
植物片				++	+++	-	
昆虫類				+	+	-	
骨片				+	+	+	椎骨含む
鉱種類				++	+++	-	
土器片				6	+	+++	大きな径は取り上げ済
分析量				100	500	取上容積 (cc)	
				169	871	種実重 (g)	湿重 (g)

1) 試料 100cc は全分類群，500cc は主に 1mm 以上の新たな分類群・状態良好な分類群を抽出対象とする。
2) 「+」：少量，「++」：中量，「+++」：多量。

られる。また、イネの一部とヒエ近似種、エノコログサ属（アワ？）は炭化しており、籾の付着も確認されることから、脱稃（だっぷ：籾殻を取り去る）前の段階で火を受けたとみなされる。これらは、谷が埋積する際に周囲から流入した、あるいは人為的に廃棄された可能性がある。

また、やや多くの葉や枝が出土した常緑針葉樹のツガは、丘陵～山地の尾根や痩せ地に生育し、モミと混交することが多い。ツガは東山山地や扇状地面に分布していたと考えられるが、今回モミを伴わない出土状況を考慮すると、極近傍の植栽樹に由来する可能性が高い。京都市内におけるツガの出土例は少なく、平安京左京三条二坊十町跡（中京区押油小路町 238-1）の 11 C後半～末とされる３区溝 255 よりツガ属の葉が２個（竜子 ,2008）、平安京右京三条三坊三町（中京区西ノ京桑原町１番地）の平安時代前期の井戸 10 よりツガの葉が３個（財団法人京都市埋蔵文化財研究所編 ,2009）確認されている。

その他の分類群は、木本類は、常緑針葉樹のアカマツ、ヒノキ、落葉広葉樹のオニグルミ、コ



試料 100cc に含まれる個数で示す。丸印は 100cc 以外からの確認。黒塗りは炭化を示す。

図3　B区SD240における大型植物遺体群集

ナラ（属）、クリ、クワ属、キイチゴ属、イヌザンショウ、ブドウ属（エビヅル？）、常緑広葉樹のヒサカキ属が確認され、陽樹を主体とする。植栽の可能性を含めて、近辺に生育していたと考えられる。

草本類は、沈水植物のホッスモ、抽水植物のミズアオイ近似種、コナギ近似種、イボクサ、ホタルイ近似種、イヌホタルイ近似種、ホタルイ属、コウホネ属、湿生植物のハリイ属（ヌマテンツキ類）、テンツキ近似種、ミゾソバ、ヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、タガラシ、トウバナ属、タカサブロウ、中生植物のスズメノヒエ属、メヒシバ類、エノコログサ属、イネ、イネ科（シバ類？）、イネ科、カヤツリグサ属A、カヤツリグサ属B、カヤツリグサ科、サナエタデ近似種、イヌタデ近似種、ミドリハコベ近似種、ウシハコベ近似種、ナデシコ科、ヒユ属、アブラナ科、カタバミ属、エノキグサ、スミレ属、チドメグサ属、イヌコウジュ属、キク科が確認された。周辺域の明るく開けた水湿地環境に生育していたと考えられる。

植物利用についてみると、堅果類のオニグルミ、クリは子葉が食用可能である。クワ属、キイチゴ属、ブドウ属（エビヅル？）は、果実が食用可能である。このうち、オニグルミの出土核は頂部や基部が欠損していることから、人が食用のために叩き割った打撃痕の可能性がある。この他、メヒシバ類、イネ科、サナエタデ近似種、ヤナギタデ近似種の一部は炭化していることから火を受けたとみなされるが、これらの草本種実がどのような環境下で被熱したのかは不明である。

（2）園池を構成する池跡の堆積環境

前述の谷状遺構を切って構築されている、平安時代末期の園池を構成する池跡の堆積物についてまとめる。発掘調査によると園池には1時期目（古い時期）と2時期目（新しい時期）の2時期があることがわかっており、1時期目に相当するのは、B区西壁の5層とC区北壁の18層とされ、いずれも池最下部の堆積物と考えられている。珪藻分析結果をみると、B区西壁の5層から珪藻化石が多く検出されており、特徴的に産出した種は、淡水生種で流水不定性種のCymbella tumida、Gomphonema augur、Stauroneis anceps、止水性種のStauroneis phoenicenteronなどである。C区北壁18層からは流水不定性種のEncyonema silesiacum、流水不明性種のPinnularia spp.、Stauroneis spp.などが少ないながらも産出する。産出した種の生態性について述べると、まず、流水不定性種のCymbella tumidaは、一般に貧塩不定、好アルカリ性種、流水不定の広域頒布種であるが沼沢湿地に普遍的に認められる。また、Asai and Watanebe（1995）によると好清水性種とされる。同じく、流水不定性種のEncyonema silesiacumは、沼沢地から湿地等の水域に広く生育する種である。流水不定性種のGomphonema augurは、塩分・pH・流水に対しては不定であり、比較的、適応能力が高いことから、広範に認められるが、通常は沼沢湿地に多産する傾向にある種である。流水不定性種のStauroneis ancepsは、Patrick and Reimer（1966）によると富栄養を好み、pHは不定としている。次に、止水性種のStauroneis phoenicenteronは、比較的、広範に止水域に認められる種である。本種も湿地や池沼・湖沼の縁辺等の止水域に生育する種である。流水不明性種のPinnularia spp.、Stauroneis spp.は、いずれも数種類で構成されるが、湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。

以上の産出種の生態性および群集の特徴から、1時期目の池最下部の堆積物とされるB区西壁の5層堆積時は湿地～沼沢湿地環境であったと推定される。沼沢湿地とは、安藤（1990）により定義された用語であるが、それによれば「水深が1m内外で、一面に植物が繁殖しているところ、および湿地である」とされる。したがって、池跡の堆積物とされる所見を支持する結果と言える。また、C区北壁の18層は珪藻化石の産出が少ないが、基本的にはB区西壁の5層で検出される種類で構成される。経験的には、堆積後に好気的環境下で大気に曝されると、珪藻殻は短期間に分解消失することがわかっている。同時期の堆積物で産状が異なることを考慮すると、B区西壁の5層に比べてC区北壁の18層の方が乾燥しやすい状況（例えばB区西壁の5層が池の中心に近く、C区北壁の18層が池の縁に近いなど）にあった可能性が指摘される。

次に、2時期目に相当するのは、B区西壁の4層、C区北壁の17層である。いずれも珪藻化石の産出状況は悪く、淡水生種で流水不定性種のStauroneis anceps、流水不明性種のPinnularia spp.などが産出する程度である。前述のように、どちらも湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。これらの試料から産出した珪藻化石は非常に少なかったことから、B区西壁の4層、C区北壁の17層の堆積時に取り込まれたほとんどの珪藻化石は、堆積過程において好気的な環境下で分解・消失した可能性が高い。

一方、D区西壁の池の堆積物の可能性が考えられている6層と、池の堆積物である確証が得ら

れていない5層は珪藻化石の産出が少なく、流水不明性種の Pinnularia spp. などが確認された程度である。珪藻化石の産状だけでみると、B区、C区の2時期目に近いが、C区北壁の18層のように1時期目でも地点により乾燥しやすい状況であった可能性があり、D区西壁が池の縁に近い可能性が考えられている発掘調査所見とも調和的である。ただし、検出された珪藻化石が非常に少ないことから、池の堆積物か否かの明確な判断は困難である。

（3）平安時代末期の古植生・植物利用

平安時代末期の園池を構成する池跡と考えられているB区西壁5層、4層の花粉化石群集についてみると、珪藻分析から水深が1m内外と想定された1時期目（5層）では、抽水植物のミズアオイ属、ハス属、浮葉植物のヒシ属、浮漂植物のアカウキクサ属などが確認された。このうち、ミズアオイ属やハス属は水深1m程度まで、ヒシ属は水深1～2m程度の場所に生育することから、これらが園池を構成する池内に生育していたと考えられ、珪藻分析の結果とも調和的である。1時期目池跡に切られるB区谷240においても、ミズアオイ属のミズアオイ近似種とコナギ近似種の種子が確認されている。なお、ミズアオイ属やハス属は、鑑賞用や食用等を目的として、池内に植栽されていた可能性もある。

その他の草本類ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、ナデシコ科、ヨモギ属などを伴う。これらはいずれも開けた明るい場所に生育する「人里植物」を多く含む分類群であることから、池周囲の草地などに由来すると思われる。

一方、木本類では圧倒的なマツ属の優占で特徴づけられる。亜属まで同定できたものは全てマツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、また極端な陽樹でもあることから、他の広葉樹の生育に不適な立地や二次林などとして生育する。さらに、樹形の美しさから庭園に植栽されたり、防風林などとして活用されることもしばしばある。平安京の庭園でも植栽されていたことが、文献等の調査により明らかにされている（飛田 2002）ことから、今回検出されたマツ属も二次林や植栽に由来する可能性がある。B区谷240においても、アカマツの葉が確認されている。

その他ではモミ属、スギ属などの針葉樹、コナラ属コナラ亜属、クリ属などの落葉広葉樹、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの常緑広葉樹が確認された。アカガシ亜属などは暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素であり、スギ属は扇状地扇端の湧水部や沢沿いなどに生育する。よって、東山山地や神楽岡丘陵、白川扇状地などにアカガシ亜属などの常緑広葉樹やモミ属などの針葉樹が分布し、部分的にコナラ亜属やクリ属などの落葉広葉樹も生育していたと思われる。また、湧水部や沢沿い、河川沿いなどにはスギ属やコナラ亜属、ニレ属―ケヤキ属、エノキ属―ムクノキ属なども生育していたと推測される。

栽培種および栽培の可能性がある分類群は、木本類のカキノキ属、草本類のソバ属、ベニバナ属などが挙げられ、利用が示唆される。果樹のカキノキ属は植栽樹に由来する可能性が高く、B区谷240でも種子が確認されている。

2時期目（4層）になると、花粉化石の保存状態、産出状況ともやや悪くなる。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失することが知られている（中村,1967; 徳永・山内,1971; 三宅・中越,1998など）。珪藻分析の結果からも、2時期目の池跡は好気的環境に曝された可能性が指摘されることから、珪藻化石同様分解の影響を受け、分解に強い種類が選択的に多く残されている可能性がある。なお、分解の影響を考慮しても、本本類ではマツ属とアカガシ亜属が多く産出し、ツガ属、スギ属などの針葉樹、クマシデ属―アサダ属、コナラ亜属、クリ属などの広葉樹が認められる。これらは山地部や丘陵部、扇状地上、河川沿いなど、周辺の広範囲の植生を反映していると考えられ、周辺の森林植生は1時期目と同様であったと言える。

草本類では栽培種のベニバナ属がやや多産する。ただし、ベニバナ属の花粉は膜が厚く、分解に対する抵抗性も強いことから、相対的に多く残存したと推測され、周辺で栽培が増加したなどの可能性は低いと思われる。ベニバナ（属）は布の染料や口紅、漢方薬等の生活用品に由来する可能性もある。その他、イネ科、アカザ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの人里植物を多く含む分類群が確認され、周辺の草地に生育していたと推測される。

引用文献

安藤一男,1990. 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理,42,73-88.

Asai, K. and Watanabe, T.,1995.Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35 - 47.

Desikachiary, T. V., 1987. Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation,1-13, Plates,401-621.

藤木利之・小澤智生,2007. 琉球列島産植物花粉図鑑. アクアコーラル企画,155p.

藤下典之,1984. 出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法. 古文化財の自然科学的研究. 古文化財編集委員会編. 同朋舎,638-654.

飛田範夫,2002. 日本庭園の植栽史. 京都大学学術出版会,435p.

Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz. 7, Leipzig. Part 1, 920p.

Hustedt, F., 1937-1938, Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ～Ⅲ. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.

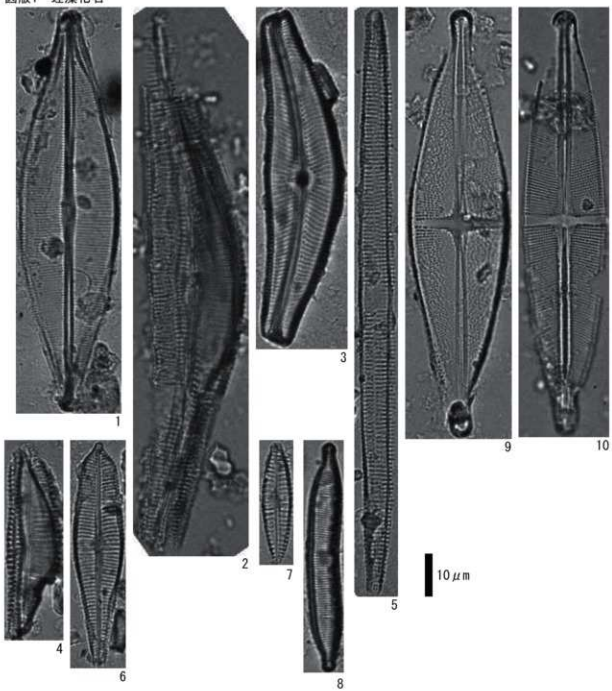
Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz. 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz. 7, Leipzig, Part 3, 816p.

石川茂雄,1994. 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

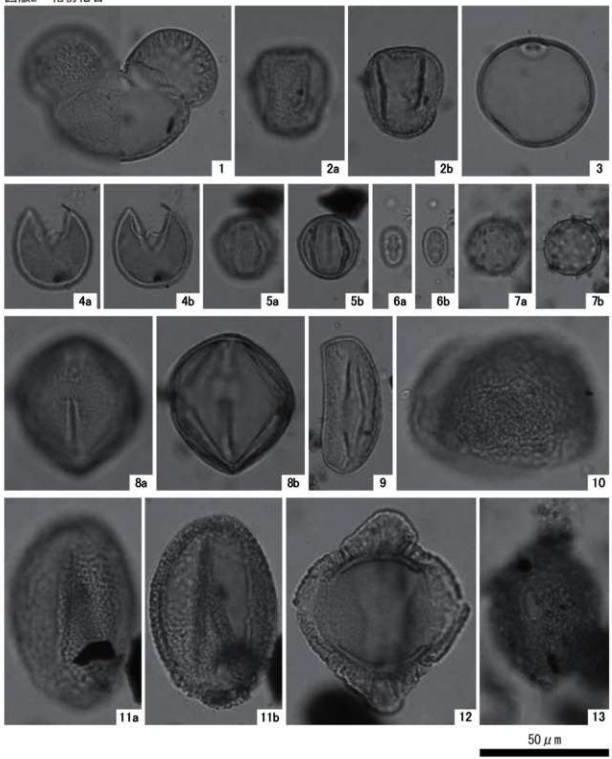
伊藤良永・堀内誠示 ,1991. 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用 . 日本珪藻学誌 ,6,23-44.
角野康郎 ,1994. 日本水草図鑑 . 文一総合出版 ,178p.
小杉正人 ,1988. 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用 . 第四紀研究 ,27,1-20.
Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1985. Naviculaceae. Bibliothyca Diatomologica, vol. 9,p.250.
Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1986. Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2（1）: 876p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1988. Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（2）: 596p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1990. Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（3）: 576p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1991a. Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（4）: 437p.
Lange-Bertalot, H., Witowski, A., Metzeltin, D.,2000.ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA Annotated diatom micrographs. Diatom Flora of Marine Coasts ,1,925p.
三宅　尚・中越信和 ,1998. 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態 . 植生史研究 ,6,15-30.
三好教夫・藤木利之・木村裕子 ,2011. 日本産花粉図鑑 . 北海道大学出版会 ,824p.
中村　純 ,1967. 花粉分析 . 古今書院 ,232p.
中村　純 ,1980. 日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ（図版）. 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第 12,13 集 ,91p.
中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2010. 日本植物種子図鑑（2010 年改訂版）. 東北大学出版会 ,678p.
Patrick, R. and Reimer, C. W., 1966. The diatoms of the United States exclusive of Alaska and Hawaii. Vol. 1, 688p. Monographs of Acad. Nat. Sci. Philadelphia 13.
竜子正彦 ,2008. 出土した種実等分析 . 財団法人京都市埋蔵文化財研究所編 , 平安京左京三条二坊十町（堀河院）跡 , 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-17,p.173 － 181.
島倉巳三郎 ,1973. 日本植物の花粉形態 . 大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第 5 集 ,60p.
鈴木庸夫・高橋　冬・安延尚文 ,2012. ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632 種－. 誠文堂新光社 ,272p.
徳永重元・山内輝子 ,1971. 花粉・胞子 . 化石の研究法 , 共立出版株式会社 ,50-73.
椿坂恭代 ,1993. アワ・ヒエ・キビの同定 . 吉崎昌一先生還暦記念論集「先史学と関連科学」,261-281.
谷城勝弘 ,2007. カヤツリグサ科入門図鑑 . 全国農村教育協会 ,247p.
財団法人京都市埋蔵文化財研究所編 ,2009. 平安京右京三条三坊三町跡 . 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-4,66p., 図版 10p.

図版1　珪藻化石



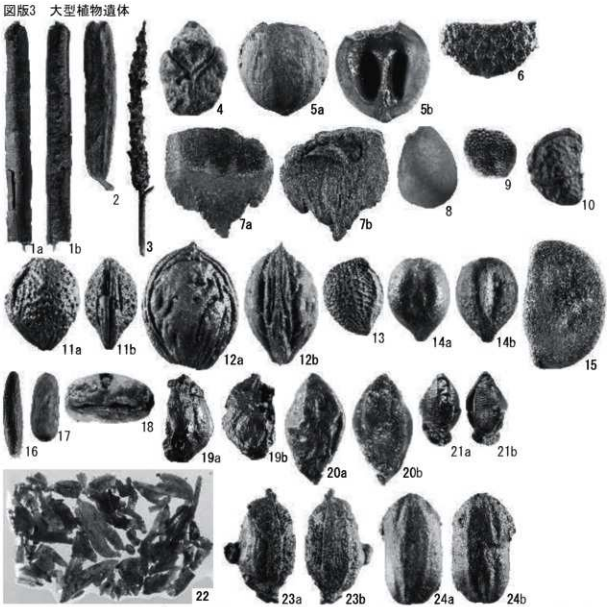
1. *Craticula cuspidata* (Kuetz.) D.G.Mann (B区西壁;5層)
2. *Cymbella aspera* (Ehr.) Cleve (D区西壁;5層)
3. *Cymbella tumida* (Breb. ex Kuetz.) Van Heurck (B区西壁;5層)
4. *Encyonema silesiacum* (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann (B区西壁;5層)
5. *Fragilaria ulna* (Nitzsch) Lange-Bertalot (B区西壁;5層)
6. *Gomphonema augur* Ehrenberg (B区西壁;5層)
7. *Gomphonema parvulum* (Kuetz.) Kuetzing (B区西壁;5層)
8. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (B区西壁;5層)
9. *Stauroneis anceps* Ehrenberg (B区西壁;5層)
10. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (B区西壁;5層)

図版2　花粉化石



1. マツ属(B区西壁:5層)
2. コナラ属コナラ亜属(B区西壁:5層)
3. イネ科(B区西壁:5層)
4. スギ属(B区西壁:5層)
5. コナラ属アカガシ亜属(B区西壁:5層)
6. クリ属(B区西壁:5層)
7. アカザ科(B区西壁:4層)
8. カキノキ属(B区西壁:5層)
9. ミズアオイ属(B区西壁:5層)
10. ハス属(B区西壁:5層)
11. ソバ属(B区西壁:5層)
12. ヒシ属(B区西壁:5層)
13. ベニバナ属(B区西壁:4層)

図版3　大型植物遺体



(5, 11, 12)　(3, 7, 15, 22, 30, 32)　(2, 6, 13, 14, 23, 29)　(1, 18, 20, 24-26, 31)　(4, 8-10, 16, 17, 19, 21, 27, 28)

1. アカマツ 葉 (B区 : SD240)
2. ツガ 葉 (B区 : SD240)
3. ツガ 枝 (B区 : SD240)
4. ヒノキ 枝条・葉 (B区 : SD240)
5. オニグルミ 核 (頂部欠損) (B区 : SD240)
6. コナラ 殻斗 (B区 : SD240)
7. クリ 果実 (B区 : SD240)
8. クワ属 核 (B区 : SD240)
9. ヒサカキ属 種子 (B区 : SD240)
10. キイチゴ属 核 (B区 : SD240)
11. ウメ 核 (B区 : SD240)
12. モモ 核 (B区 : SD240)
13. イヌザンショウ 種子 (B区 : SD240)
14. ブドウ属 (エビヅル?) 種子 (B区 : SD240)
15. カキノキ属 種子 (B区 : SD240)
16. ホップモ 種子 (B区 : SD240)
17. ミズアオイ近似種 種子 (B区 : SD240)
18. イボクサ 種子 (B区 : SD240)
19. ヒエ近似種 果実 (B区 : SD240)
20. イヌビエ属 果実 (B区 : SD240)
21. エノコログサ属 (アワ?) 果実 (B区 : SD240)
22. イネ 籾 (B区 : SD240)
23. イネ 籾・玄米 (B区 : SD240)
24. イネ 玄米 (B区 : SD240)
25. ホタルイ近似種 果実 (B区 : SD240)
26. ミゾソバ 果実 (B区 : SD240)
27. ナデシコ科 種子 (B区 : SD240)
28. ヒユ属 果実・種子 (B区 : SD240)
29. コウホネ属 種子 (B区 : SD240)
30. マクワ・シロウリ型 種子 (B区 : SD240)
31. ナス 種子 (B区 : SD240)
32. キク科 果序 (B区 : SD240)

附章２　白河街区の園地使用岩石種について

今回の調査で検出した池 238 では、大型の景石や景石根石と推定される石などが汀周辺に設置されていた。それらの石について若干の考察をおこなう。

庭園の石質には、その庭園の立地する地質環境や運搬の難易にかかわる地理環境が強く反映し、さらには作庭当時の社会状況や施主の好みなども複雑に介入するものであり、庭石の石質を知ることにより各時代、各地域における庭園文化圏の理解への有用な情報のひとつになる。

現地調査では調査期間などの制約から、池内の大型景石、集石を構成する石、その他約 20 ㎝以上からの大きな石に限って対象としたので、小さな石など池のすべての石を網羅するものではない。岩石種の鑑定は、対象となる石に番号を付し、現地での目視と岩石破片サンプルを採取して後日目視鑑定を行った。鑑定は、公益財団法人　益富地学会館の石橋隆氏、藤原卓氏のご教授を受けた。

鑑定した岩石は計 35 石である。主な岩石種は、堆積岩ではチャート・砂岩・泥岩、火成岩では花崗岩、変成岩ではホルンフェルスである。個別の岩石種を次頁からの表に、池内の分布を図に示した。最も多いのはホルンフェルスで 13 石、次いで花崗岩８石、チャート７石、砂岩５石、泥岩１石、不明１石である。ホルンフェルスの割合が高いことが認められる。

ホルンフェルスとは、比叡山と大文字山を構成する岩石の地層が、その間に上ってきたマグマによって熱変成を受けた岩石のことである。マグマはその後ゆっくり冷えて花崗岩となった。

京都の古庭園に使用された庭石の石質を調査・集成した尼崎博正氏によると、平安時代初期～中期の庭園で使用された庭石はチャート・砂岩・頁岩（泥岩の一種）がほとんどを占め、花崗岩とホルンフェルスが使用され始めるのは平安時代末期からであると論じている[1]。同じく平安時代末期に構築された池 238 の岩石種も、チャート・砂岩・泥岩も使われているが、ホルンフェルス・花崗岩が特に目立って多く使われている。

今回の鑑定は、庭園の池の部分的な範囲で行ったものであり、その結果が当庭園全体の傾向を示すものとは必ずしもいえないし、当地が東山と地理的に近いことも勘案する必要があるが、平安時代末期という作庭時期に対応した石種選びが反映された結果を得られたと考える。

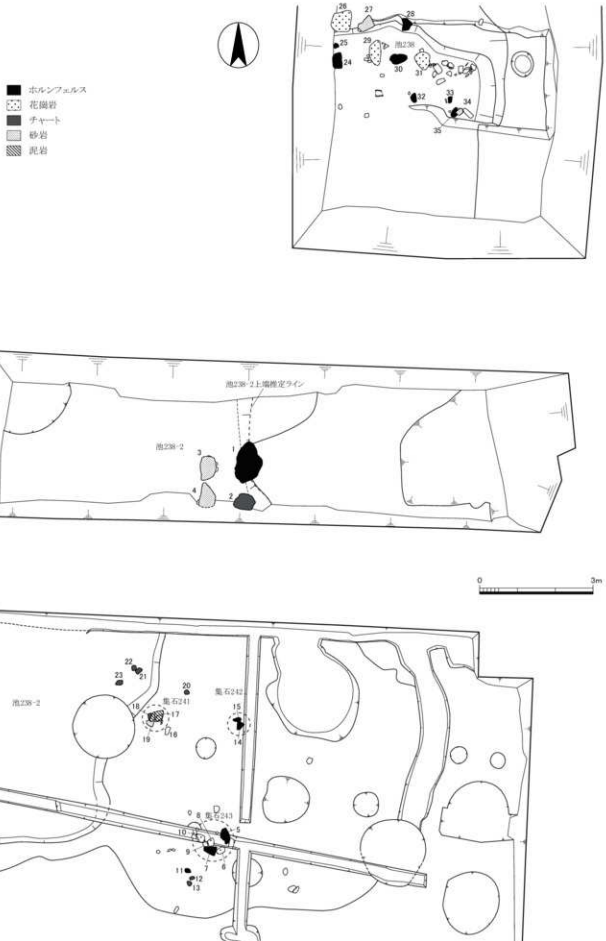
池 238 のほとんどの岩石は調査地近郊で入手できるものであったが、例外として大型景石４石の内で最も大型の「石１」が挙げられる。石１は表面全体に細かい凹凸のある特徴的な外形を示す緑色岩石である。この岩石について、サンプル薄片の偏光顕微鏡による観察とＸ線粉末回析測定を行ったところ、「緑色岩ホルンフェルス」との結果が得られた。この岩石は京都市周辺では花崗岩～石英閃緑岩類の岩体が分布する高野川水系の丹波帯において産出した可能性が考えられ、当地まで運ばれたものと考えられる。

注１

尼崎博正　『庭石と水の由来―日本庭園の石質と水系』　昭和堂　2002 年

池238使用岩石種表

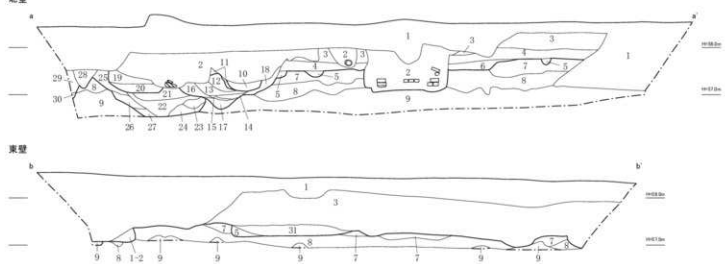
No.	地区	遺構	石種	備考
1	C	大型景石群	緑色岩ホルンフェルス	高野川水系丹波帯産か
2	C	大型景石群	チャート	
3	C	大型景石群	砂岩	
4	C	大型景石群	砂岩	
5	B	集石243	ホルンフェルス	泥岩が熱変成を受けたもの
6	B	集石243	アプライト	花崗岩中の硬質部
7	B	集石243	ホルンフェルス	泥岩が熱変成を受けたもの
8	B	集石243	花崗岩と流紋岩の中間の脈岩	
9	B	集石243	花崗岩	
10	B	集石243	花崗岩	
11	B		ホルンフェルス	断面に桜石が確認できる
12	B		アプライト	花崗岩中の硬質部
13	B		チャート	
14	B	集石242	ホルンフェルス	泥岩が熱変成を受けたもの
15	B	集石242	ホルンフェルス	泥岩が熱変成を受けたもの
16	B	集石241	不明	変成岩か　京都市内には無い
17	B	集石241	泥岩（頁岩）	
18	B	集石241	チャート	
19	B	集石241	砂岩	
20	B		チャート	
21	B		砂岩	
22	B		砂岩	
23	B		チャート	
24	D		ホルンフェルス	泥岩が熱変成を受けたもの
25	D		チャートホルンフェルス	チャートが熱変成を受けたもの
26	D		花崗岩	
27	D		砂岩	
28	D		ホルンフェルス	泥岩が熱変成を受けたもの
29	D		花崗岩	
30	D		緑色岩ホルンフェルス	
31	D		花崗岩	
32	D		砂岩ホルンフェルス	砂岩が熱変成を受けたもの
33	D		ホルンフェルス	泥岩が熱変成を受けたもの
34	D		砂岩	
35	D		礫岩とホルンフェルスが混合して変成を受けたもの	



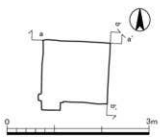
池238使用石の岩石種分布図（1：100）

図　　版

A区2北・東壁土層断面図（1：80）

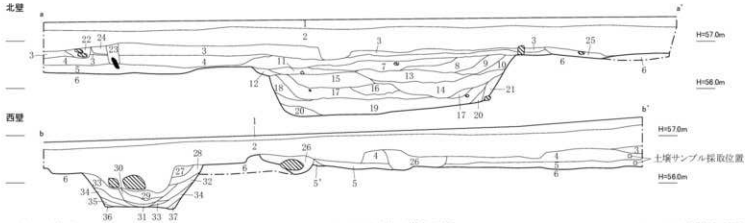


1 10YR3/2黒褐色 砂泥 ―― 近現代盛土 第1層
2 10YR3/3暗褐色 泥砂 粗砂多く混 ―― 近現代遺構
3 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 粗砂多く混 しまり良い 土師器・炭の細片混 ―― 近世盛土 第2層
4 10YR3/3暗褐色 砂泥 粘性強い 粗砂混 ―― 鎌倉時代～室町時代盛土 第3層
層上位に2.5Y8/4浅黄色シルトブロックが混
5 10YR3/3暗褐色 砂泥 10YR2/1黒色砂泥と2.5Y8/4浅黄色シルトがブロック状に混 ―― 鎌倉時代遺構埋土
6 10YR2/1黒色 砂泥 10YR3/3暗褐色砂泥のブロック多く混
7 10YR2/1黒色 砂泥 粗砂少し混 黒ボク土状 ―― 地山 第6層
8 10YR3/2黒褐色 砂泥 粗砂混
9 2.5Y5/3黄褐色 泥砂 粗砂～極細砂多く混 ―― 溝2
10 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂～粗砂 10cm大までの礫多く混 しまり弱い ―― 溝3上層
11 2.5Y4/3オリーブ褐色 砂泥 粗砂非常に多く混 10cm大までの礫多く混 しまり良い
12 10YR4/4褐色 シルト 細砂混
13 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 粗砂多く混 5cm大までの淡黄色シルトブロック・3cm大までの礫混
14 10YR5/2灰黄褐色 極粗砂 2.5Y7/3浅黄色シルトブロック混
15 10YR7/4にぶい黄橙色 極細砂
16 10YR3/4暗褐色 砂泥 粗砂混 シルト質強い
17 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘性強い 炭・土器片混 地山砂ブロック少し混
18 10YR3/3暗褐色 シルト 粗砂ブロック多く混 しまり良い 地山砂・土器小片混
19 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 10YR4/6褐色シルトブロック混
20 10YR4/3にぶい黄褐色 砂泥 シルト質強い 粗砂混じり しまり良い
21 10YR3/2黒褐色 砂泥 10YR2/1黒色砂泥ブロック非常に多く混 風化花崗岩粒混 ―― 溝4上層
22 10YR4/1褐灰色 シルト 粘性強い 粗砂少し混 土器・遺物多く含む ―― 溝4下層
23 10YR3/2黒褐色 シルト 粗砂混
24 10YR2/1黒色 砂泥 2.5Y4/1黄灰色シルトとの混土
25 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂～粗砂 シルト少し混 地山砂混
26 10YR2/1黒色 シルト
27 10YR3/2黒褐色 砂泥 2.5Y5/3黄褐色細砂～粗砂とわ互層 ―― 遺構
28 10YR3/3暗褐色 砂泥 10YR4/2灰黄褐色粗砂混 3cm大までの礫混 ―― 溝1
29 10YR3/3暗褐色 砂泥 粗砂多く混 土師器小片混
30 10YR4/3にぶい黄褐色 砂泥 粘性あり 粗砂少し混 土師器細片混 ―― SK47
31 10YR4/4褐色 砂泥 10YR7/6明黄褐色シルトブロック多く混



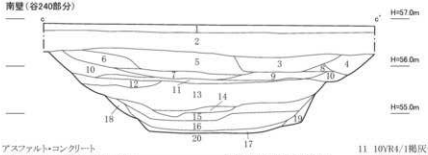
図版 一

図版 2

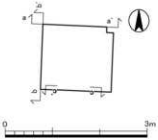


1 アスファルト・コンクリート
2 10YR4/2灰黄褐色～10YR3/1黒褐色 砂泥 ―― 現代盛土・改良土 第1層
3 10YR3/2黒褐色 砂泥 粗砂多く混 しまり強い ―― 鎌倉時代整地土 第4層
4 10YR4/2灰黄褐色 シルト ―― 池238-2 第5層
粗砂少し混褐色鉄分沈着が斑文状となる 瓦・土器・8～20cm大の礫多く混
5 10YR4/1褐灰色 粘土 砂ほとんど含まない ―― 池238-1 第5層
10cm大前後の礫多く混(5'は粗砂が非常に多く混じりしまり強い)
6 2.5Y5/4黄褐色 粗砂～極粗砂 ―― 地山 第6層
7 2.5Y4/1黄灰色 砂泥 大礫混
8 2.5Y5/2暗灰黄色 粗砂
9 10YR4/2灰黄褐色 粘土
10 2.5Y4/3オリーブ褐色 砂泥 粗砂・土器混 粘性強い
11 10YR3/2黒褐色 砂泥 土器混 ―― 谷240上層
12 2.5Y4/3オリーブ褐色 砂泥
13 10YR4/1褐灰色 粘土
14 2.5Y3/1黒褐色 砂泥 しまり強い
15 2.5Y4/1黄灰色 砂泥 粗砂・土器混
16 2.5Y4/1黄灰色 粗砂 土器・木屑混 やや明るめ
17 2.5Y4/1黄灰色 砂泥 土器・木屑混 粘土ブロック多く混
18 5Y4/1灰色 砂泥
19 2.5Y3/1黒褐色 砂泥
20 2.5Y4/1黄灰色 粗砂 礫混
21 2.5Y4/3オリーブ褐色 粗砂
22 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭・焼土粒混 ―― 石組遺構か
23 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭・焼土粒多く混
24 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 2.5Y4/4オリーブ褐色シルトブロック混
25 10YR3/1黒褐色 砂泥 花崗岩粗砂多く混 ―― 溝202痕跡
26 10YR2/1黒色 砂泥 ―― 現代撹乱
27 10YR5/4にぶい黄褐色 砂泥 粗砂多く混 φ2cm以下の礫混 しまり強い
28 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 粗砂多く混 しまり強い
29 10YR2/1黒色 粘土 植物遺体混
30 10YR3/1黒褐色 粘土 粗砂混
31 10YR3/1黒褐色 粘土
32 10YR4/6褐色 砂泥 粗砂多く混
33 10YR3/2黒褐色 砂泥 シルト質強い細砂～粗砂混
34 5Y4/2灰オリーブ色 泥砂
35 5Y4/1灰色 砂泥
36 5Y4/1灰色 泥砂
37 5Y4/2灰オリーブ色 細砂～粗砂
谷240上層
谷240下層
近世杭跡
溝201上層
溝201下層

南壁(谷240部分)



1 アスファルト・コンクリート
2 2.5Y4/3オリーブ褐色～3/1 砂泥 ―― 現代盛土・改良土 第1層
3 2.5Y4/3オリーブ褐色～3/1 砂泥 5のφ2cm大のブロック含む ―― 現代撹乱
4 10YR4/4褐色 砂泥
5 10YR5/6黄褐色 粘土 小礫・炭化物混
6 10YR3/2黒褐色 砂泥 礫混
7 2.5Y4/1黄灰色 砂 黄褐色粗砂混 ―― 谷240上層
8 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 ―― 谷240埋め土
9 10YR4/2灰黄褐色 シルト 炭混
10 10YR3/2黒褐色 砂泥 礫混
11 10YR4/1褐灰色 粘土
12 10YR3/2黒褐色 砂泥 粗砂混
13 2.5Y3/1黒褐色 砂泥 礫混
14 5Y4/1灰色 粗砂 2.5Y2/1黒色砂泥ブロック混
15 2.5Y2/1黒色 砂泥
16 2.5Y3/1黒褐色 砂泥 5Y4/1灰色粗砂多く混
17 5Y4/1灰色 粗砂 礫多く混
18 2.5Y3/1黒褐色 粗砂
19 2.5Y4/1黄灰色 粗砂
20 2.5Y5/4黄褐色 粗砂～極細砂 ―― 地山 第6層
谷240上層
谷240下層



B区北・西・南壁土層断面図(1:80)

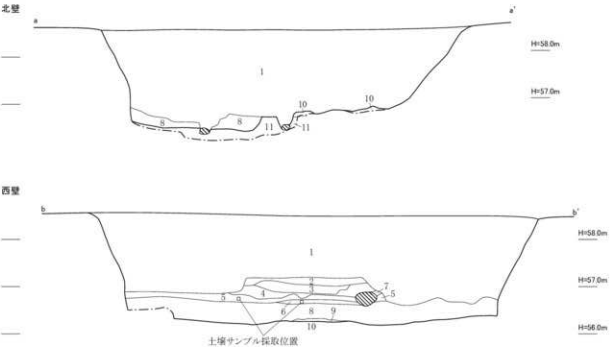
C区北・西・南壁土層断面図1（1：80）

4 図版

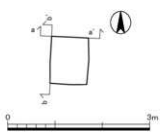
1	10YR4/3にぶい黄褐色　泥砂	現代盛土・改良土　第1層
2	10YR5/8黄褐色　泥砂　粗砂混　φ30cm大までの巨礫多く混	現代盛土　第1層
3	10YR4/2灰黄褐色　砂泥　粗砂混　φ5cm以下の炭・焼土粒混　しまり良い	近現代整地土　第1層
4	10YR4/2灰黄褐色　砂泥　3よりやや明るい　φ1cm以下の炭・焼土粒混	
5	10YR4/3にぶい黄褐色　砂泥　φ1cm以下の炭・焼土粒混	近世整地土　第2層
6	10YR3/3暗褐色　砂泥　φ15cm大前後の巨礫・近世瓦多く混　しまりやや弱い	
7	10YR4/4褐色　泥砂～粗砂	
8	2.5Y4/3オリーブ褐色　砂泥　粗砂・φ1cm以下の炭・焼土粒混　しまり良い	
9	10YR3/3暗褐色　砂泥　φ5mm以下の炭・焼土粒混　しまり良い	
10	2.5Y4/3オリーブ褐色　泥砂　粗砂多く含む	鎌倉時代～室町時代整地土　第3層
11	2.5Y3/1黒褐色　砂泥　10YR6/8明黄褐色シルトブロック混	
12	10YR4/2灰黄褐色　砂泥	
13	10YR3/3暗褐色　砂泥	
14	2.5Y3/3暗オリーブ褐色　砂泥　粗砂・炭・焼土粒やや多く混	鎌倉時代整地土　第4層
15	10YR3/2黒褐色　粘土　花崗岩由来の粗砂混　5YR2/4シルト多く混	
16	2.5Y3/3暗オリーブ褐色　砂泥　10YR4/6褐色砂泥との混土	
17	10YR4/2灰黄褐色　シルト　粗砂少し混　褐色鉄分沈着が斑文状となる	池238-2　第5層
	瓦・土器・8～20cm大の礫多く混	
18	10YR4/1褐灰色　粘土　砂はとんど含まない　10cm大前後の礫多く混	池238-1　第5層
19	2.5Y4/1黄灰色　泥砂　粗砂～極粗砂・2.5Y3/2黒褐色シルトブロック混	池の層整地土
20	10YR4/3にぶい黄褐色　泥砂　花崗岩由来の粗砂多く混	
	10YR3/2黒褐色シルトブロック多く混	
21	10YR3/1黒褐色　シルト～粘土　花崗岩由来の極粗砂混	谷240上層
22	10YR4/3にぶい黄褐色　極粗砂　φ5cm大までの10YR3/2黒褐色シルトブロック混	
23	2.5Y3/1黒褐色　シルト～粘土	
24	2.5Y5/2暗灰黄色　細砂～粗砂	
25	2.5Y2/1黒色　細砂　2.5Y5/2粗砂がまだらに混　植物遺体混	
26	2.5Y3/1黒褐色　シルト　植物遺体多く混	
27	10YR2/1黒色　砂泥　花崗岩由来の粗砂混	
28	5Y2/1黒色　砂泥　花崗岩由来の極粗砂多く混　特に層下位に集積	
29	2.5Y3/1黒褐色　砂泥　層下位に花崗岩由来の極粗砂集積	谷240上層
30	2.5Y3/1黒褐色　砂泥　23と2.5Y5/3黄褐色粗砂～極粗砂（地山）との混土	
31	5Y4/1灰色　砂泥　2.5Y5/3黄褐色粗砂（地山）混	
32	2.5Y4/3オリーブ褐色　泥砂　花崗岩由来の極粗砂多く混　特に層下位に集積	谷240下層
33	2.5Y4/2暗灰黄色　砂泥	
34	2.5GY5/1オリーブ灰色　細砂～極粗砂　層下位に向けて粒径大きくなる　淘汰良い	
35	2.5Y3/1黒褐色　砂泥　花崗岩由来の粗砂混	
36	2.5YGY6/1オリーブ灰色　極粗砂　2.5Y3/1黒褐色砂泥との互層	
37	2.5Y4/3オリーブ褐色　砂泥　10YR3/2黒褐色・2.5Y6/6シルトブロック多く混	井戸101
38	2.5Y4/3オリーブ褐色　砂泥	SX102
39	10YR3/3暗褐色　砂泥　焼土・炭粒やや多く混	溝202
40	10YR4/3にぶい黄褐色　砂泥　焼土・炭粒混	
41	10YR3/2黒褐色　砂泥	
42	10YR5/4にぶい黄褐色　粗砂	
43	10YR5/4にぶい黄褐色　シルト	
44	10YR3/2黒褐色　砂泥　焼土・炭粒混	
45	10YR2/2黒褐色　シルト	
46	10YR3/3暗褐色　砂泥	SX148
47	10YR4/3にぶい黄褐色　砂泥	
48	10YR3/3暗褐色　砂泥　花崗岩由来の粗砂多く混	
50	7.5YR3/3暗褐色　砂泥	
51	10YR3/3暗褐色　砂泥　粗砂・焼土・炭粒混	
52	2.5Y3/1黒褐色　砂泥	SK120
53	2.5Y3/1黒褐色　砂泥	SK124
54	10YR3/4暗褐色　泥砂　10YR5/6黄褐色シルトブロック混	SK125
55	10YR4/2灰黄褐色　砂泥　花崗岩由来の粗砂・炭・焼土混	柱穴160
56	7.5YR3/4暗褐色　砂泥　炭・焼土・土師器混	
57	7.5YR3/3暗褐色　砂泥　花崗岩由来の粗砂混	
58	2.5Y5/3黄褐色　細砂～極粗砂　ラミナ明瞭　淘汰良い	地山　第6層

C区北・西・南壁土層断面図2

D区北・西壁土層断面図（1：80）

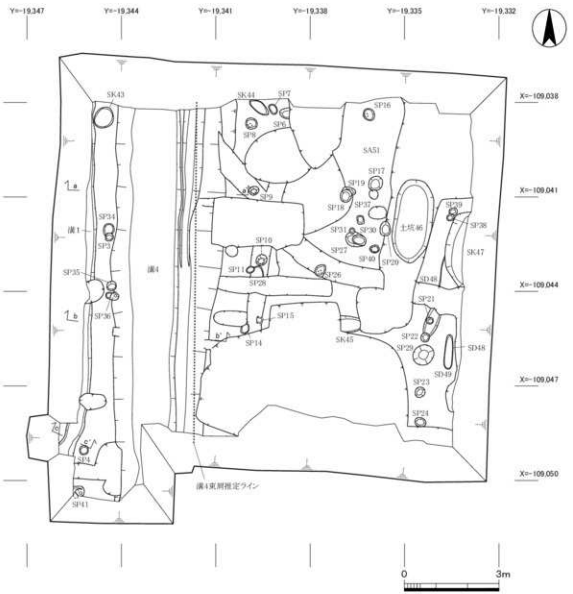


1　5Y7/3浅黄色～N8/白色　砂泥 ―― 現代盛土・改良土　第1層
2　2.5Y5/6黄褐色　砂泥　2.5Y4/1黄灰色砂泥との混土　しまり良い ―― 鎌倉時代～室町時代整地土　第3層
3　10YR5/4にぶい黄褐色　砂泥　花崗岩由来の極粗砂混　しまり良い ―― 鎌倉時代整地土　第4層
4　10YR2/1黒色　砂泥　炭・焼土粒混 ―― 池埋没後土壌化土
5　10YR4/1褐灰色　シルト　花崗岩由来の粗砂やや多く混
炭・焼土粒・瓦・土器混　層下位に鉄分集積 ―― 池238　第5層
6　2.5Y3/1黒褐色　シルト　花崗岩由来の粗砂・炭粒・瓦・土器少し混 ―― 池238　第5層
7　10Y3/2オリーブ黒色　シルト　花崗岩由来の粗砂多く混　しまり良いが ―― 池石掘方
8　10YR3/1黒褐色　シルト　混入物少ない ―― 谷240
9　5Y3/1オリーブ黒色　砂泥　細砂～粗砂・植物遺体混 ―― 谷240
10　5Y6/2灰オリーブ色　粘土 ―― 地山　第6層
11　2.5Y4/1黄灰色　粘土 ―― 地山　第6層

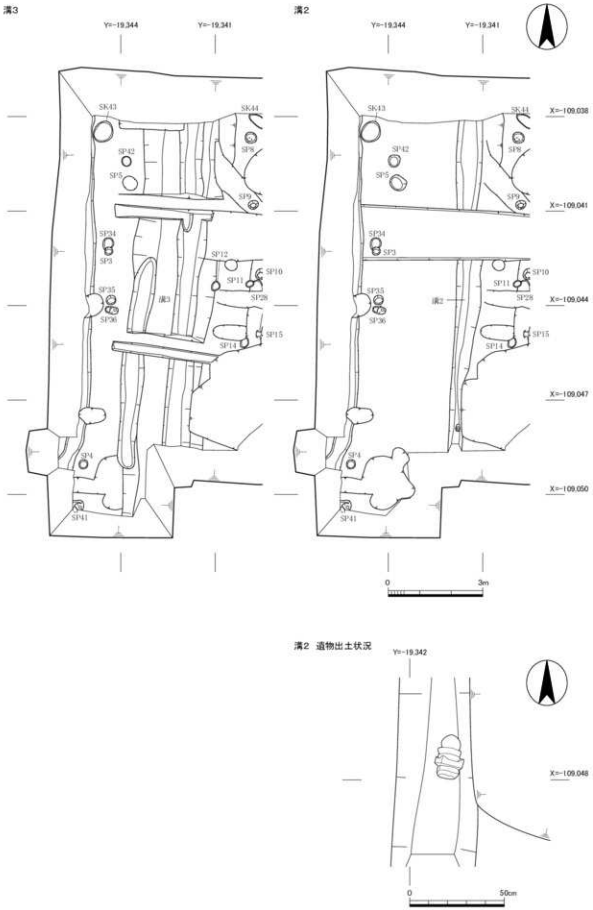


図版 5

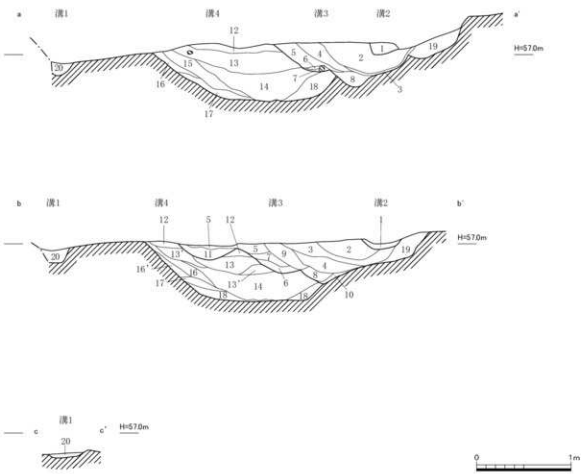
図版6



A区第6層上面平面図（1：120）

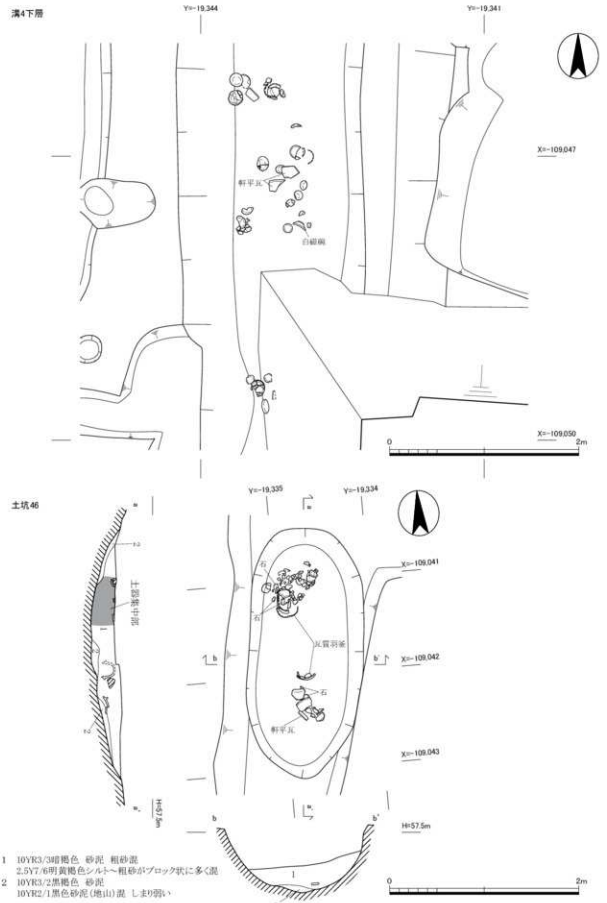


A区溝3・2平面図（1：20、1：120）

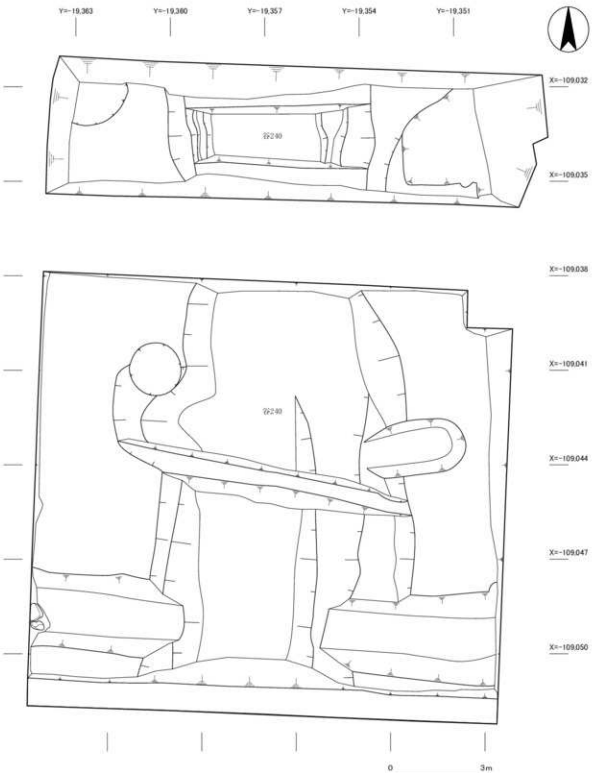


1 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂～粗砂 10cm大までの礫多く混 しまり弱い ——— 溝2
2 2.5Y4/3オリーブ褐色 砂泥 粗砂非常に多く混 10cm大までの礫多く混 しまり良い ——— 溝3上層
3 10YR3/3暗褐色 シルト 粗砂少し混 しまり良い
4 10YR4/4褐色 シルト 細砂混
5 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 粗砂多く混 5cm大までの浅黄色シルトブロック・3cm大までの礫混
6 10YR7/4にぶい黄橙色 極細砂
7 10YR5/2灰黄褐色 極粗砂
8 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘性強い 炭・土器小片混 地山粗砂ブロック少し混
9 10YR3/2黒褐色 シルト 粗砂・土器片混
10 10YR2/1黒色 シルト 粗砂少し混
11 10YR7/3にぶい黄橙色 シルト 淘汰良い 層下面に鉄分沈着 ——— 溝3下層
12 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 粗砂非常に多く混 10YR2/1黒色砂泥ブロック少し混 ——— 溝4上層
13 10YR3/2黒褐色 砂泥 10YR2/1黒色砂泥ブロック非常に多く混 風化花崗岩粒混(13'は砂質強い)
14 10YR4/1褐灰色 シルト 粘性強い 粗砂少し混 完形の遺物多く含む
15 10YR4/2灰黄褐色 極粗砂 シルト少し混
16 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂～粗砂 シルト少し混 地山砂混(16'は地山砂多く混) ——— 溝4下層
17 10YR2/1黒色 シルト
18 10YR3/2黒褐色 砂泥 粗砂混
19 10YR3/3暗褐色 砂泥 粗砂非常に多く混 しまり良い 地山砂・土器小片混 ——— 溝3下層
20 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 粗砂少し混 しまり弱い ——— 溝1

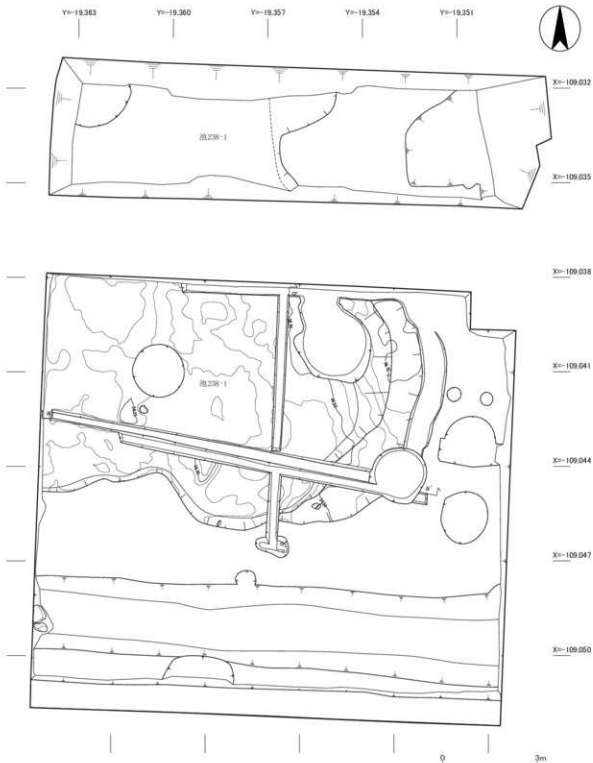
A区溝１～４土層断面図（１：40）



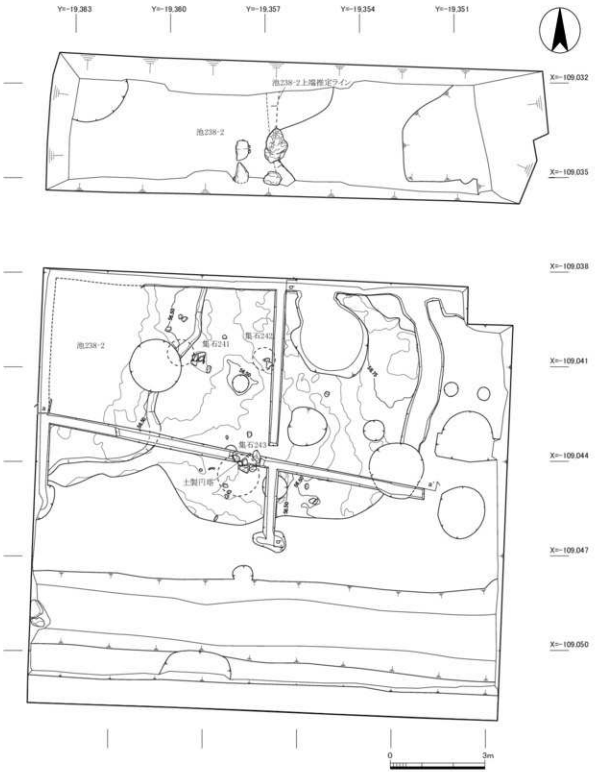
A区溝４下層・土坑46遺物出土状況図（１：40）



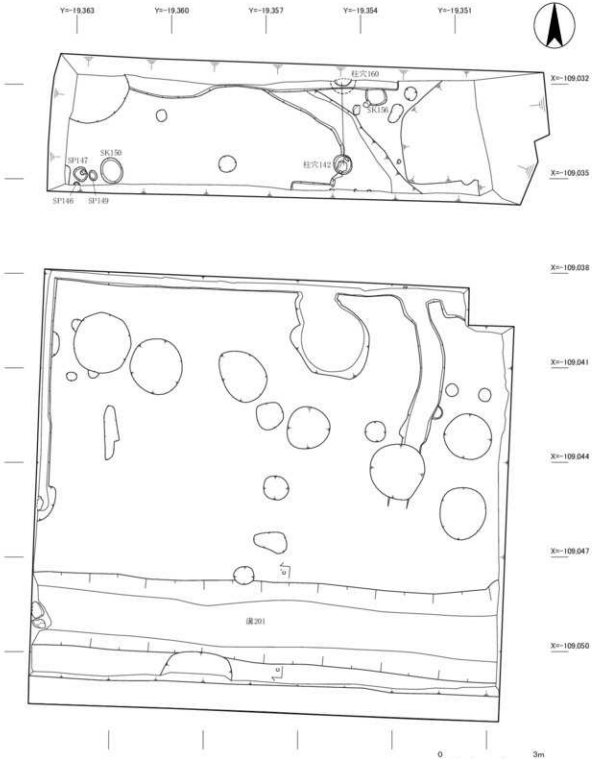
B・C区第6層上面平面図（1：120）



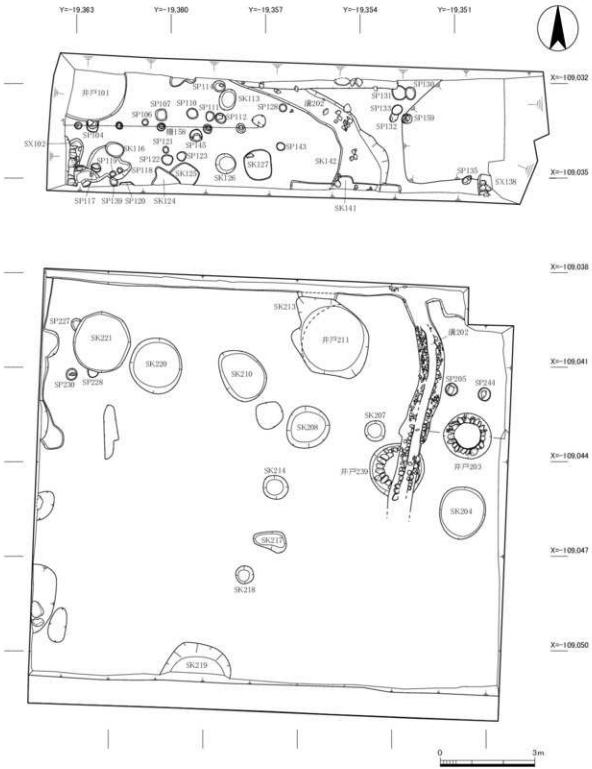
B・C区池238－1平面図（1：120）



B・C区池238－2平面図（1：120）



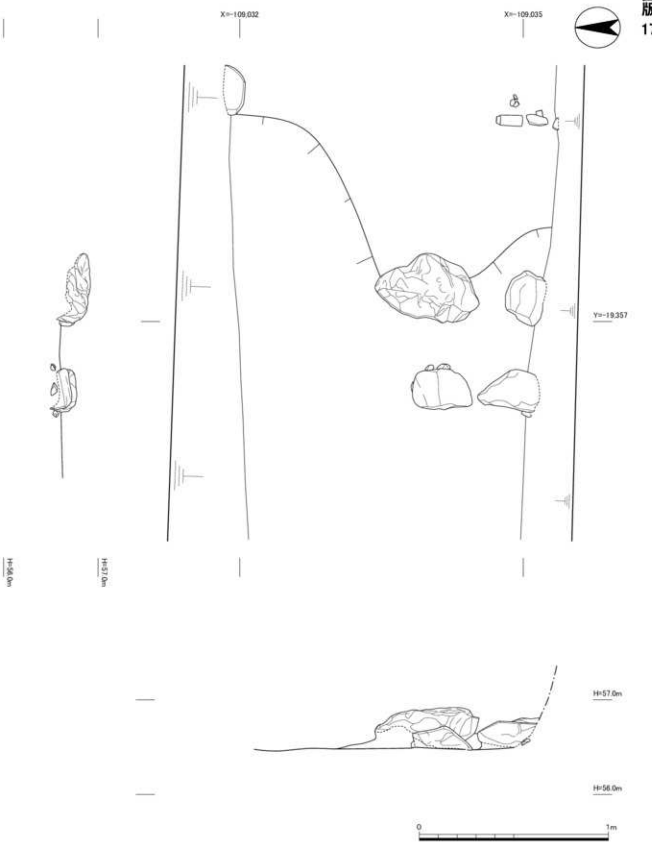
B・C区第４層上面平面図（１：120）



B・C区第3層上面平面図（1：120）

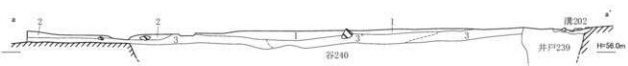
B区池238－1平面図（1：50）

B区池238－2平面図（1：50）



C区池238－2景石平面・立面図（1：40）

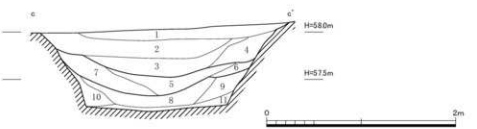
池238 中央東西土層断面図



池238 中央南北土層断面図

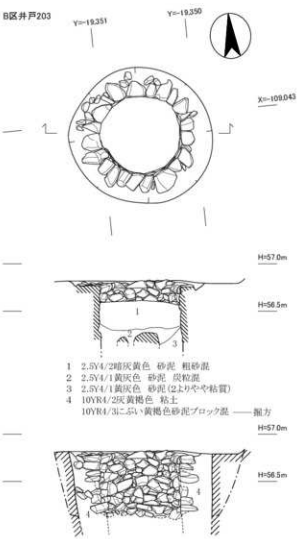
1 10YR4/2灰黄褐色 泥砂 粗砂多く混 しまり強い ――― 鎌倉時代整地土
2 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粗砂少し混 褐色の鉄分沈着が斑文状となる 瓦・土器・8～20cm大の礫多く混 ――― 池238-2
3 10YR4/1褐灰色 粘土 砂ほとんど含まない 10cm大前後の礫多く混(3'は粗砂・焼土・炭粒が多く混 しまり強い) ― 池238-1

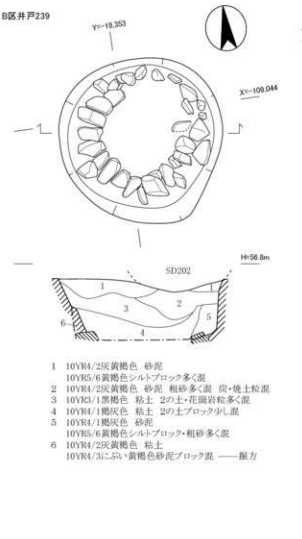
溝201 土層断面図

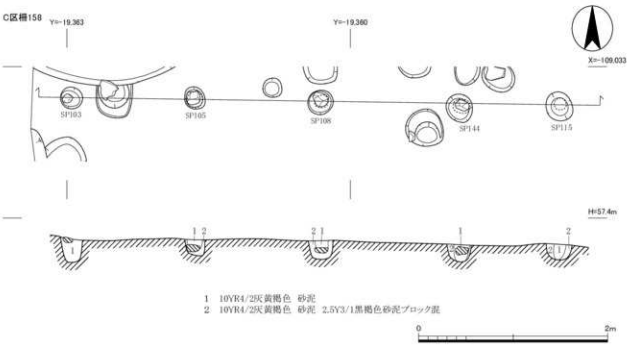


1 10YR7/3にぶい黄橙色 砂泥 粗砂多く混 10YR5/6黄褐色シルトブロック・瓦・土器・大礫多く混 しまり強い ―― 上層
2 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 粗砂多く含む 土器片・大礫多く混 しまり強い ――
3 10YR3/2黒褐色 泥と砂泥の混土 10YR5/6黄褐色シルトブロック混 礫少し混 ―― 中層
4 10YR4/4褐色 砂泥 粗砂混 ――
5 10YR2/1黒色 粘土 板状木材・大礫少し混 腐植 ――
6 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 粗砂多く混
7 10YR3/2黒褐色 砂泥 シルト質強い 細砂～粗砂混
8 5Y3/1オリーブ黒色 粘土 腐植土
9 5Y4/2灰オリーブ色 砂泥 シルトと細砂の互層
10 7.5YR5/1褐灰色 粗砂～極粗砂
11 10YR4/6褐色 砂泥 粗砂多く混
12 10YR3/2黒褐色 砂泥 シルト質強い 細砂～粗砂混
13 5Y4/1灰色 泥砂 ―
下層

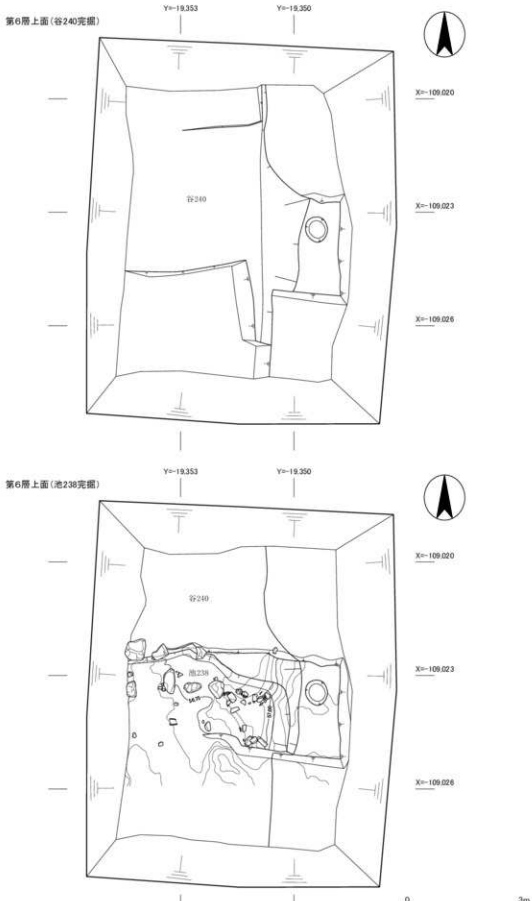
B区池238・溝201土層断面図（1：80、1：40）



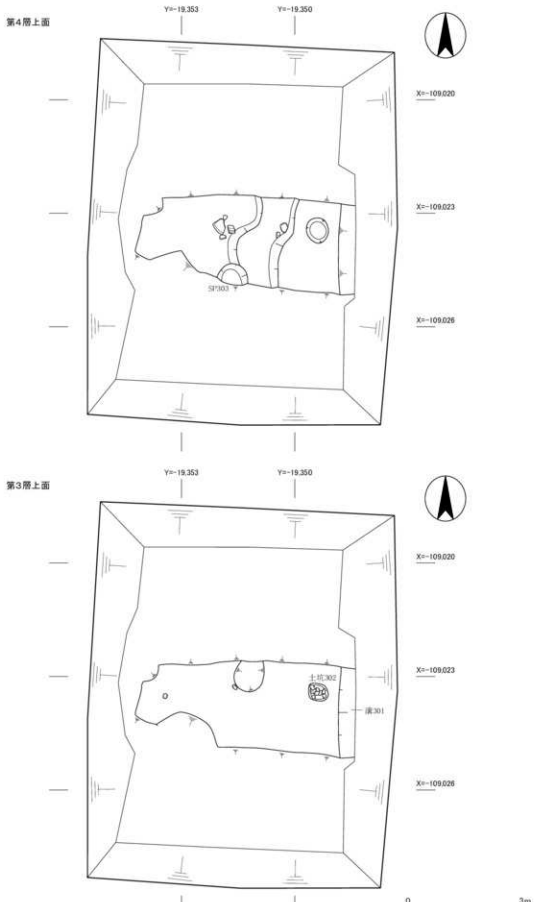




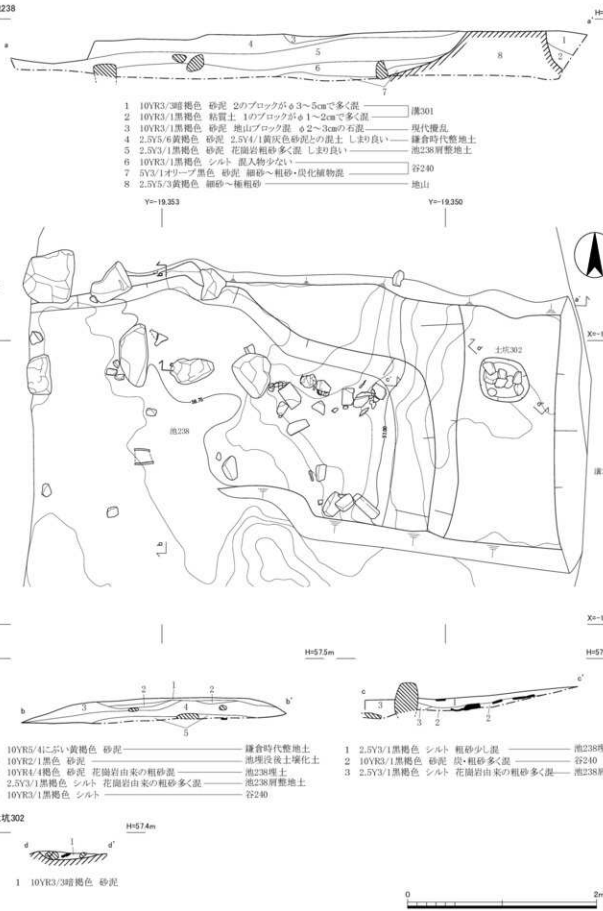
B・C区江戸時代遺構平面・断面・立面図（1：40）


第6層上面（谷240完掘）
Y=-19,353
Y=-19,350
X=-109,020
X=-109,023
X=-109,026
谷240
第6層上面（池238完掘）
Y=-19,353
Y=-19,350
X=-109,020
X=-109,023
X=-109,026
谷240
池238
0
3m

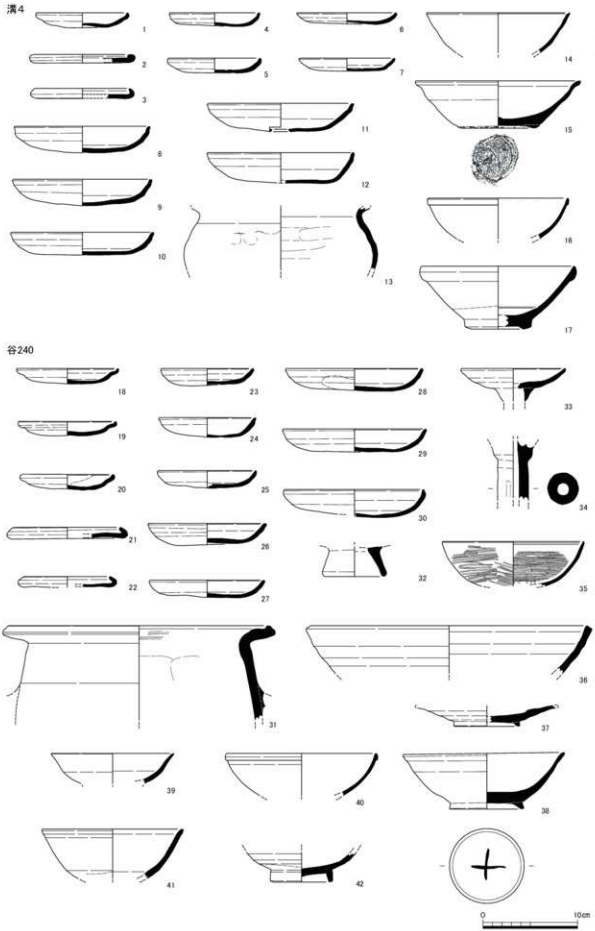
D区平面図1（1：100）


第4層上面
Y=-19,353
Y=-19,350
X=-109,020
X=-109,023
X=-109,026
SF303
第3層上面
Y=-19,353
Y=-19,350
X=-109,020
X=-109,023
X=-109,026
土坑302
溝301
0
3m

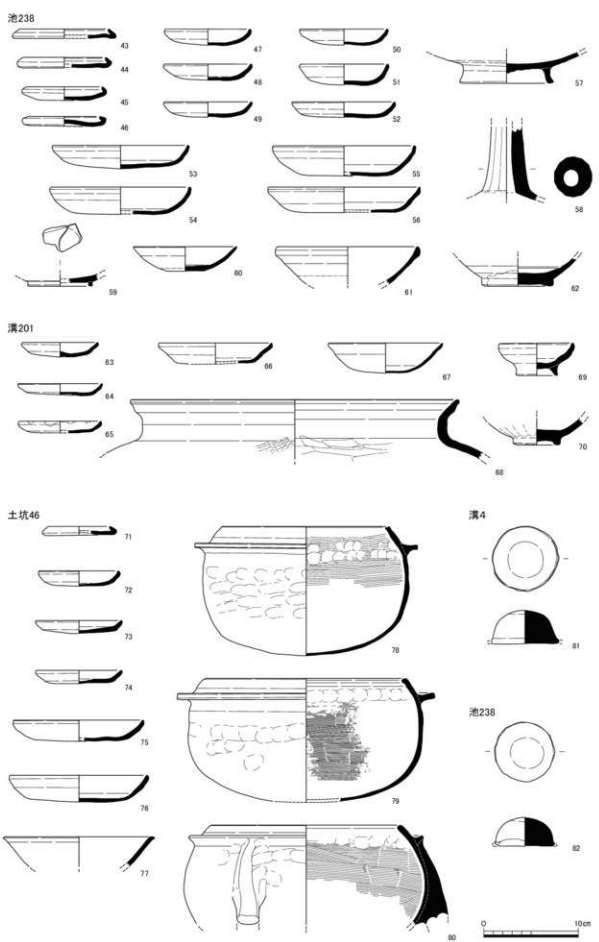
D区平面図2（1：100）



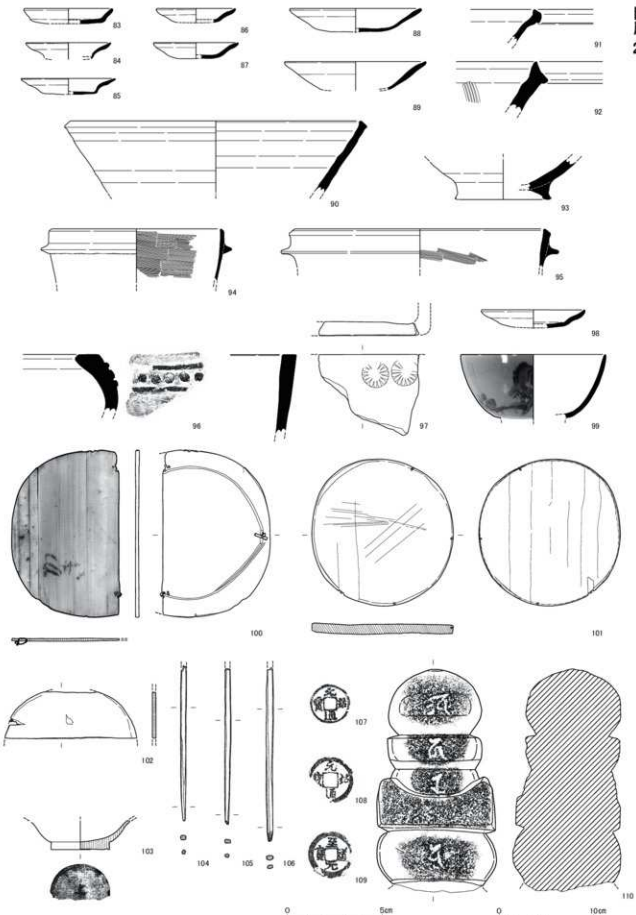
D区遺構平面・断面図（1：40）



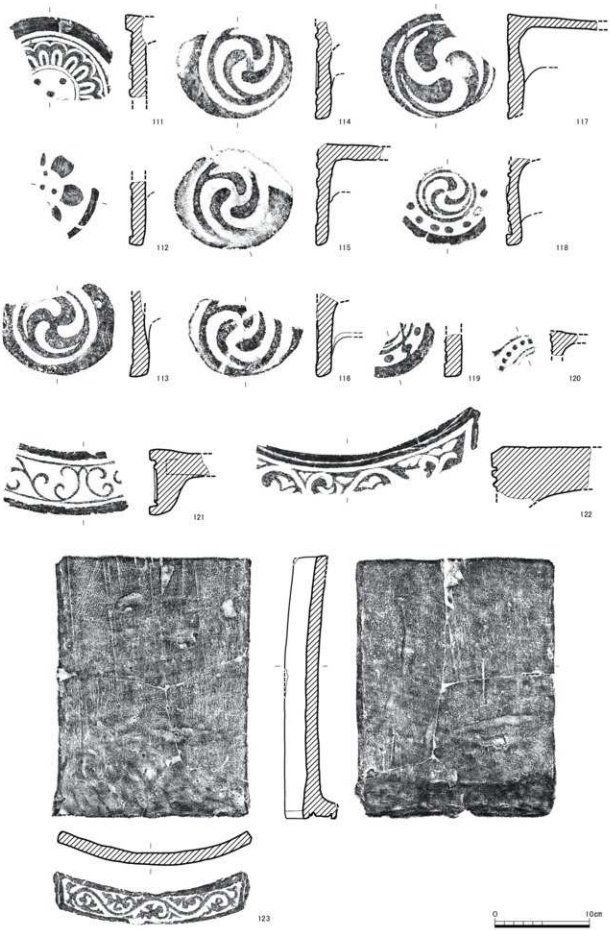
出土土器類1（1：4）



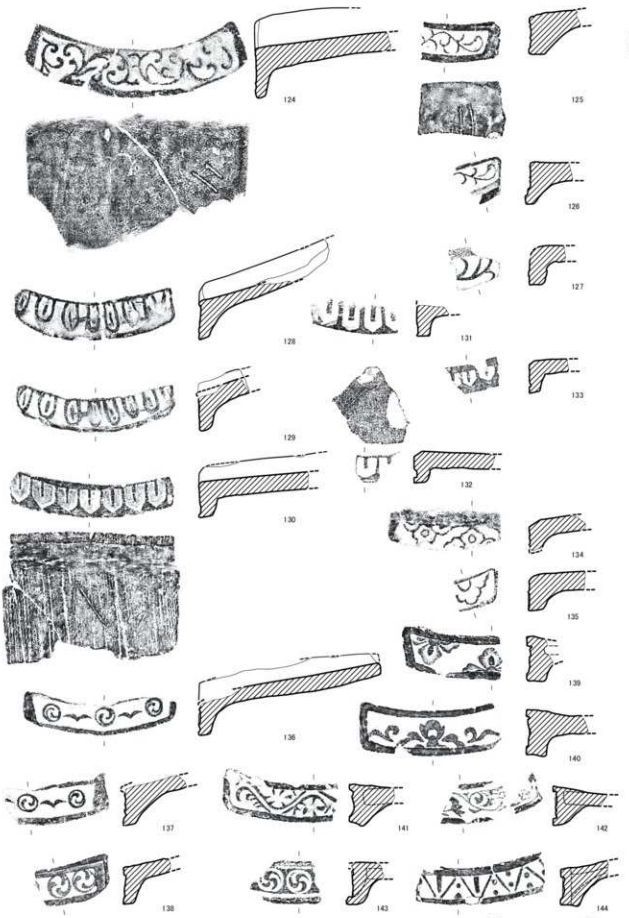
出土土器類2、土製品（1：4）



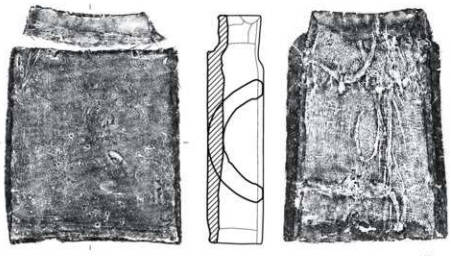
出土土器類3、木製品、金属製品、石製品（1：2、1：4）

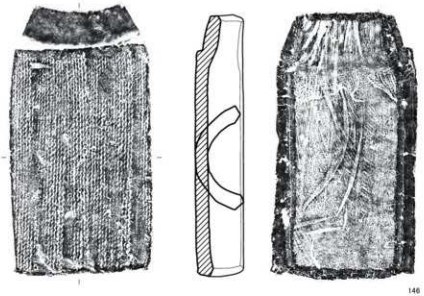


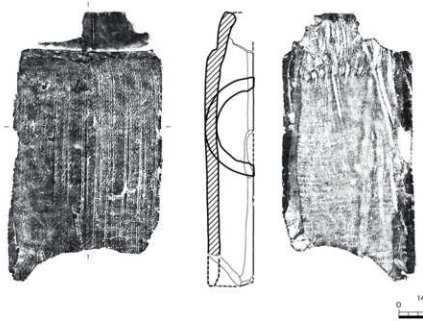
出土瓦類1（1：4）


124
125
126
127
128
131
129
133
132
130
134
135
139
136
140
137
141
142
138
143
144
0
10cm

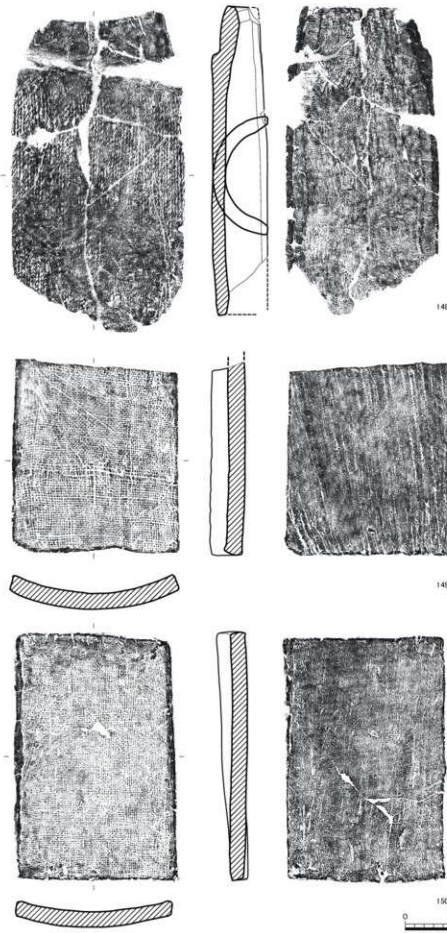
出土瓦類2（1：4）



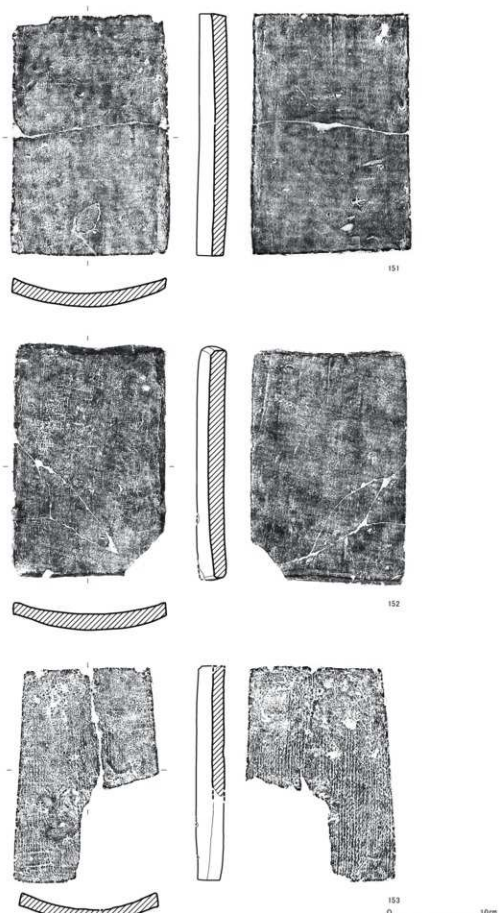




出土瓦類3 （1：4）



出土瓦類4（1：4）



出土瓦類5（1：4）

1．調査地全景（上が北）

2．A区完掘全景（北から）

1．A区溝4
完掘状況（北西から）

2．A区溝3
完掘状況（北西から）

3．A区溝2
完掘状況（南東から）

1．A区溝２・３・４
土層断面（南から）

2．A区溝４下層遺物
出土状況（北西から）

3．A区土坑46遺物
出土状況（北西から）

1．B区谷240
完掘状況（東から）

2．B区谷240
完掘状況（北から）

3．B区池238－1
完掘状況（東から）

1．B区池238－2
完掘状況（東から）

2．B区池238－2集石
検出状況（南東から）

3．B区池集石243
土製円塔
出土状況（北西から）

1．C区池238－2景石
検出状況（北から）

2．C区池238－2
完掘状況（南東から）

3．C区谷240
完掘状況（南東から）

1．B区溝201
検出状況（東から）

2．B区溝201
完掘状況（東から）

3．B区溝201
土層断面（東から）

1．B区江戸時代遺構
完掘状況（南から）

2．D区池238
完掘状況（南から）

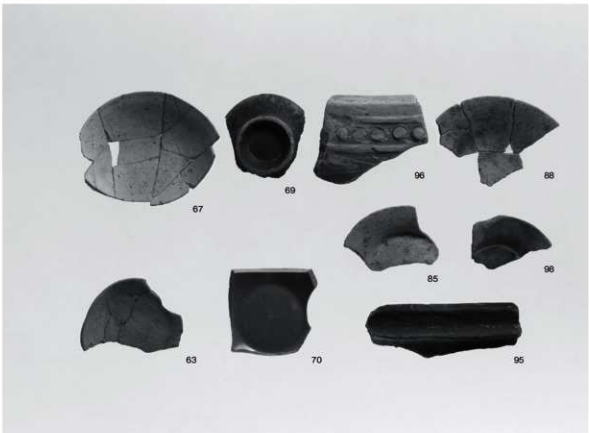
3．D区谷240
完掘状況（南から）

1．溝４出土遺物

2．谷240出土土器類

1．池238出土土器類

2．土坑46出土土器類



1．溝２・３出土遺物

2．出土軒瓦１（山城系）

1．出土軒瓦２（播磨系）

2．谷240出土墨書山茶碗

3．谷240出土軒丸瓦

4．谷240出土軒平瓦１

5．谷240出土軒平瓦２

報告書抄録

ふりがな	しらかわがいくあとはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	白河街区跡発掘調査報告書
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大西健吾　松元美由紀　斉藤崇人　井上智仁　野地ますみ　米倉美穂
編集機関	株式会社 文化財サービス
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58
発行所	株式会社 文化財サービス
発行年月日	2019年9月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
白河街区跡	京都市左京区岡崎天王町26番地5	26100	417	34度57分24.8秒	135度42分54秒	2019年3月25日～2019年7月12日	531㎡	ホテル建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白河街区跡	寺院 邸宅	平安時代	溝 谷 園池	土師器 白色土器 灰釉陶器 白磁 瓦 土製円塔 木製品	・平安時代後期の白河街区区画溝とみられる南北溝を検出した。 ・平安時代後期以前まで存在していた南北方向の谷地形を確認した。谷埋没後の上面で、湿地状の地勢を利用した平安時代末期の園池を検出した。 ・園池の南では鎌倉時代初頭に造られた東西溝を検出した。 ・上記平安時代後期の南北溝埋没後、ほぼ同じ位置に造られた鎌倉時代～室町時代の溝を検出した。 ・江戸時代の遺構は、現在の岡崎別院庭園池の旧排水路の可能性のある石組溝や、石組井戸などを検出した。
		鎌倉時代	溝 土坑 柱穴等	土師器 須恵器 瓦質土器 白磁・青磁	
		室町時代	溝 柱穴等	土師器 須恵器 瓦質土器	
		江戸時代	溝・石組溝 井戸 櫓	土師器 磁器 一石五輪塔	

白河街区跡発掘調査報告書

発行日　2019年9月30日

編　集　株式会社　文化財サービス
〒612-8372 京都市伏見区北端町58
TEL 075-611-5800

印　刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る
TEL 075-256-0961